

0057796000

0057796-000

397.3-H64ウ

ソロモン海上決戦

平出英夫・著

興亜日本社

昭和18

AJG

397.3
H64

海軍本大

海軍大佐
平出英夫

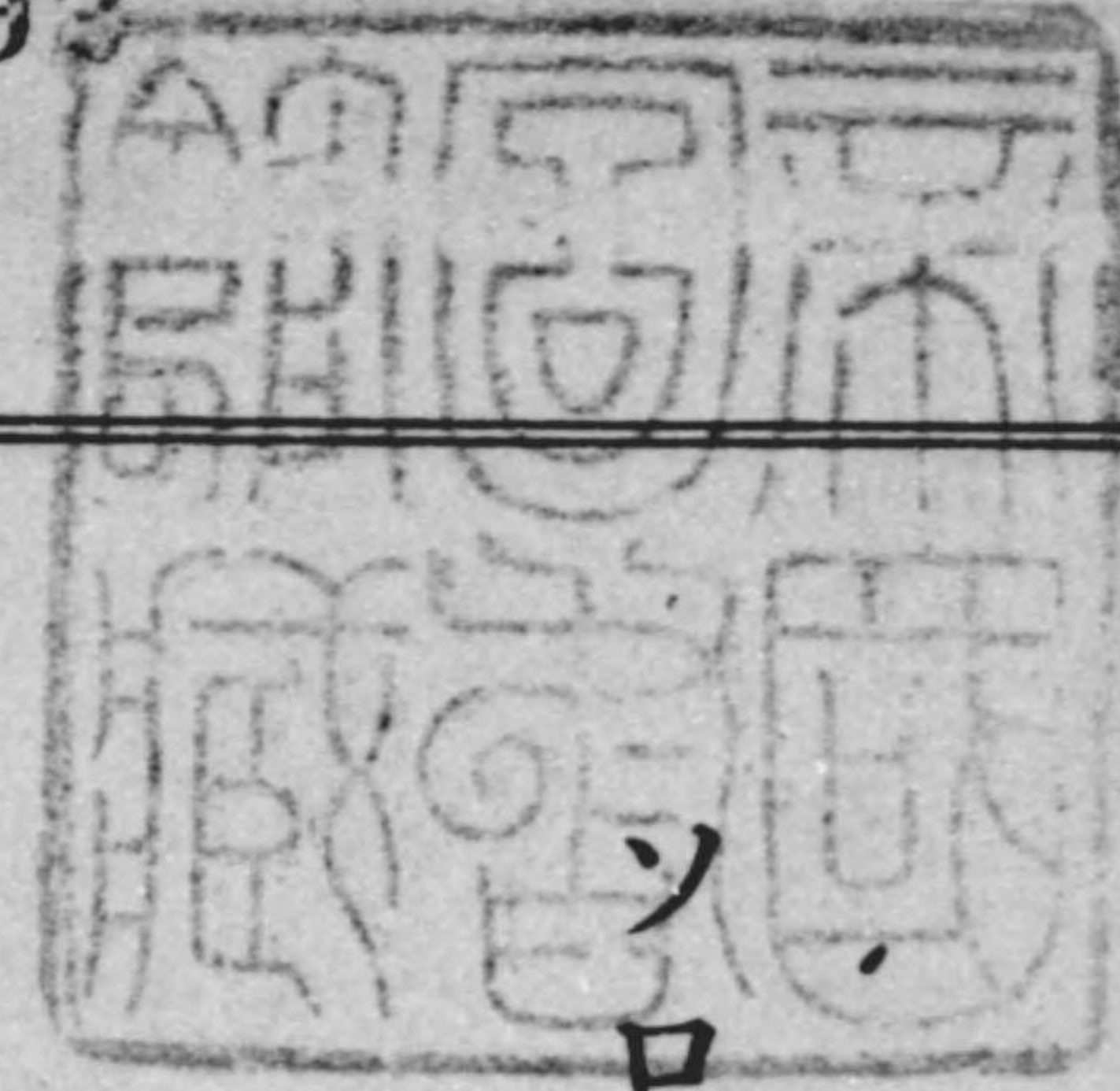
シモロソ
上海決戦



興亞日本社

397.3
H64

292



海軍大佐 平出英夫

ソロモン海上決戦

興亞日本社版

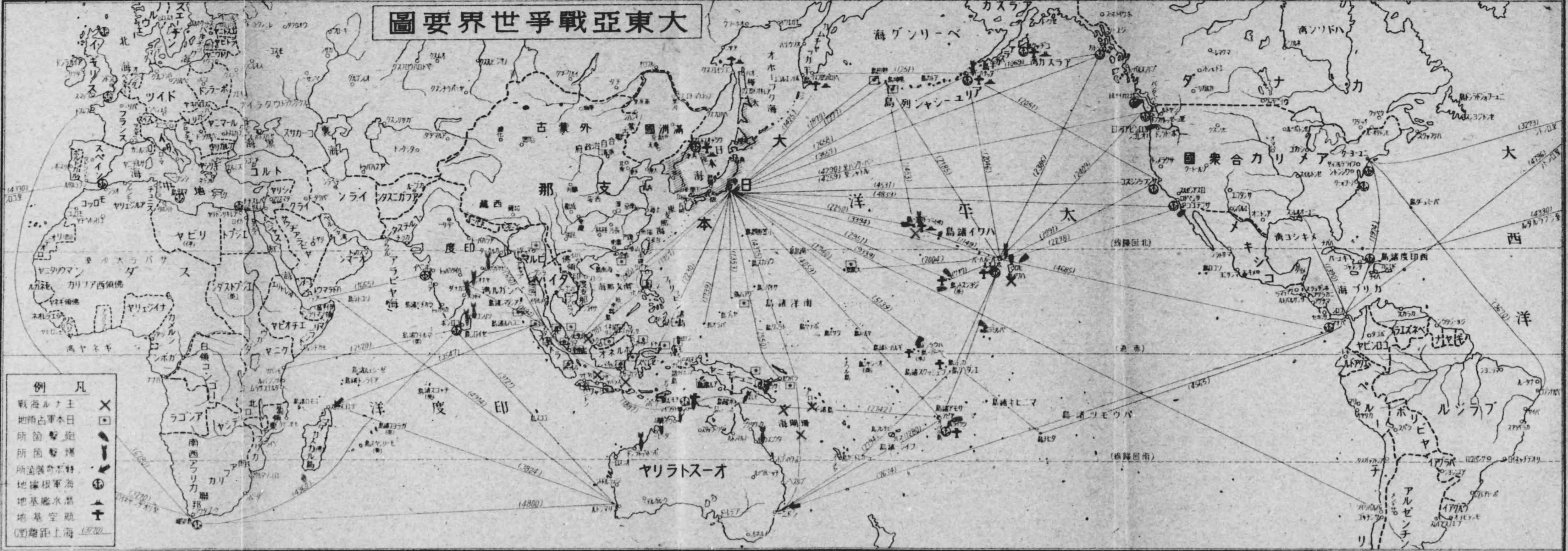


第一編		第二編		第三編		第四編		第五編		第六編	
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7
8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9
10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12
13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13
14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14
15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15
16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16
17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17
18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18
19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21
22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22
23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23
24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24
25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27
28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28
29	29	29	29	29	29	29	29	29	29	29	29
30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30
31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31
32	32	32	32	32	32	32	32	32	32	32	32
33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33
34	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34
35	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35
36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36
37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37
38	38	38	38	38	38	38	38	38	38	38	38
39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39
40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40

裝幀 恩地孝四郎

平出海軍報道部課長 三部作
 第一輯 米英艦隊擊滅
 第二輯 作戦一萬湮
 第三輯 ソロモン海上決戦
 錢八千 錢十八册各

大東亞戰爭世界要圖



- 例凡
- 戦海軍主 X
 - 地陸占軍本日 □
 - 所箇撃砲 砲
 - 所箇撃機 機
 - 所箇襲奇海 艦
 - 地據根軍海 艦
 - 地基艦水島 艦
 - 地基空航 機
 - 距離上海 距離

964
15

一、南太平洋の死闘戦……………(三)

 地域戦から準備戦……………(三)

 太平洋の第二戦線……………(七)

 アリユーンシャンの反攻戦……………(一三)

 マキン島の反撃失敗……………(一六)

 ソロモンの海上決戦……………(一八)

 敵航母「ワスプ」の最期……………(二九)

 太平洋の關ヶ原合戦……………(三六)

 壯烈、南太平洋海戦……………(四三)





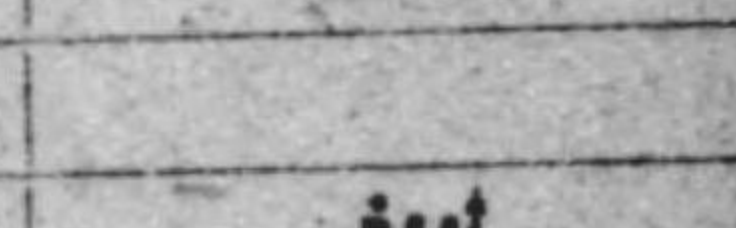










 第三次ソロモン海戦の戦艦戦……………(五一)

 ルンガ沖大夜戦……………(六一)

目次

開戦以來十七年十二月七日迄の大本營發表による綜合戦果

海軍の戦果

航空母艦 (水母ヲ含ム)	
甲級巡洋艦	
乙級巡洋艦	
驅逐艦	
特務艦	
潜水艦	
砲艦	
敷設艦	
掃海艦	
魚雷艦	
その他の小艦艇	
特設艦船	
艦艇未詳	
船	
飛行機	

二、ソロモン海域の新展開……………(七)

- 注視の島嶼ガダルカナル……………(七)
- アメリカ海兵隊の装備……………(七)
- 皇軍上陸作戦……………(八〇)
- ソロモンの戦略的意義……………(八一)
- ガダルカナルを喪失せば……………(八三)
- 幾何級數的戦果の基因……………(八三)
- 不滅の殊勳、第二特別攻撃隊……………(八七)

三、アメリカの對日新作戦……………(八九)

- 沈まざる航空母艦……………(八九)
- 沈黙の祈禱日……………(九六)

- 敵潜水艦のゲリラ戦……………(一〇三)
- 日本本土を狙ふ……………(一〇)

四、必殺撃滅の海軍魂……………(一六)

- 捨身と精根でつくる可能……………(一六)
- 没我の精神……………(二〇)
- 海軍の猛訓練……………(二四)
- 魂こもる特殊潜航艇……………(三〇)
- 魂の勝利……………(三四)

五、アメリカの激増する生産力……………(四一)

- 敵の造艦は進捗する……………(四一)
- 建造計畫大改變……………(四四)

乗員の養成……………(一五二)

六、勝ち抜くための生産戦……………(一六〇)

 戦闘と戦争……………(一六〇)

 海と船への闘争……………(一五五)

 職場の女性に期待するもの……………(一七五)

七、心の米英撃滅……………(一七六)

 敵の精神的謀略……………(一七六)

八、勝ち抜くための条件……………(一八六)

 勝利への鍵……………(一八六)

装幀 恩地孝四郎

ソロモン海上決戦

一、南太平洋の死闘戦

地域戦から準備戦

大東亞戦争開戦以來、わが國章旗と軍艦旗は、太平洋及び印度洋を壓して、へんぼんと翻へるに至つた。嘗て世界の誰が、この現實を豫想し得たであらう。

大御稜威の下、まことに日本の國威隆々たる世界的顯現であると云はねばならない。しかし、敵は相つゞ敗戦にもかゝはらず、豊富なる物資力と、強大なる生産力にもを云はせて、執拗なる反撃を企圖してゐるのである。われわれは、敵がいかに新手をもつて出撃し來ようとも、その出鼻を徹底的に叩き、息の根を絶たねばやまないの

である。

銘記すべき、昭和十六年十二月八日——あの日の感激は、今尙われわれの胸底深くたぎり立つてゐるのであるが、開戦第二年は、さらに一層、敵撃滅への「國民總進軍」の年でなければならぬのである。

今にして思へば、息づまる昭和十六年十二月こそは、帝國はA、B、Dの經濟封鎖を受け、逆に、米英蘭は、南方の諸地域における戰略態勢を、日一日と強化しつつあつたのであつた。

あと、二三箇月もたてば、米英が自信をもつて、日本にたいして攻撃をなし得る危険な情勢を胎んでゐたのである。そこで、帝國としては、最後の「生か死か」といふ竿頭に立ち、つひに開戦に立ち至つたのである。アメリカの天人俱に許さざる挑戦によるものであることは、今更いふまでもない。

さて、戦争第一年の作戰經過は、その過半の戦況や検討については、さきに述べた

『米英艦隊撃滅』及び、その續篇『作戰一萬哩』の二書を読んで貰へば判る通り、その前半は、大東亞建設の爲の地域的な戦争であつた。そのことを、もう少し詳しく言ふならば、ハワイ、マレー沖の海戦によつて、日本はかういふ地域的な戦争をするのに邪魔な勢力を撃破し、敵が妨害することができないやうにしておいて、地域的な戦争をはじめたわけである。かうして、マライ、フィリッピン、セレベス、スマトラ、ジャワ等といふやうに、次々と、席卷して行つたことをかんがへれば、こゝに大東亞建設の「地域戦」といふものゝ意味がわかつてくるのであるが、かくして帝國は戦争遂行上、必須の戰略態勢の基礎を確保したのであつた。これが、戦争第一年における前半の戦争の形態である。

つぎに、戦争第一年における後半は、帝國が長期持久の戰略態勢を強化するための準備戦争であつたといふことができるのである。

アメリカ、濠洲の海軍及び空軍を撃破すること、さういふ戦争が第一年の後半では既に開始されたわけであり、それと同時に、インド洋の大作戦の準備戦争を戦ひつつ

あつたといふことが言へるのである。

かういふ意味から、戦はれた戦果を顧みれば、緒戦におけるハワイ、マレー沖の兩大海戦は、イギリスとアメリカとが日本の東洋方面における戦争の妨害をしようとする、主なる勢力を撃滅し去つてしまつた戦ひである。さうして、あの方面における南洋の大寶庫を、日本が大東亞のためにがっちり握り、その必要な地域をすべて日本の統制下に入れてしまつたのであるが、これを妨害してくる英、米、濠、蘭の勢力を逐次撃滅しながら、それをなし遂げたといふところに意味がある。

この間、ジャワ、バタビヤ、スラバヤ沖等の諸海戦、或はエンダウ沖の海戦などの、いくつかの海戦が行はれたのであつたが、さらに後半においては、珊瑚海海戦、ミッドウエー海戦、アリューシャン攻撃、ソロモン諸海戦などが行はれてゐる。

大體この前半、後半といふのは、五月までを前半、六月以降のものを後半とする、かういふ見方をしてゆけばよいと思ふ。

かくて、凄烈なる海上決闘の連続であるソロモン海戦が展開するにいたつたのであ

る。

太平洋の第二戦線

これよりさき、ルーズヴェルトとチャーチルとが、『ソ聯といかなる協力をしようか』といふことについて語り合つたことがある。いま、ソ聯が主になつて、ドイツと戦つてゐる。これをそのまま放置するわけには行かない。英米は、出来るだけの力を盡してこれを援けなければならない。

それには、ドイツの勢力を英米が、牽きつけて、ソ聯が樂に戦へるやうにしてやらなければならない。かういふことで第二戦線といふ問題が起つたのである。

この第二戦線の問題については、その後、ソ聯の外相モロトフがロンドンに飛んで行つて、そこで協議して、これを強要したのである。さうして何回かの會議で、約束

が出来たのであるが、歐洲において、英米の聯合勢力を以て戦線を結成し、ドイツの勢力を牽制することによつて、ソ聯は安心してドイツと大陸で戦ふ。ドイツは手一杯に、右と左に、手を分けて戦はなければならぬことになる。結局、ソ聯は、英米のためには戦ふのだけれども、その代り英米もまた、自分の力を盡して、ドイツ軍を牽制するといふことで、英、米、ソの各々がドイツの勢力を分擔し、これを引受けて戦ふ、こゝに眼目があつたわけである。

そこで、この第二戦線を作らうとして、いろいろ考へてみたけれども、現實には、どうもうまく行かない。その爲に、六月まで延び／＼になつてゐたが、漸く六月になつて、英、米は初めて力を合せてフランスの西海岸・ディエップに敵前上陸を企てた。やうやく、二箇師團を上陸させることには成功したものの、こゝはドイツが制空權を握つてをつたところだから、敵の動き方が早くからドイツ側に判つてゐた。そのため、ドイツとしては充分な時間の餘裕を持つて應戦することができたので、英米の聯合軍は、上陸こそしたが、僅に上陸九時間で撃退されてしまつたのである。

ソ聯が期待してゐた第二戦線といふものは、決して九時間といふやうな短いものではなかつたのであるが、結局、この結果としては、英米は、歐洲大陸には第二戦線が出来ないといふことを、世界に公表したにとどまつたのである。

ところが、その後、彼等は「空の第二戦線」といふことを考へて、飛行機三千臺を以てドイツ軍を牽制しようとしたのであるが、その實施にあつては、僅に二百臺が働いただけで、結局、ドイツに對してさほどの痛痒を與へることはできなかつた。

やがてアメリカは、ソ聯に申譯を立て、中立國を自分の方に牽きつけ、更に蒋介石政權に對して、いゝ顔をしたいために、「太平洋の第二戦線」といふものを考へ出して、八月上旬、殆ど時を同じうして、アリューシャン、ギルバート、ソロモンの三方面に反撃して來たのである。

しかし、これを、今一應検討するならば、アメリカが今まで無敵海軍を呼號し、日本海軍を僅かに三週間で撃滅し得ると言つてゐたのが、事實はこれに反して、逆に自分の方が撃滅されるといふやうな傾向がだん／＼強くなつて來た。だから、彼等

としては、なんとか國民に申譯の方法を考へなければならぬことになった。

この申譯の方法として、最も彼等を動かしたものは、巷の戰略家、戰術家の聲として、かういふことが言はれ始めたことである。



「アメリカ海軍は、僅か三週間で日本海軍を撃滅すると稱してゐたが、今日の戦ひの状態は負けつゝけだ、これは防備に熱中してゐるから、かういふ負け戦になるのだ、防備はいかに完全であつても、それは負ける時期を延ばすに過ぎない、決して勝つ理由にはならない、勝つためには是が非でも攻勢に出なければならぬ。」

さういふ巷の戰術家の聲がアメリカ海軍が攻勢に出るための拍車をかけたわけであり、大統領としては、アメリカ海軍に對する面子を保つ

ためにも、申譯のためにも、なにかしなければならぬ破目に陥つた。この國民から海軍にかけられた拍車、それから第二戦線の結成、この二つを實現するために己むを得ず出て來たのがこの攻勢であつたかも知れないのである。

更に、彼等にもう一つ理由を與へるならば、自惚れの強いルーズヴェルトと雖も、かくの如く負け戦が続いてゐたのでは、將來に對する見通しがつかなくなるだらう。彼等はいかまで負けるつもりで日本を最後の土壇場まで追詰めたのではなかつた。開戦の場合、十分に日本を壓倒し、屈伏せしめて東洋に覇をとらへ、やがて、全世界を制覇しようといふ夢のやうな野望があつたのである。その點から考へても、かくの如く負け戦の連続では、彼等の野望は達せられさうもない。そこに彼等の太平洋に出撃して來た有力な理由の一つがあると思ふ。

この攻勢を何處に向けていくかといふことは問題であつたが、このとき、彼がえらんだのは濠洲を足場とする對日反撃である。これはかねてからの野望であつたと見るべきである。なぜなら、英國が亡びたら、アメリカは濠洲を遺産として貰はうとい

ふことを考へてゐたからである。

その遺産として貰はうといふ目に、そこに日章旗が立つてをうては困る。濠洲に日本の力が加はらないやうにするにはどうしたらいいか。ギルバートからソロモンへ、もしも、あの線を日本が確保すればどうなるか。——そこを考へればアメリカが、太平洋に反撃し來つた理由はおのづからはつきりするのである。

もし、かりに西南太平洋に横たはる、蜿蜒長蛇のやうな東印度諸島を萬里の長城にたとへるならば、その東端のソロモン海域は、將に天下第一の關門と云へやう。米國はソロモン方面の奪回をもつて、日本の企圖する大東亞共榮圈の一角の崩壊であると稱し、またソロモン群島に於ける海戦こそは、米國の未來を決する鍵だと云ふのも當然である。したがつて、ソロモン海戦が、如何に重大なるかは自明の理である。

すなはち、アメリカは、ソロモン群島のガダルカナル島を足場として、逐次勢力を挽回し、やがてはソロモン群島からニューギニヤにかけて、日本の勢力を驅逐しようとして試みたのである。

アリユーションの反攻戦

アメリカにとつて、緒戦以來の戦ひはすべて防禦であつたが、八月上旬からの戦ひは攻勢作戦であつた。彼等はこれを『アメリカ海軍が行つたはじめての大攻撃である』と誇稱したのである。

まづ、アリユーション方面の反攻であるが、この方面のわが防備陣は儼として固く、事毎に撃退されてゐるのである。

もと／＼アリユーション方面に對しては、さきに發表した『作戦一萬渾』の中に詳しく述べておいた通り、昭和十七年六月四日、東太平洋作戦の劈頭を切つて、帝國海軍部隊は敵アメリカに残された唯一の對日進攻路の據點たるアリユーション列島のダッチハーバーを急襲、續く七日、八日には我陸軍部隊との緊密なる協力下にアリユーション

ヤン列島西方の要衝キスカ島(鳴神島)アツツ島(熱田島)を奇襲占領、引續き附近の諸島を掃蕩して、いはゆる「北方進攻路」を切斷して、儼たる護りについたのであつた。しかるに、敵の有力部隊はこれが奪回を企圖して、八月八日を初めとして、執拗なる反撃を試みたのであるが、その都度一蹴されてゐるのである。敵が如何に執拗に出撃して來てゐるかは大本營發表にもある如く、六月十二日以降十月三十一日に至る、百四十餘日間に、敵機の來襲を受けること、實に八十一回といふ事實からも、容易に想像されやう。敵はボーイングB一七(空の要塞)ノースアメリカンB二五、コンソリーテッドB二四等の精銳爆撃機を以て、或ひは數機、或ひは十數機の大編隊を組み、殆ど連日連夜の空襲を繰り返したのであるが、我方は勇猛果敢なる陸上部隊の對空戦闘と相待ち、水上機を以て遊撃交戦、敵の執拗なる企圖をその都度破砕し去つたのである。

或る下駄履機(水上機)の如きは、片翼の深傷をもつともせず敵大型機に喰ひ下り、傳統の體當り戦法を以て見事にこれを叩き潰すなど、わが海鷲魂は北洋の空に火と燃

えて、既に敵機三十二機を撃墜してゐる。

しかしながら、その半面わが方にあつても、驅逐艦一隻沈没、輸送船二隻大破、自爆及び未歸還水上機十五機などの尊い犠牲が數へられたのである。

わが本土に最も接近せるアリユーション方面の守備に任ずる、これら、陸海軍部隊の辛苦に對しては、全國民は感激の熱誠を捧げると共に、われわれが銃後の生業に邁進し得る蔭には、かくの如く、北洋第一線に敢闘する皇軍將兵の血のにじむ勞苦のあることを銘記し、職域邁進をもつてこれに應へねばならない。

米陸相スチュムソンは、アメリカ本土とアラスカを結ぶ二千六百キロにわたるアラスカ公路の完成を發表した。

これは、アメリカ國內及び聯合國に對する一流の宣傳を多分に含んでゐることは勿論であるが、敵がアラスカを基地とする對日反攻意圖を、堅持してゐることを十分に示唆するものと云はねばなるまい。

また、アメリカ上院議員ハロルドバートンは、

「對日勝利は、東京爆撃にあり、而も、その際基地はアラスカあるのみ」と、強調してゐるが、敵は日本に突きつけてゐた利刃アリューシヤンの飛石基地を、反對に日本に占領され、逆に自らの咽喉部に鋭鋒を差向けられて苦境に立つたので、アラスカ公路の完成と共に、再度アラスカを基地として、對日北方反撃に出ようとする様子が、まざまざと窺はれるのである。

マキン島の反撃失敗

このやうに、敵は、アリューシヤン方面では何らなすところなく敗れ去つたので、今度は鋒を轉じ、八月十七日ギルバート諸島の一番北にあるマキン島に、潜水艦二隻に約二百人ばかりの海兵を乗せて、小癩にも奪還を夢見て上陸して來たのである。

これを發見したわが〇〇名の守備隊は、猛然と反撃に出た。敵の何分の一にも足ら

ない極く少數のわが守備隊は、全滅を覺悟して壯絶なる突撃に移つた。

アメリカ軍にとつて、この猛勇ぶりは、實に不思議なことに思はれ、これには、多分背後に仕掛けがあるに違ひない。それでは逃げた方が安心だと逃げはじめた。半分は船に乗つて海に逃げたが、残り半分は山に逃げこんで、わが方に向つて

『國際公法の定める所により捕虜として待遇されたし』といふ手紙を託した。

ところが、その手紙を託された原住民が途中で道草を喰つてゐた爲に、なかなかその手紙がわが軍の手に入らない。そのうちにわが軍は、極く少い兵ではあるが、猛烈な攻撃を加へた。向ふではすでに降参を申し出てゐるのに、何回も、何回も、攻撃して來るのでびつくりして、ぼんやりしてゐるうちに、やつつけられてしまつた。僅かに残つた九人の敵は、我が方の捕虜になつたのである。

この九人の俘虜は、一たん潜水艦に逃げ歸つたが、死體の收容のため再び上陸しやうとしたとき、その潜水艦はわが爆撃に遭ひ、戦友を見殺しにして逃げ去つた。これを海岸近くのボートから見てゐた九人の敵兵は、母艦が二度と浮上しないので、諦めて

島内に潜伏してゐたところを捕へられたのである。しかも、敵兵を陸揚げした潜水艦二隻のうち一隻は、我が爆撃のために、海底の藻屑と化したものと推定されるのである。

この激戦を、空から掩護したわが航空部隊の連続的、且つ、大膽極まる猛撃に驚いた島民は、日の丸を描いたいろいろの形の飛行機が椰子の葉すれに來襲するたびに、敵兵は銃を捨て、仰天してゐたと語つてゐる。

ギルバート諸島は今、太平洋上の浮城として大洋の護りに任じてゐるのである。折角、奪還を期して出現した敵は、全く敗退されてしまひ、かくて、ギルバート諸島に對する敵の反撃は、何ら得る所なく終つたのである。

ソロモンの海上決戦

一方、ソロモン方面に向つて來た敵は、非常に大掛りのものであつた。

すなはち、敵は八月六日、ソロモンに海兵部隊約一箇師團、一萬七八千名を揚陸し、逸早くこゝに飛行場を作り、飛行機を運び込んだのである。

これを發見したわが方は、八月七日、敵の輸送船、及び、これを護衛して來た艦隊に對する戦闘を開始したわけである。これが第一次ソロモン海戦である。

敵はこゝに上陸はしたものの、巡洋艦十四隻、驅逐艦九隻、潜水艦三隻、輸送船十隻を撃沈された外、巡洋艦一隻、驅逐艦三隻、輸送船一隻を大破し、飛行機五十八機を撃破されたのである。しかし、上陸部隊を見殺しには出來ない、これがためには補給を行はねばならず、補給のためには、有力な艦隊を必要とする。そこで敵は新たに増援部隊を得て、再び出撃し來つた。

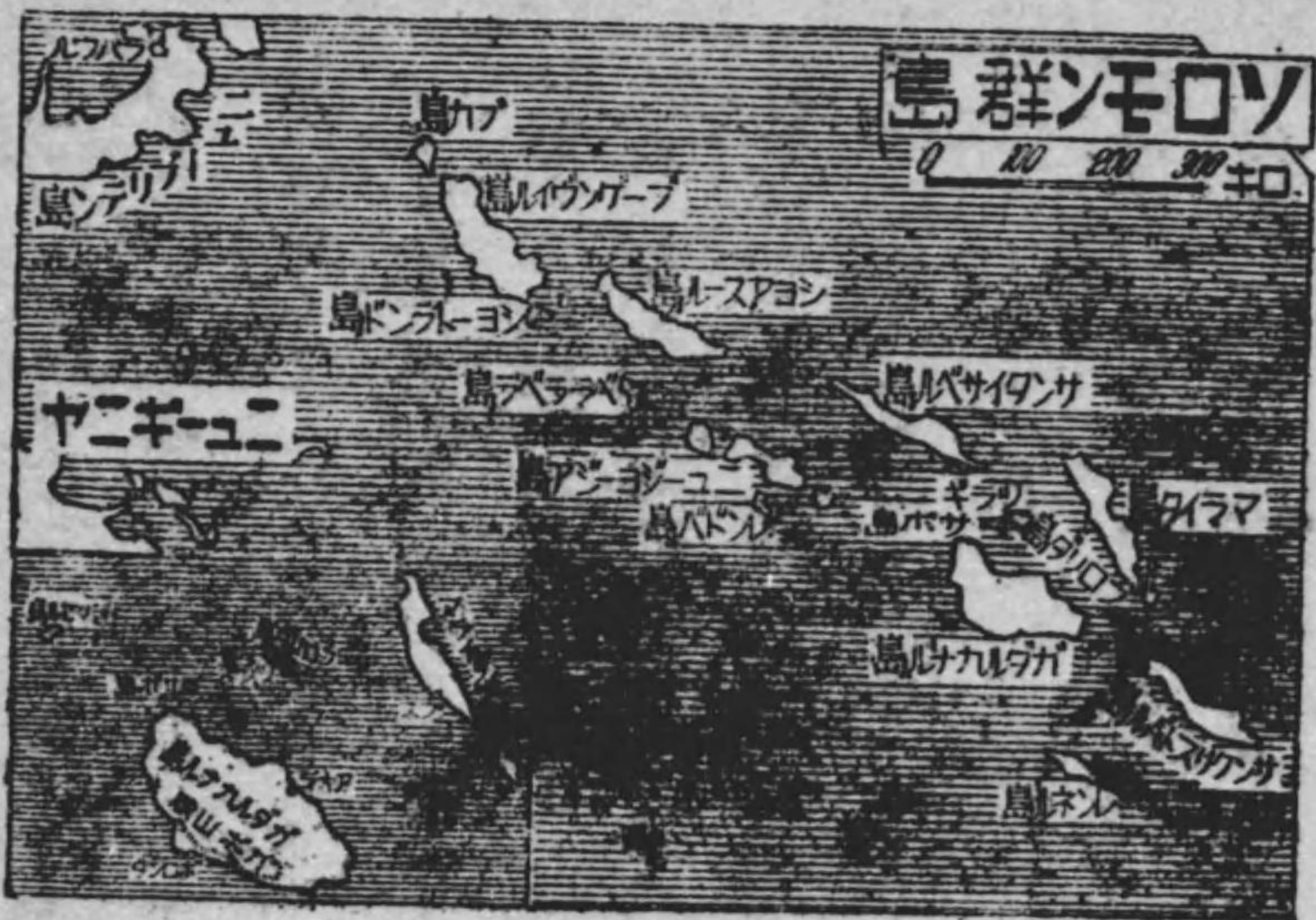
八月二十四日の第二次ソロモン海戦は、さういふ意味で出て來た敵をやつつけた海戦であつて、戦艦一隻を撃沈し、航空母艦二隻を傷つけたのである。敵はまたしてもこの海戦に敗退したのであるが、しかし上陸部隊への補給は、さらに連続的に次々と

行はれ、その都度『喰ふか喰はれるか』の海上決戦が展開されたのである。

ここに特筆すべきは、基地航空部隊の連日連夜に亙る、ガダルカナル島の攻撃である。

その攻撃は、百數十回に亙り、比類のない熾烈な航空殲滅戦を展開し、特に、長距離渡洋攻撃に参加した、我が航空部隊の目覚ましい奮戦ぶりは、この間に於ける敵機五百機以上を撃墜破せる戦果に照しても、その猛勇ぶりが窺はれるのである。

ソロモン海上の華と散つた海の勇士の奮戦ぶりについて、現在まで判明してゐる報告によつても、まことに感激的なものが多い。その二、三をこゝで云ふならば、我が戦闘機が、敵機が小さかしくも、暴進して来て、我が航空母艦を爆撃せんと企圖した



ので、自らを犠牲にして母艦を救つたのであつた。この海戦の時、敵の優秀な爆撃機が我が航空母艦を狙つて猛進して來つた、あはや危機一髪といふとき、この勇敢なる我が戦闘機は、いきなり真正面から、敵機に襲ひかかり、火を放つほどの物凄い勢ひで衝突してしまつた。忽ち、この二機は形態を一變して、バラ／＼となつて、南海の海底ふかく墜落し果てたのであつた。この場合を、あるひは、そんな無理をするなど云ふ人があるかも知れない。しかし、この戦闘機の勇士にしてみれば、その事は十分承知してゐても、躊躇してゐたら母艦が危い、母艦が爆撃されれば、自分一人が傷つく程度の犠牲ではすまされない。戦友の多數も犠牲になるかも知れない。さう考へると、自分一人が果て、その代り多數の味方を救ふことができたならば、それこそ、國家のためになるであらう。さう決心した彼は、いきなり敵機と正面からぶつかり、見事に敵を刺し止めて、自らも護國の鬼と化したのである。

次に、ある海戦に於いて、航海長が、激戦の最中に、ふと、足元がととても熱いやうに感じられた。そこで、その足下の部屋にゐる操艦係りに向つて、

『こちらの、床下が熱いやうに思ふが、そちらは異状はないか。』と訊くと、言下に

22

『異状ありません。少しも熱くないのであります。』

『さうか。』と安心して、激戦をつゞけてゐると、どうしても熱いので、

『どうだ、今度は、熱くなかつたか。』

『はい、少しも熱くないのであります。異状ありません。』と、しゃんとした返事である。そこで、航海長も安心して、戦闘を繼續し、戦果をあげて、さて、休憩となつた。すると、その時になつて、始めて、下の部屋の操艦係りの下士官が、戦闘中に燃えひろがつた火焰の爲に窒息し、倒れかけてゐることを發見した。どうして今まで黙つてゐたかといふと、彼は、大事な艦の進航を與る立場にあるので、もし、そこで熱いと云つて、舵を離してしまへば、艦は大變なことになる。そこで、倒れて後やむ決心で、上官から『熱くはないか、異状はないか?』と訊ねられても、平然として、異常のない返事をして、戦闘を終はらせて後、力つきて倒れてしまつたのである。

さらに、こんな例が航空部隊にある。それは、アメリカの誇る「空の要塞」が襲來

して來たのを、こちらは、一機でとび出して、渡り合つたかと思ふと、いきなり片翼で、「空の要塞」をひつかけてしまつたので、相手は忽ち墜落されてしまつたが、彼は、他の片翼をたて直して、その片翼だけで悠々と無事歸還したのであつた。

このやうに數知れぬ勇戦美談の華は、ソロモン海上に咲いて、赫々の大戦果をあげるに至つたのである。

これに對して、第一次、第二次ソロモン海戦の戦況、戦果についてアメリカでは例によつて、敗戦をひたかくしにしてゐた。アメリカ國民は政府の發表を信ぜず、戦局の現狀に深い疑念を抱きはじめた時、ニューヨーク・タイムス紙従軍記者ハンソン・ポールドウインは、連日タイムス紙上に視察記を掲載したが、八月九日の第一次ソロモン海戦に關する記事では、暗澹たるアメリカ艦隊の敗戦ぶりを傳へ、この海戦が眞珠灣以上、比島の失陥以上の惨敗であるとの印象をアメリカ國民に與へたと云はれる。

第二次海戦後もソロモン海においては、次々と戦闘が行はれ、わが海軍得意の奇襲突入戦は行はれてゐた。すなはち、十月十一日には、わが巡洋艦戦隊は、スコールを、

23

衝き、ソロモン群島のサボ島附近で敵の懐中深く、飛込んで、必中必殺の砲雷撃戦に
よつて、忽ち敵巡洋艦二隻、駆逐艦一隻大破の堂々たる戦果をあげたのである。

この夜の状況は當時乗組の報道班員の報告によると次のやうである。

わが巡洋艦戦隊はまつしぐらにソロモン群島附近に突進して行つたのであつた。や
がて、南海に夜が訪れて来た。

無気味なスクリューの音が、轟々と響く、旗艦の發光信號が時々明滅する、僚艦の
艦首から卷起る飛沫が、暗闇を透して薄く見える、仰げば、マストの上に雲間洩る南
の星が、左右に揺れてゐる、風が強くなつて来た。艦長の眞白い艦内帽はちつとも動
かうとはしない。突如猛烈なスコールが起つて来た。

『もう近いぞ……』と呼ぶ航海長の聲を合間に、流石に南海でも珍しいスコールがさ
つとあがつた。僚艦の影がくつきりとまた眼前に浮んだ。相變らず悠々たる英姿だ。

その時だつた。突如『警戒』の喇叭が驅り立てるやうに鳴り響いた。時まさに午後

九時十五分、見張員は望遠鏡にしがみついてゐる。案の定、サボ島西方を南方に向け
て敵艦隊は航行してゐたのだ。敵艦影は段々と大きくなつて来た。

『どうやら敵も気がついたらしいぞ』と思つたその瞬間、遙か彼方に電光のやうには
つと光つたかと思ふ間もなく、赤い絲がスーッと飛んで来た。わが艦隊が突如として
現れたので敵艦隊が、あわてて射出した第一弾であつた。

○艦の舷側近く落ちたらしい。さつと探照燈の齊射を浴びせながら、敵は益々射
つて来る。シュツ／＼と音をたてる敵弾を身近に感じ始めた。だが、わが艦はまだ射
たうとはしない。黙々として、猛烈なスピードで突込んで行く、わが得意の肉薄戦で
ある。無言の威壓に、敵は益々射つて来る。敵陣營のどてツ腹目指して奥深く斬込ん
だのである。

味方主砲は一齊に次々と火を吐いて、赤い火の玉はスーッと飛んで行く。

砲戦だ。青白い探照燈の光が左右から流れ出て、敵巡洋艦が一行に影繪のやうに浮
んで見える、その時、敵の一艦がばつと大きな光を吐いた。そして紅蓮の火柱がめら

めらと立ちあがつた。また一つ火柱がふえた。赤々と照し出されて瞬く間に敵艦が近づいた感じだ。

『中つたぞ、魚雷命中！ 魚雷命中！』と呼ぶ水兵の聲も弾む。わが砲弾はなほも唸りを残しては遙か彼方に破片を撒き散らしてゐる。見事な弾着振りである。燃えてゐた敵艦の火柱はぐつと背伸びしたと思ふと、そのまゝスーッと小さい塊りとなつてしまつた。その敵艦こそ、確に見覚えのある二本煙突のホノルル型一萬トン級米巡洋艦である。今、南海の底深く吸ひ込まれてしまつたのである。

敵弾もいよいよ熾烈となつた。敵の全砲火はわが〇〇艦に集中し始めた。むくむくと盛り上る水柱の真只中に、〇〇艦は猛烈な砲撃を続け、敵艦にばつばつと火花が飛散る。すつと燃え上つてはまた消えて行く。また燃え上る。この時、敵の横合からぼつんと黒い影が突如現れた。小さい駆逐艦らしい。わが艦の放つた初弾は、敵駆逐艦に見事命中した。

第二弾、第三弾が打ち込まれる。よろよろとよろめいた敵駆逐艦は、ぐつと大きく

舵をとつた。炎々と燃えつゝも、なほ青白い航跡を残して艦列を離れつゝ、これまた水中に没し去つてしまつたのである。

こゝに、突如として大膽極まる命令が發せられた。艦はぐつと舵を一杯にとつた。猛烈な速力で急反轉したのである。航跡が白々と半圓を描き出した。急轉換である。驚く敵陣めがけて、再び雷砲戦の火蓋は切られた。敵陣列は最早浮足立ち始めた。逃げ惑ふ敵艦に猛然と數本の火の手があがつた。魚雷命中だ。見る見るうちに火柱は高く艦首は低くなつて沈み行く。艦首を左右に振りつつ、敵艦は悶へに悶へてゐる。左に右にジグザグコースをとりつゝある敵艦上に、火の玉は無數に炸裂した。

艦首から艦橋、やがて艦尾をむつくり持ち上げてスーッと消えて行つた。續く敵艦にまたも火焰があがつたと見る間に、煙突が火焰を背に眞黒く浮出してゐる。これを追ふわが砲弾を受けつつ敵艦は、たうとう水平線の間に呑まれてしまつた。見よ！ 敵艦隊は多大の損害を残して遂に遁走してしまつたではないか。だが、わが方もまた巡洋艦沈没の犠牲を出したのである。

右の報告に見られるやうな、凄絶極まる夜戦が繰返されたのである。

大體、日本海軍は夜戦が得意である。日本の軍人の眼は夜でもよく見える。こちらはよく見えるのに、向ふは見えない。生理學者も云つてゐるが、日本人の眼といふものは非常に性能がよいといふ。よく見える眼ださうだ。瞳孔の具合が違ふらしい。少くとも米人の眼よりいいのだ。

しかし、結局は訓練である。

たとへば、アメリカの海軍は、夕方作業が終ると、イブニングに着替へて、艦の中で晚餐をする。そして、シャンペングラスを合せて、正式の晚餐をやる。それからあとはピアノを弾いたり、トランプをやつたりして一夜を明かす。その頃、日本の海軍は、今からが大事な夜戦の訓練だといふので、猛烈な訓練を始める。それだけ違ふのである。

だから、夜戦で向ふが何も見えない時にこちらは見える。同じ海軍の中でも、訓練

されてゐない眼は駄目である。私も艦に勤務してよく経験したのであるが、見張員のそばにゐると、見張員が見たことを一々細かく話して聞かせてくれる。しかし、私には何も見えない。

『どの方角幾らに、何型の艦がどちらを向いて速力どのくらゐで走つてゐます』などと云ふのだが、それが私にはどうしても見えない。同じ日本人だつて、訓練されない者と、された者とは、かうも違ふものである。

この訓練が夜襲戦で物を云つて、見事成功してゐるのである。

敵航母「ワスプ」の最期

ソロモン海において、わが潜水艦部隊も、その海域に縦横の活躍をしてゐるのであるが、敵が虎の子とたのむ航空母艦に、必殺の魚雷を命中せしめてこれを撃沈し、わ

が航空部隊の戦果と相俟つて、敵海上兵力に大打撃を與へるなど、赫々たる殊勲をあげてゐる。ことに潜水艦部隊の勞苦は、全く地上の人々の想像に絶するのである。

いまその活躍状況を見よう――

ソロモン群島東南方洋上に哨戒索敵中のわが潜水艦は、幾日も太陽を見ぬ日が續く。潜航中の艦内は蒸風呂のやうな暑さだ。この附近では海水温度が廿七、八度もあるから冷却通風もあまりきゝめがない。

ある朝、海上が白々と明けそめたころ、上甲板に飛魚二、三尾飛び上つてばたばたねあがつてゐた。生糧品に餓えてゐる潜水艦生活では、時々、甲板に打ちあげられる飛魚は、この上もなく食欲をそゝるおいしいものであるが、ちやうど、艦橋からこれを見た司令が、つかつかと降りて行つて、まだはね廻つてゐる飛魚を拾ひあげると、『おい、逃がしてやるから何かよい獲物を連れてこいよ』と、いひながら海へ逃してやつた。

かうして、あらゆる勞苦を超越して、ひたすらに敵艦と出逢ふ日の來るのを祈りながら索敵哨戒の日が續く。軍醫長が、

『昨夜は珍しくぐつすり眠れましたよ、今日はきつと空母に會ひますよ』

と朝の食卓で話してゐたが豫感にあたつて、この日――九月十五日朝、ソロモン群島南方〇〇哩の洋上で、潜望鏡を露頂してゐると、南方の水平線上に驅逐艦のマストが現れ、しばらくすると、その後方に、敵航空母艦の艦影が見えた。敵は飛行機を増援するために、航空母艦をもつて北上して來つたものらしい。

これぞ、待望の航空母艦だ。見敵必殺のわが潜水艦魂を發揮する時はいまだ。直ちに總員配置、攻撃運動に移る。

この日、海上は快晴で、視界は良いが、風速十米内外の強い南風が吹き、うねりが大きく波高一米半内外であつて、波頭は白く波立ち、荒れ模様である。

艦内はピンとはり切つて、一分のゆるみもない緊張裡に兵員が白鉢巻で配置につく。

上空には敵の直衛機がたえず飛翔してゐる。敵は正しく米空母ワスプで、兩側に甲巡

各一隻を従へ、その外側を多数の驅逐艦でとりまき堂々たる輪型陣である。
ワスプの上甲板には、機影は見られないが、上空には艦上機三機が直衝してゐる。
この時は、まだ敵との距離は遠く襲撃困難であつたが、〇〇時〇〇分頃に至り、北上
中の敵は西へ針路をとり、しばらくするとまた左へ針路を變へ、こちらの目の前へ向
つて南下して来る。一たん遠ざかつた敵が射つてくれといはんばかりにわが鼻先に近
づいて来るのだ。

これこそ天佑神助でなくて何であらう。

艦長は「魚雷戦用意」を命じた。

號令は司令塔から發射管室へと傳はる。ワスプから艦上機が二機飛び立つのが見ら
れた。敵は針路を變へず、わが前方に悠悠十數ノットの速力でさしかゝつて来る。天
の恵んでくれた絶好の機會を逃してはならない。

「よし突込むぞ」と、一言もらして、きつと結んだ艦長のくちびるは、必殺捨身の闘
魂を包む。身を捨て、こそ浮ぶ瀬もあれ——敵驅逐艦、巡洋艦に直衝された輪型陣

の真只中へ跳り込んで、必殺の魚雷を放ち、死中に活を求める旺盛なる攻撃精神が狭
い艦内に脈々とあふれた。

直衝驅逐艦の下をくぐり巡洋艦の艦尾すれすれに通過した。今や「射て」の號令を
待つばかりだつた。シュツ／＼と巡洋艦のスクリー音を身近に感じて目指すワ
スプに迫つた。

「射て！」

號令は發せられた。直ちに、にぶいショックを残して魚雷は發射された。秒針を數
へて爆音を待つ。

所要時間は過ぎた。と「コーン」といふ板を叩きつけた音について「ずしーん」と
いふ重ぐるしい底力のある魚雷の爆發音が艦をふるはせた。ついで一定の間隔を置い
て「コーン」「ずしん」「コーン」「ずしん」と魚雷四本が、続け様にワスプの艦腹深く命中
したのを聞いた。魚雷は命中したのだ。誰しもが、緊張に硬ばらせてゐた顔をほころ
ばせて、にっこり會心の微笑をもらす。

だが、その直後には敵の直衝艦の爆雷による制圧があることは當然である。魚雷命中、喜びあつてゐるとまもなく、艦内は息づまるやうな緊張のうちに、避退運動に移つたが、あたかもわが攻撃に應へるかのやうに敵驅逐艦、巡洋艦は猛烈に爆雷を投射しはじめた。

「カーン」といふ魚雷命中音より軽い炸裂音につづいて、ゴーツといふ水壓が艦をよるはせる。そして一、二秒の後にはジャーツといふ水しぶきの音が聞えて来る。あちからでもこちらでも、「カーン、ゴーツ、ジャーツ」といふ爆雷音が連続して聞える。それがはげしくなるとカーンといふ炸裂音が續いて、トタン屋根の上に無数の礫を投げつけたやうだ。敵の直衝艦群は突如として護衛してゐるワスプが四本の龍巻のやうな水柱につままれるのを見て、周章狼狽滅法爆雷を投下し右往左往してゐるのだ。

はげしい爆雷の嵐は、わが方の攻撃直後から約〇時間にわたり數十發投下されたが、至近弾は一發もなく、徒らに魚や蟻を浮き上らせたゞけであつた。その後は、卅分おきに一發か二發思ひついたやうに遠くで爆音が聞えてゐた。護衛してゐた甲巡

二隻と驅逐艦が見切りをつけたのか、南方へ去つて行つた。

その前後わが攻撃を受ける前に、離艦してゐたと推定される艦上機約十機が飛來して爆弾をばんぼんと投下してゐる音が聞えたが、着艦しようにもワスプは火焰に包まれてゐるので、已むを得ず残つてゐた爆弾を捨て、附近に着水して僚艦に收容されたやうであつた。

日没とともに西の空に利鎌のやうな月がかゝり、海上は明るかつた。敵の爆雷も全く鎮まつたので潜望鏡をあげると、西の空が眞赤に燃えてゐる。

近づいて見ると、魚雷を命中されたワスプが大火災を起し、上弦の月を浴びて夜空に赤く照りはえてゐるのだ。

恰度、印度洋に於ける英空母ハームス撃沈の寫真に見るやうに、あれと反對に艦尾を水に浸して左に大傾斜し、艦首や右舷の廣い飛行甲板のところどころから、天に沖する黒煙にまじつて、赤黒い焰がめらめらと悪魔の舌のやうに巨艦を舐めてゐた。その時までワスプの最期を看とるかのやうに、たゞ一隻の驅逐艦がついてゐたが、もう

沈没も間もないと見きりをつけて、現場を立ち去つた。

艦體を包む火焰はますます猛烈となり、左に大傾斜したまゝ、艦尾から沈みはじめ、三分の一ほど甲板が水に浸つたと思ふと、艦首をぐつと空高く持ちあげ、赤い船腹を見せて棒立ちとなり、そのまゝ、ゴーツと鉛色の海に呑まれてしまつた。

——かくて、アメリカの誇る新鋭航空母艦も海底の藻屑と化し去つたのである。

太平洋の關ヶ原合戦

かくて、総合すると、第二ソロモン海戦において敵の艦艇は致命的な打撃を受けるに至つた。しかし、残された海兵達に對して、人道の國と稱してゐるアメリカでは、これを見殺しにするわけには行かない。食べ物や、飲物を次から次と補充せねばならぬ。その補充にやつて来る輸送船なり、艦隊はそれから二ヶ月にわたつて逐次沈めら

れて行つた。

その詳しい戦況については、當時わが方は沈黙してゐたのである。ところが、そのうちアメリカが大分元氣を取戻して攻勢に出て來た。それは、アメリカ海軍を相次ぐソロモンの海戦において、日本があれほどやつけたのにも拘らず、その後、日本は何も宣傳せずに黙つてゐるので、日本が黙つてゐるのは自分達が勝つた證據だと思つた。

まことに、をかしな理屈だが、日本が黙つてゐることをもつて、自分達が勝つたのだと思ふことは、私達には諒解出來ない理屈であるが、彼らは勝つた時には宣傳しなければならぬと思つてゐるのである。

ところが、不思議なことに約二週間ほど経つた時に、勝つたはずの艦隊の長官ゴームリーが誠になつた。宣傳では勝つたと言つてゐるが、ゴームリーが辭めては負けたことをつきり白状したことになる。日本からいへば、それ程の大戦闘において勝利を得た最高指揮官を誠にするといふ法はないのであつて、これは、日本ばかりでなく

他の國々でも不思議に思つてゐたのである。

しかし、よく考へて見れば、彼等は宣傳においては「勝つた」と、言つてゐたけれども、眞實は自分の方が負けてゐるくらゐのことは、判つてゐたのであるから、その負けた責任者を、鹹切つたといふことは當然の話である。

さて、十月二十四日、アメリカは、

『近くソロモン方面において大海空戦が行はれるであらう』とはつきり發表した。これはわが海軍に對する果し狀である。

一體、この大東亞戦争は百年戦争といはれ、長期戦であることを全國民は覺悟してゐる。しかし、その心の奥深く探ると、全國民の心にも、なるべく早くこの戦ひを勝ち抜きたいと思つてゐる。その早く勝ち抜きたいふことには一つの方法がある。即ち敵の戦闘力を迅速に殲滅する、これで戦争は短期に勝ち抜くことが出来る。しかし、それには海戦に勝たねばならない。

御承知のやうに、日本は三といふ海軍勢力を以つて、十といふ米英の勢力に對抗し

て今まで戦つて來た。この勢力で、日本からイギリスや、アメリカに、堂々と押掛けに行くといふことは難しいことだ。これは、常識的に誰でもわかることである。しかし、この戦争は敵の戦闘力を撃滅しなければ終らない。われわれは、なるべく早く敵を撃滅して、その戦意を喪失せしめるといふことを目標にしてゐる。

しかし、それをやらうとすれば、われわれの少ない兵力を以つて、敵の方に押しかけて行つて、その戦意を撃滅する。敵を壓倒殲滅しなければならぬので、これは非常に難しいことである。

そこで敵がこちらにやつて來てくれるならば、これに越したことはないのだ、望んでもない結構なことだ、それを、十月二十四日に彼等は果し狀をもつて宣言したのである。わが艦隊はこれを喜ばずには居られない。こちらは手具脛引いて待つて居つた。

十月二十六日の朝、ソロモン群島の南に、戦艦部隊、北に航空母艦及び戦艦部隊が押し寄せて來た。これを、わが方の航空部隊は午前〇時に捕捉してゐるのである。

しかし、實はこの朝、敵は我が方を午前〇時に發見してゐるのである。わが方とし

ては、その直後に敵の襲撃があるかも知れないといふことを考へてゐた。然るに、わが方が捕捉するまで敵はすこしも動かさなかつた。かういふことは、この時が初めてではないのであつて、アメリカ側が敵を発見して、しかも、これに攻勢をとらないといふ場合は、今までに數回あつたのである。

例へば、一昨年十二月八日の朝、わが大編隊の飛行機が、真珠灣に殺到しやうとしてゐるのを敵の哨戒飛行機が発見したのは、襲撃約一時間程前である。また、我潜水艦が真珠灣口に於て、敵の巡邏艇に発見せられて砲撃を受けたといふのも、襲撃開始の一時間前である。然るに敵は、これに對して何等適當なる方策をとらなかつた。

八月八日の第一次ソロモン海戦の夜戦の際も、同日の午前〇時と、〇時とに、敵の飛行機は、わが夜戦に突入せんとする部隊を発見した。わが方は當然、それから數時間後に敵の大編隊から空襲を受けることを覺悟してをつたのだが、敵は遂にやつて來なかつた。わが方としては、既にその時、夜襲は成功したも同様だと言つて喜んでくらすのである。また、ツラギ海域に突入しようとする瞬間、敵の哨戒艇が二隻わが方に

接近して來た。わが方から敵の艦形が見えるほど接近したのであるから、それより大きいわが方の艦艇を、敵は見つけたといふことは間違ひあるまいと思ふが、この一隻の哨戒艇は、わがて次第に遠ざかつて行つて、その後なんの音沙汰もなかつた。

これらの二々の例が示すやうに、わが方の勢力を発見して、而も攻勢に出ないといふ實例は枚擧に遑がないほどである。何がためにさういふことをするのか、その原因については今以つてわからないわけである。

この南太平洋海戦に於ても同様なことが起つてゐる。しかし、わが方は敵の行動如何に拘らず、午前〇時敵を捕捉すると同時に空中戦を開始した。さうして、殆んど終日強烈な戦ひは續けられた。この真最中に、アメリカの有力な放送者ウィリヤム・ウインターは次のやうな要旨の放送をしてゐる。

『現在南太平洋ソロモン附近に於て、日米兩海軍の利用し得べき艦艇の、殆んど全部を網羅したる勢力互角の戦闘が展開中である。どちらが勝つかは今のところ豫測を許さないが、日本の艦隊が甚大なる損害を厭はず猛烈に敢闘するならば、或ひはアメリ

カの艦隊は負けるかも知れない。若しアメリカの艦隊が勝つならば、日米戦争のアメリカの勝利への道は、極めて迅速に進むであらう。また、日本の艦隊が勝つならば、アメリカの艦隊は、この數ヶ月堂々の陣を以つて日本艦隊と戦ふことは不可能な状態になるだらう。しかし、なほ今は、どちらが勝つかわからない。この戦ひこそは、太平洋の關ヶ原とも稱せらるべきものである。』と、放送してゐる。

二日前の豫報と言ひ、決戦最中のこの放送と言ひ、世にも珍しいたぐひのものである。しかし、これは、アメリカが戦ひに必ず勝つことを豫期して、今まで負け戦の辯解として、これを大々的に世界に宣傳し、そして、國民の士氣を昂揚すると同時に、中立國の思惑をも考へた宣傳に、用ひようとしたものに違ひないと思ふ。實に翌二十七日こそは、アメリカの海軍記念日であるからであつた。

壯烈、南太平洋海戦

かくて行はれた南太平洋海戦は、まづ先制的に大航空戦を展開し、文字通りの殲滅的邀撃戦、追撃戦を敢行、黎明より夜間にわたる、一日にして敵戦艦一隻、航空母艦三隻撃沈その他の赫々たる戦果をあげた。この海戦が如何に、わが方の壓倒的勝利であつたかは、次の一例をもつても、容易に想像されるのである。

すなはち、わが艦艇のあるものは、同日の追撃戦において、晝間攻撃に大破して、航行不能に陥つてゐる敵航空母艦ホーネットを發見した。接近して見ると、敵駆逐艦が、同母艦に砲撃を加へ、これを沈没させて、わが方の捕獲を免がれんとしてゐるのである。

ところが、敵駆逐艦は、わが來襲に驚き、忽ち母艦を見捨て、惶惶として遁走した。わが艦艇は直ちに、この大破した敵母艦を捕獲し、曳綱をかけ、曳航に移つたのであるが、残念乍ら途中曳航不能に陥り、つひに、これを處分したのであつた。

この一つの例を以つてみてわかることは、この海戦が、わが壓倒的の大勝利に終つたといふ事實である。若し、彼我互角の戦ひであつたならば、この大なる航空母艦

を長途曳航しようとする考への如きは、浮ぶ筈がないのである。壓倒的な勝利を得て、その附近には防害すべき敵が、何等存在しなかつたといふことを明らかに示すものである。

この海戦は、彼我艦隊が堂々四ツに組んで雌雄を決した激戦であり、近代戦の特徴たる空母を基幹とする米大艦隊との遭遇戦であつて、敵味方共母艦より飛び立つた航空兵力の戦ひを以て、勝負が決せられたので、我が方も未歸還機四十數機を出した。

敵は次々に撃沈又は大中破され總崩れとなつて潰え去つたのである。その戦果は左の通りである。

- 一、敵艦船【撃沈】戦艦一隻、航空母艦エンタープライズ、同ホーネット、大型航空母艦一隻、巡洋艦三隻、驅逐艦一隻【大破又は中破】艦型未詳三隻、驅逐艦三隻
- 二、敵飛行機、敵上空空戦に依り撃墜せるもの五十五機以上、味方上空空戦並に艦

隊砲撃に依り撃墜せるもの廿五機、その他、敵航空母艦沈没に伴ふ喪失機數を合し總計二百機以上

この海戦がわが方の壓倒的勝利に終つたことはいふまでもないが、しかしこの戦闘において、わが方も空母二隻、巡洋艦一隻が輕微ながら損傷を被り、さらに敵の飛行機二百餘機撃墜に對して四十數機の未歸還機を出した。この發表を行つた時、大本營にゐあはせた新聞記者、ニュースカメラマン諸君は、皆な萬歳を唱へてくれたが、私共報道部の者は誰一人萬歳を唱へるものはなかつた。それは、四十數機のこの多數の未だ歸らざる飛行機を出したことを思ふと、なかなか萬歳どころではなかつたのである。

この戦闘に参加した飛行機が自己に負はされたる任務、即ち敵を撃滅せよといふ任務を完全に遂行せんとして、彈丸のある限り、魚雷のある限り、燃料の續く限り、縦横の活躍をなしたことは想像に難くない。

ハワイ海戦に於て、未だ還らざる飛行機二十九機、マレー沖海戦に於ては三機と發表されたが、南太平洋海戦に於ては、還らざる飛行機四十數機を算したことは、如何にアメリカの反抗が眞剣となつて來たかを示すものであり、また、敵の勢力も増強されて來たことを物語るものである。

我が方の航空部隊は、敵撃滅を命ぜられ、發進するのを常とする。そこに敵兵力が益々多ければ多いほど、この任務の完全なる達成は困難となり、必殺の攻撃は反覆せられ、その度毎に、或ひは敵から傷を受けるであらう。

或る一機の如きは、翼も傷つき、燃料タンクも孔を開けられて母艦に還つて來た。しかし、

「それを修繕して行つたらよからう」と、いふ戦友の忠告も聞かず、
「修繕してゐる間に敵が逃げたらどうするか」といふ一言を残して、油を積んだ後すぐにまた飛び立つて、敵撃滅に向つたが、果して、彼等は再び母艦には歸つて來なかつた。彼等の眼中には、敵撃滅といふことだけがあつて、そこに生還を期するといふ

が如きことはなかつたからである。

いつたい、母艦の飛行機は、敵を攻撃して歸艦するまでには、種々の困難を突破しなければならぬ。即ち、母艦を飛立つて攻撃に向ふ艦載機は、七つの弾壁を突破しなければならぬ。まづ、敵巡洋艦群の熾烈なる對空砲火を受ける。

これを突破すれば、こんどは機體に一面の幕を張るが如き、敵驅逐艦群の對空砲火を受ける。これを排除して、いよゝ敵戦艦、或は航空母艦に殺到するのであるが、母艦の場合は、その前面に敵戦闘機が防衛陣を張つてゐる。これを突き破り、最後に敵艦の必死の彈幕を縫つて必殺の猛攻を加へるのであるが、歸途もまた、同様の砲火を逆に潜らなければ無事歸艦は出來ないのである。

このやうに、困難な戦闘であるから、艦載機の犠牲が相當な數に上るといふことも、又已むを得ないのである。

激戦のあとを顧みるとき、そこに鬼神を哭かしむる幾多の烈々たる闘志の發露を見る。數多き海鷲勇士らの敢闘の中からその二、三を拾ひあげてみよう。

急降下〇〇爆撃隊のある隊長は、部下を率ゐて真先きに敵空母めざして突込んで行つた。敵空母と、それを取巻く輪型陣の各艦は數百門の高角砲や高角機銃を一齊に開き、まるでスコールを逆さまに降らせたやうに浴びせて来る。

この真只中に隊長は敢然と突撃し、第一弾をめざす空母に叩きつけた。次の瞬間ぐいと機をひきおこした。だが、その時すでに隊長機は多數の敵弾をうけてゐたので、ひき起すと同時に機體から火を吐いた。もはや、これまでと覺悟をきめた隊長は、機首の前方に走り出た敵の駆逐艦めがけて、猛烈に體當りを決行し、壯烈なる自爆を遂げたのであつた。

駆逐艦の甲板は一瞬にして火の海と化し、忽ち大火災を起しながら傾き、遂に沈没して行つた。一機よく敵艦二隻を屠る。世界空戦史始まつて以來最初のことであらう。このかゝる隊長あればこそ吾が海軍機は強いのである。

また、〇〇兵曹機は、敵戦闘機の猛襲を受けて火を吐きだした。しかし、彼は何としてもめざす敵空母まで辿りつかねばならぬと考へた。

〇〇兵曹は機上で火と煙にむせながらも、齒をくひしばつて頑ん張つた。火はますます擴がつて来た。

『よし一番近い敵をやつゝけてやれ』と、眼前に大きく浮んでゐる敵巡洋艦の頭上から真逆さまに自爆した。突然、起る爆音とともに巡洋艦は忽ち轟沈した。

また〇〇兵曹機は海面すれ／＼に飛んで這ふやうにしながら敵に近づいて行つた。

〇〇機に比べて敵間近に肉薄することは至難なことだつた。敵戦闘機の間を辛うじて突走つた。次には敵の熾烈な對空彈幕の中に入つてゐた。僚機も大分やられた。ふと見ると自分の愛機も火を吐き出してゐるのに氣がついた。しまつたと思つたが、もうこれまでだ、その時、敵戦艦が眼の前を横切らうとしてゐる。

『しめた、飛んで火に入る夏の蟲とはこのことだ、突込め』と、彼は魚雷を抱いたまま敵の横腹へ突き當つて壯烈に相果てたのである。

このやうな南太平洋海戦の輝く戦果が、わが大本營より發表されてゐる。その時間は、恰度アメリカの、ワシントン時間の二十七日午前六時であつた。

彼等がアメリカ海軍の大勝利の情報を期待してゐる最中であり、またそれを、この日、大いに全世界に宣傳しようとする待ちかまへてゐたその朝のことである。待つてゐたアメリカ側の勝報は入らず、その代りに入つて來たものは、日本海軍大勝利の報であつた。彼等が宣傳せんとして待つてゐた放送原稿は、アメリカといふ字を日本といふ字に置き換へない限り、放送不可能な有様になつてしまつた。さうして、同日ウィリヤム・ウインターは淋しげに、

「この日ほど悲惨な海軍記念日を迎へたことは、アメリカ海軍創始以來初めてのことである」と、泣言を放送してゐるのである。

アメリカ海軍當局は、小賢しくも、この海戦の數日前自信たつぶりの豫告をしてゐたことは前にも述べたのであるが、驕慢なるその態度、人を喰つたその宣傳、これぞ「驕れる兵」と云はずして何であらう。

果せる哉、天譴は彼等に降つた。アメリカの「海軍記念日」奇しくもこの「光榮ある記念日」に、アメリカ海軍大惨敗の贈物が届けられたといふことは、大東亞戦争に

對する「神の啓示」といはねばならぬ。しかし、アメリカを輕視してはならない。

第三次ソロモン海戦の戦艦戦

かくの如く、アメリカは第一次、第二次ソロモン海戦に次ぐ南太平洋海戦において、敗戦を重ねてゐるのにも拘らず、ガダルカナル島に上陸せしめた部隊の救援、補給と、あくまで、ここを確保して對日反撃の足場たらしめんとして、執拗な出撃を試み、陸上においても、海上においても絶えず彼我の間に壯烈な激闘が繼續されたのであるが、十一月十二日より十四日にかけて、またも激烈な海上決戦が展開された。これが「第三次ソロモン海戦」である。

すなはち、十二日ガダルカナル島に、輸送補給を敢行せんとして出現した敵有力艦隊及び輸送船團に對し、わが海軍部隊は、終日これに痛撃を加へ、同日の夜戦におい

て、敵巡洋艦三隻を撃沈、翌十三日も追撃の手をゆるめず、敵航空基地に對しても猛攻を続け、十四日つひに同島沖に敵大部隊を撃破して、わが部隊の揚陸を敢行したのである。

次いで、同日夜に入り、わが企圖を阻止せんとして、出動した戦艦群を基幹とする強大な敵艦隊と遭遇、ここに彼我共に戦艦を交へての凄絶な大夜戦が展開された。

わが艦隊はまたとない好餌に全員の闘志一丸となつて爆發、司令長官自ら陣頭に立つて、水雷部隊を随へ、この有力な敵艦隊に敢然として突入、眞に舷々相摩す肉薄戦を演じ、たちまちにして、戦艦二隻撃沈、一隻撃破其の他、大本營發表の通り、驚くべき戦果をあげたのである。

この海戦において我方もまた戦艦一隻を失ひ一隻を大破した、この海戦が如何に激烈なる死闘血戦であつたかが、窺はれるのである。

第三次ソロモン海戦の戦闘實相こそは、過去のあらゆる海戦がみせてゐた峻烈なる激闘にまさる壯絶そのものであつた。殊にわが艦隊の根幹たるべき帝國海軍の戦艦群

が、狹隘なる海域において戦ふことの不利を顧みず、堂々陣頭指揮をとり、或は、敵陸上航空基地に對し、放膽無比なる決戦に出て居るのであるが、次に第三次ソロモン海戦の戦闘經過を大掴みに観よう。

アメリカ海軍は、ソロモン諸島ガダルカナル島にその海兵を揚陸せしめて以來、絶えず揚陸部隊に對する補強援助を續けてゐたが、十一月十二日には、更に増強の新援軍を補給せんと、輸送船團を護衛しながら有力なアメリカ艦隊がこの方面に北上、出撃して來たのである。わが哨戒機が叩く「敵艦隊発見」の電波に、勇猛なるわが航空隊は直ちに果敢の邀撃を決行し、米新型巡洋艦一隻を轟沈せる上、米乙巡一隻を撃沈し、輸送船三隻を大破炎上せしめ、敵機十九機を撃墜するの戦果を擧げたのである。

この、わが航空隊の攻撃に引續き、同夜は凄絶なるわが夜襲戦が展開された。海上夜戦は、帝國海軍の傳統に輝く得意の戦法であるが、この夜戦にはわが戦艦が率先突入し、ガダルカナル島にある敵陸上航空基地の爆撃圏内に勇猛にも突進し、味方海上部隊の中核をなしつゝ、味方補助部隊の自在なる活躍を、極めて有利に展開せしめる

の戦術をとつた、わが主力艦の巨砲は、次から次へ敵艦の腹中を抉り、炎上する敵艦の紅蓮の焰は、海上をのたうち廻る米巡洋艦の末路を描き出してゐた。

戦艦を主軸とするわが夜襲部隊は、米新型巡洋艦二隻を轟沈、米大巡二隻を撃沈するなど、アメリカ海軍の巡洋艦、驅逐艦十隻を撃沈破するの殊勲を樹てた。この米新型巡洋艦といはれるものは、昭和十五年春竣工せる六千トン級のアトランタ級を指すものであつて、ジュノー、サン・デイエゴ、ジュアン、アトランタの四艦が同艦型にて、いづれも主砲十五センチ九門、五十センチ魚雷發射管六門の火力を有し、速力は卅三ノットである。

明くれば十三日、米艦隊に前夜來の夜戦で大打撃を加へ、その補助艦隊を殆ど撃滅したわが戦艦を主力とする艦隊は、夜中、戰場を去つたのであるが、拂曉にいたり、敵航空機群が猛速力でわが艦隊に接近し、わが砲火のなかで攻撃し來つたのである。わが戦艦は、不幸大破したのち遂に沈没するにいたつた。大東亞戦争勃發以來わが方が戦艦を失つたのはこれをもつて最初とする。

これは、激戦が如何に熾烈を極めたかを如實に物語つてゐるが、百戦百勝の旺盛なる精神に燃えるわが海軍部隊は、同夜、再びガダルカナル島に近接し、巨砲を唸らせ、同島にある米航空基地に巨砲を集中せしめた。敵基地の潰滅をめざすわが猛砲撃は、基地そのものの性能を奪ひ、所在の敵機を破砕炎上せしむるとともに、敵軍事施設に痛烈なる大損害を與へたのである。

さらに十四日の夜、我艦隊は、サボ島附近において、戦艦四隻を基幹と認められる強力なる敵艦隊と遭遇、これと血戦を交へ戦艦四隻の中一隻を撃沈、一隻を大破後沈没ぼく確實、残る一隻にも損害を與へ、更にその補助部隊に致命的打撃を與へたのである。この海戦は日没後より開始され、夜半に至つたのであるが、彼我共に戦艦を基幹とする凄愴な夜戦に終始した、文字通りの血戦であつた。艦隊は、この有力なる敵艦隊に敢然として突入して、驚くべき戦果を擧げたのである。

その夜ソロモン群島附近の海上は静穏であつた。月があり視界もよく利いたが、時折ソロモン群島方面特有のスコールも去來した。我艦隊は敵を求めて西南に走つてゐ

た。午後〇〇時頃、サボ島北方航行中前方海上に遂に敵影を發見した。大型巡洋艦、驅逐艦から成る有力部隊が、我前方を横切るやうにし全速で南下しつゝあつた。サボ島の西方に傾いてゐた五日月が、ハッキリと島の姿を勇士に教へてくれたのだ。我〇〇戦隊は直に敵の追躡に移つた。距離〇〇〇、〇メートルになつた時、初めて、敵も我が〇〇戦隊に氣づき、急反轉するや、いきなり攻撃を開始して來つた。

我兵力を見くびつてか、敵の攻撃は猛烈で、その闘志も並々ならぬものを思はせた。我方は飽まで満を持し、同じく反轉して敵をサボ島の東方に誘致した。氣負つた敵は見事にわが方の誘導にかゝり、サボ島南東側海域に引出されたのである。ここに、彼我補助部隊同士の海戦の火蓋が切つて落された。

この戦闘で特に目覺しい活躍をしたのは〇〇驅逐艦であつた。敵艦隊がサボ島の東側に入るや、突如、同島の西方から全速で敵艦隊の眞只中に肉薄して行つた。正に必殺突撃である。まづ敵大型巡洋艦の懐に飛込んで、雷砲撃を浴びせ見事にこれを撃沈、次いでこれに續く敵驅逐艦を砲撃撃沈、更に逃げかゝる他の驅逐艦に猛砲火を浴びせ

て大破せしめたが、これも間もなく沈没してしまつた。即ち一驅逐艦を以て敵巡洋艦一隻、驅逐艦二隻を屠つたのである。正に猛り狂ふ黒豹とでもいはうか、その俊速を利して實に天晴れなものであつた。これと呼應して、〇〇戦隊は隨所に所在の敵を蹴散らし、巡洋艦一隻、驅逐艦二隻を撃沈して、その補助部隊を潰滅せしめた。この戦闘において先に奮戦した吾が驅逐艦は壯烈なる最期を遂げた。

我主力部隊は、サボ島東側海域に殷々と轟く砲聲を聞きつゝ南下中であつた。午後〇〇時頃である。突如、我艦隊の右前方に敵大型艦二隻を發見した、この時既に月は落ちて雨雲は空を蔽ひ、視界悪く、敵艦の出現は全く突如であつた。〇キロ、全く至近距離だ。一瞬の躊躇なく、我戦艦および〇〇戦隊は直に照射砲撃を開始した。探照燈下に照し出された敵はまぎれもなき戦艦二隻である。我が主砲の猛撃に續いて〇〇戦隊の砲雷撃が開始された。

ここに、彼我戦艦が至近距離において、眞に喰ふか喰はれるかの闘ひとなつたのである。

戦闘開始後六分間で、我が先制攻撃の集中弾により、最初の敵戦艦の艦橋は見事に吹っ飛び、更に〇〇戦隊の魚雷数本命中、艦體は大きく右に傾き、その上甲板は間もなく海水に洗はれ始めた。

この頃である。我が艦隊は先の敵戦艦の前方から新手の攻撃を受けた。更に、敵戦艦二隻が現はれたのである。新手の戦艦が一番艦、二番艦であり、最初の敵が三番艦、四番艦といふが如き陣容と思はれた。全艦隊の士氣は益々旺盛であつた。寧ろ求めても得難い敵戦艦四隻の出現に、全艦隊の闘志が一丸となつて爆發したのである。この時、既に艦橋を吹飛ばされた敵三番戦艦は海底深く撃沈され、二番戦艦は我方の魚雷攻撃により大破のまゝ、暗黒の海上に落伍したのである。

この時、サボ島東側の海戦は漸く終り、敵補助部隊を殲滅し去つた我〇〇戦隊は、主力の決戦場へと驅けつけて來たのだ。サボ島周辺の海上には砲煙が深く立ちこめて、新手の敵戦艦の攻撃は激しかつた。殊に攻撃の核心となつて激戦奮闘を續けてゐた我戦艦への集中攻撃は熾烈であつた。我戦艦は新手の集中攻撃にも屈せず、満々たる闘

志に燃えて戦ひ續けたが、敵の集中弾を受けて、已むなく戦列を離脱したのである。先のサボ島東側の海戦に奮戦した驅逐艦を黒豹に例へるならば、この戦艦の奮戦は正に黒獅子の雄々しさといふべきである。

戦艦離脱によつて、一層奮起した我補助部隊は、既に、大破落伍中の敵二番戦艦に目もくれず遁走中の一番戦艦へと襲ひかゝつた。既に僚艦を失ひ、その補助部隊の殆ど凡てを潰滅せしめられた敵一番戦艦は、裸のまゝで、單身、南へ倉皇として遁れかかつた。我快速〇〇戦隊は、直にこれを追撃、ガダルカナル島西方で攻撃を加へ、魚雷命中を確認したが惜しくも逸し去つた。時に、十五日午前零時半である。

かくて、〇時間餘に亙る激烈な夜戦も終り、再び靜穏にかへつた海上に、落伍せる敵を探し求めてゐたところ、サボ島南東方に敵の二番戦艦と思はるゝ巨艦が殆ど停止の状態で炎々と燃え上つてゐるのを發見した。先に大破落伍して戦場を通れた敵戦艦の最期の姿であることは間違ひなく、天に冲する火焔の中に艦橋の一本煙突が影繪のごとく浮んでゐた。断末魔の大爆音を聞いたのはそれから間もなくであつた。

このやうに、彼我の戦艦を主體とする艦隊の凄壯なる戦闘が行はれたが、日米海戦が、戦艦を陣頭に立て、相見えたのは、實にこの夜戦を以て嚆矢とする。この決戦で、我が艦隊は、敵戦艦四隻の中二隻を撃沈、残る他の一隻にも損傷を與へ、更にその補助部隊を潰滅せしめて第三次ソロモン海戦はわが輝く勝利のうちに幕を閉じた。この海戦に於て、我が戦艦が一隻沈没したのであるが、その最期は海戦史に残る壯烈果敢なものであつた。

すなはち、ガダルカナル島方面の敵飛行機百餘機が我が戦艦目掛けて來襲した。これを一身に引受けた我が戦艦は、百機の敵機に對して、猛烈な攻撃を加へ敵機多數を撃墜したが、戦艦もまた、相當の損害を受けた。この時、サボ島の島影から一隻の敵大型巡洋艦が、我れに止めを刺さんと出撃して來たので、我が戦艦は莞爾としてこれを邀へ撃つた。戦艦は敵巡に巨弾を酬い、忽ち、それを撃沈したが、その後、我が戦艦は長時間奮戦の後、遂に壯烈なる最期をとげたのである。

このソロモン海戦に参加して、殊勳をたてた戦闘機部隊〇〇指揮官の實戦談を初め

當時の様子は次のやうである。

十一月十二日の未明である。赤道を越えて、遙か南のわが〇〇飛行基地では全搭乗員ははち切れんばかりの元氣で海軍體操をやり、整備員たちは、愛機へ燃料積込みに全力を擧げてゐた。作戦指揮所では指揮官たちが作戦を練つてゐた。

この時、サンタクルーズ島南方に、有力なる敵機動部隊が針路をソロモン群島にとつてゐるとの報告が入つた。敵は性懲りもなくわが術中に陥つてきたのだ。

『飛んで火に入る夏の蟲だ』一同は思はず快哉を叫ぶ。直ちに、出發用意の命令は八方に飛んだ。

敵艦隊發見の詳報は次ぎつぎと入つてくる。指揮官も搭乗員も武者ぶるひを禁じ得ぬほど戦闘精神を漲らせつゝ、全員整列を終ると、出撃命令を下す〇〇司令の眼が緊張と決意に満ちた。

そして指揮官以下全員は莞爾として頷き『生死を超越して、只やつてやつて勝ち抜

くのだ、徹底的にやつ、けるのだ』と答へてゐた。かくて、午前〇時〇分雷撃機隊の出發に續いて、戦闘機隊も堂々離陸、司令以下地上勤務員の打ち振る帽子に無言で應へながら、大編隊は轟々たる爆音を南海の朝空に響かせて、一路南方を目指して飛び立つた。

ソロモン群島一帯は厚い積亂雲に掩はれてゐる。

この中を縫つて飛翔すること〇時間、わが編隊は〇〇島上空に鵬翼を現した。敵艦上空に近づいた。

このとき正〇〇時、前方に敵船團の一部を発見したと思つた瞬間、遙か下方でバツバツと白煙が散亂した。

敵の防空砲火だ——と見る間に、敵グラマン戦闘機その他が僚機の下方に六機編隊、右前方に三機、五機と挑んで來た。機内にサツと緊張が漲る。敵は第一次ソロモン海戦以來馴染深いグラマン戦闘機とP三九、P四〇だ。全部で二十四五機、この調子なら大激戦にならうが獲物には相當ありつける。指揮官機が前方に左旋回したと見

るや、わが〇番機は既に空戦に入つてゐた。グラマン一機にまづ一撃を喰はし他の敵二、三番機に機銃掃射を浴びせると、二番機の翼根に命中したのかバツと火を吐き、その一撃で敵機は空中分解して墜ちて行つた。僚機は見事な編隊で到るところに大空戦を展開してゐる。わが〇番機が左方に急旋回したかと思つた瞬間、またも敵二機が火を吐きながら墜ちてゆく。落下傘を開いて降下して行く敵兵の姿が見られた。遮風板を射ち抜かれてガクリと首を垂れたまま機體もろとも落ちてゆく敵機もあつた。

P三九、四〇型とちがつて、グラマン戦闘機は中々優秀だが、所詮わが戦闘機陣には問題にならない。

従つてわれわれとの巴戦を極度に嫌つて、高々度戦法や雲間にかくれて奇襲戦法でやつて來る、僚機は敵の戦術を知り、巧みにこれを捉へて一撃を食はしてはすぐ雷撃機隊の掩護につく、白晝の大空中戦はかくて廿五分間續き、グラマン、P三九型、P四〇型など敵機撃墜十九機の大戦果をあげた。この間わが雷撃機隊の掩護の下に猛烈な防空砲火を衝いて正確な雷撃を敢行した。そのころ敵防空砲火はますます物凄く、

弾幕は厚い壁のやうに中空に湧き上つてくる。敵艦の主砲、副砲も一齊に砲撃を開始してきた。敵の必死の防戦であるが、わが航空部隊にはこの弾幕の壁も目に入らぬやうだ。見敵必殺の海軍魂はムクムクとたぎり立つた。

全雷撃機隊は鮮かな編隊のまま、敵艦めがけて衝き進み、雷撃針路に入ると見るや高度をグッと下げて〇〇メートルの低空まで突つ込んだ。

この瞬間、早くも先登を切つてゐた敵甲巡の胴體からマストの二、三倍もある水柱がサツと上り猛焰を噴きあげた。

『命中だ、命中だ』神技とも思はれる間髪の間沈んであつた。

この時、〇番機は兩翼を大きく振つた。最期の訣別だと思つた瞬間、火達磨となつて敵乙巡の胴體めがけて自爆したのである。何たる壯絶さだ。これと殆ど同時に僚機の放つた魚雷はこの敵乙巡の胴體に命中、二三百メートルもの水柱が上つた。〇番機が左翼を上げて右下方に旋回するとそのまゝ、眞一文字に敵驅逐艦の甲板めがけて突つ込んで行つた。實に立派な最期であつた。この間敵の輸送船團もつぎつぎと火焰に包

まれて行く。わが戦闘機隊は雷撃機隊掩護の傍ら、たまりかねたやうに急降下しながら機銃掃射に移つた。敵乙巡の甲板では、顔を掩つて倒れゆく敵水兵も見える。黒煙に包まれながら大きく傾斜した敵船もある。海上一面、油と浮流物が漂ふ中を、南に北に逃げまどふ敵輸送船もある。戦闘機隊某中尉は當時の海空戦を追想して、

『全くスコールのやうな猛烈な防空砲火だつた。こんどの雷撃戦は、今次戦争の中でも最も凄絶な攻撃の一つである、それは、空戦や爆撃戦闘なども遙におよばないと思はれる、言語に絶した死闘であつた。敵驅逐艦の上甲板めがけて自爆して行つた友軍機や、船團のマストの上に火達磨となつて突つ込んで行つた僚機の姿は、實に立派な最期であつた。敵戦闘機との空戦ではグラマン機は相當攻撃精神も旺盛で、手應へもあるにはあつたがP三九、P四〇に至つては雲の中に出て來ない始末だつた』と語つてゐる。

かくて、この日も思ふ存分敢闘したわが航空部隊は、歸路の悪天候も克服して、つぎつぎに基地に歸還した。迎へる〇〇司令官、〇〇隊司令は大任を果した搭乗員たち

から戦果に驕らず事もなげに語る報告を受けた。〇〇部隊長は簡単に「目的を達成、長途御苦勞」といつただけであつた。

この第三次ソロモン海戦の綜合戦果は次の通りであつた。

- 一、艦 船
 - 撃沈 戦艦二隻、巡洋艦十一隻、驅逐艦三隻乃至四隻、輸送船一隻
 - 大破 巡洋艦三隻、驅逐艦三隻乃至四隻、輸送船三隻
 - 中破 戦艦一隻、驅逐艦三隻
- 二、飛行 機
 - 撃 墜 六三機
 - 撃 破 十數機
- 三、我方の損害

戦艦	一隻沈没
同 艦	一隻大破
巡洋艦	一隻沈没
驅逐艦	三隻沈没
輸送船	七隻大破
飛行機	三二機自爆
	九機未歸還

かくて、八月七日展開された第一次ソロモン海戦以後間断なく戦はれた第一次、第二次ソロモン海戦、南太平洋海戦及び第三次ソロモン海戦等、いづれも特異の戦闘様相を呈せる大なる近代海戦であるが、この數多の大海戦が同一海域にて、しかも、かかる長期に互り展開されたことは、全く世界戦史に絶するところである。

この間、わが戦果は前述の如く赫々たる武勳に輝いてゐるが、同時にこの戦果を得

るために捧げられたわが損害は決して寡少ではなかつた。米英必滅の熾烈なる海軍精神に燃える盡忠報國の一念にのみ邁進するわが將兵の貴き血潮が、この幾海戦にも捧げられてゐるのである。われらは前線の肉弾と銃後の汗によつて米英軍と決戦しつゝ、あるのであるが、この前線の壯烈無比の盡忠精神に應へるものは、ただ一つ銃後の鐵石心を更に一段と昂揚、銃後も肉弾となつて生産戦に突撃することである。

ルンガ沖大夜戦

再三の敗戦にも懲りず、敵はなほも我が方を窺ひ、反撃を試みんとした。これを察知するや、わが艦隊は猛然としてこの敵陣に突入、敵に甚大な打撃を與へた。これが十一月卅日、ガダルカナル付近における「ルンガ沖夜戦」である。

この日、わが水雷戦隊は、壓倒的に優勢なる敵艦隊に、肉薄突撃し、つひに敵の主

力たる戦艦一隻を葬り去つたほか、巡洋艦一隻を轟沈、驅逐艦四隻を撃沈破した、この奮戦は、日清、日露戦争以來のわが勇猛なる水雷戦隊の傳統を遺憾なく發揮したものである。

帝國海軍部隊は、南太平洋ソロモン海域方面に於て尙激戦展開中であつたが、十一月三十日夜間敵米艦艇は更にルンガ沖海域に出撃中なることを探知したので、我が水雷戦隊は直ちに出撃、ルンガ沖にその所在を突き止めるや猛然夜襲を決行した。

即ち、我が水雷戦隊は早くも敵巡洋艦數隻、驅逐艦數隻を下らざる有力部隊のあることを探知し、それに猛攻撃を加へたが、猛攻撃中に敵戦艦を發見したので、士氣、いよいよ百倍した。

思へば我が、水雷部隊は彼のワシントン軍縮會議以來二十年の久しきに亙つて、夜戦の猛訓練を重ねてゐたので、この夜戦に於ても、敵陣に突入し、得意の強襲を加へ、堂々神力を發揮し、それを壊滅せしめ快勝したのである。

然も、敵もこの一戦に生死を賭してゐただけに侮り難い反攻を見せたが、我が水雷

戦隊の肉薄戦、飛燕の如き妙技により敵戦艦に魚雷十本を射込み、巡洋艦にも亦十數本を射込んで轟撃沈した。この大夜戦の状況はガダルカナル島に奮戦中の我が陸軍部隊も明瞭に現認したのである。この海戦に於て、我が方の損害は驅逐艦一隻であつたことを見ても、我が術力の卓越せるを立證するに足らう。

この夜戦は十月十一日、サボ島夜戦の如く巡洋艦の活躍を主體とするものでもなく、又、バリ島沖海戦の如き敵輕艦隊を撃破した例とも異なり、渺たる水雷戦隊のみを以て克く壓倒的優勢なる敵主力艦に肉薄、これを撃沈し、補助部隊を撃破した點で全く戦史に比類を見ず、帝國海軍が五・五・三の劣勢比率を克服するためあらゆる艦艇を擧げて主力艦撃沈第一主義の猛訓練を積んだ成果がここに現れたものと言へる。特に戦形を整へ我を邀撃すべく展開しつゝあつた敵に突入してこの戦果を擧げたことは、勝報をして一層光輝あらしめるものであらう。この海域が、尙幾多の血戦死闘の舞臺たることは覺悟せねばなるまいが、ソロモン海戦以來五次の海空戦によつて彼我戦鬪意識、術力の懸隔は何人の眼にも明らかとなり、又、敵は航空兵力ともにも戦鬪

力の基幹と恃んだ戦艦四隻を海底に送り、一隻大破、二隻中破、計七隻の損耗を蒙つたが、敵がいかにその生産力に物言はしたにせよ、真珠灣以來とも云ふべき主力艦艇の大損害は、今後の作戦に少なからぬ蹉跌を來さしめずには措かぬであらう。このことは最近の諸海戦に於ける我が戦艦の目覺ましき活躍と關聯して特に注目を惹くところである。

ルンガ沖夜戦の戦果は次の如くである。

戦艦	一隻撃沈
オーガスタ型巡洋艦	一隻轟沈
驅逐艦	二隻撃沈
驅逐艦	二隻火災
我方の損害	
驅逐艦	一隻沈没

この夜戦で水雷戦隊の殊勳はいよいよ輝くが、一體、帝國海軍は水雷戦に輝く歴史を誇つてゐる。堂々たる奇襲は我が海軍の獨壇上であり、七首を呑み敵の咽喉部に迫るのは水雷戦隊である。砲煙彈雨を冒し、激浪を蹴破つて敵主力に突撃し、一發必中を期して果敢なる襲撃を決行するのは驅逐艦と水雷艇である。

日清海戦は我が水雷艇隊の威海衛襲撃を以て終焉を告げ、日露海戦また旅順港の魚雷攻撃に始まり明治卅八年五月廿七日日本海々戦は、夜半の魚雷戦を以てバルチック艦隊に止めを刺し、大海戦の幕を閉じたのである。世界大戦にも、我が水雷戦隊は地中海に活躍し、屢々敵の潜水艦を撃破して雷名を世界に轟かしたのであるが、又、今次の大東亞戦に於ても、昭和十七年二月廿日午前〇時バリ島東方ロンボク水道に巡洋艦二隻、驅逐艦三隻よりなる敵米蘭聯合艦隊を發見、我が水雷戦隊所屬の驅逐艦二隻は、猛然と突進驅逐艦四隻（米二隻、蘭二隻）を撃沈、敵巡洋艦二隻、驅逐艦一隻大破せしむるの偉功を樹て、更に、二月廿七日より三月一日迄に於て激戦が交されたスラバヤ沖バタバピヤ沖兩海戦に於ても、水雷戦隊の活躍は實に目覺しいものがあつた。

艦船別撃沈破數 (第一夜沖ガナル後)												
敵側の損失												
艦別	擊沈	大破	中破	計	沈没	大破	中破	計	合計	合計	合計	合計
戰艦	4	1	2	7	1	1	0	2	1	1	1	3
空母	4	2	2	8	0	1	0	1	1	1	1	3
巡洋艦	3	5	0	8	3	0	1	4	3	3	6	9
驅逐艦	2	2	3	7	7	1	2	10	2	2	4	6
潜水艦	9	1	0	10	1	0	1	2	1	1	2	3
掃海艇	1	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0
艦型未詳	0	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0
計	70	25	7	102	12	3	4	19	12	4	16	28
輸送船	17	6	0	23	5	10	2	17	5	10	2	17
合計	87	31	7	125	17	13	6	36	17	13	6	36
飛行機撃墜破	八五〇機以上											
自爆未歸還	一七											
破	一三											
二〇六機	六											
三一機	三六											

戦 果

大 中 破				拿 捕				我方の損害	
米	英	蘭	計	米	英	蘭	計	波没	大中破
メリーランド型 1 ネバダ型 1 ペンシルバニア型 2 ノース・カロライナ型 1 テキサス型 1 艦型未詳 1	ウオースパイト型 1 クィン・エリザベス型 1		9					1	1
新大型 1 新中型 1 艦型未詳 2			4					3	2
ノーザンプトン型 1 サンフランシスコ型 1 甲巡又は乙巡 12	リアンダー型 1 アレスサ型 1	トロンブ型 1	18					3	3
18	5		23					14	9
	2		2	1			1	1	1
			58					8	1
			6	2			2	特種 8	
			2					1	
			1	2			2	6	1
2			2	1	1		2		
			24		2		2	2	
			2					2	4
			3						
				拿捕 503隻 (220,000噸)				波没損傷 65隻 自爆及未歸還 556艘	

即ち時期に於て薄暮戦、夜戦、黎明戦が相次いで決行され、水域も、東西五百哩に及ぶジャバ海上、更にその交戦は主力の砲撃戦、驅逐艦の雷撃戦、航空部隊の偵察爆撃戦、潜水艦の大活躍等、空、海、水中の三位一體の協同作戦の至妙は遺憾なく發揮され、殊に水雷戦隊の果敢な挺身夜襲戦は敵乙蘭巡旗艦デ・ロイテル及び蘭乙巡ジャバの撃沈、エクゼター中破（翌日撃沈）英蘭驅逐艦三隻を撃沈するの大戦果をあげてゐる。又、十月十一日サボ島の夜戦に於ける水雷戦隊の大活躍又近くはソロモン海戦における屢次の大夜戦に、我が水雷戦隊の活躍は、常に特筆さるべき輝かしき戦果を擧げてゐるのである。

かくして、第一次ソロモン海戦よりルンガ沖夜戦に至る、綜合戦果は右頁の表のごとくであり、開戦一ヶ年綜合戦果は次頁のごとくである。

海 軍

	撃 沈			
	米	英	蘭	計
戦艦	カリフォルニア型 2 メーランド型 1 アリゾナ型 1 オクラホマ型 1	プリンス・オブ・ウェールズ レパルス 2		12
航空母艦 (水母を含む)	ラングレー レキシントン サラトガ ヨークタウン ワスプ エンタープライズ ホーネット	1ハーミス		11
甲級巡洋艦	オーガスタ ヒューストン マープルヘッド ポートランド型 サンフランシスコ型 ウィチタ型 アストリア型 オマハ型 オーガスタ型	イクゼター コンウォール ロンドン型 オーストラリア型 艦型未詳	1 1 2 1	47
乙級巡洋艦	3 新特設型	ホバード型 アキリーズ型	1 1	
駆逐艦	21 甲巡又ハ乙巡	21		
特務艦	32	12	4	48
潜水艦	3(エタを含む)		1	4
砲艦				93
敷設艦				8
掃海艇				5
魚雷艇				7
其他小艦艇		9		9
特設艦船				16
艦型未詳				3
船 舶	撃沈破 416隻(2,240,000噸)			
飛行機	撃墜破 3798機以上			

一、ソロモン海域の新展開

注視の島嶼ガダルカナル

ガダルカナル島は西北、東南の向きの全長が約百六十キロ、東北、西南の向きが四十キロ、わが千葉縣大の島であるが、全島殆んど密林をもつて蔽はれ、食べ物などは殆んど何もできない土地である。

ソロモン群島が発見されたのは、一五六七年のことであり、スペインの航海家メンダニアは、太平洋に乗り出してこれを発見し、「イスラッド・ソロモン」と命名した。彼は本國の移民を惹きよつて惹きつけるために、昔ユダヤのソロモン王が世界第一の宮殿をつくつて榮華を極めたあの金の藪は、この島の金から取つたのである、と宣傳してこのソロモン群島といふ名をつけたのである。そ

の後、怒ばつた連中が大分ここに出掛けて来たが、金は一塊もない。作物は何もできないし、氣候は炎熱である。みんな失望して、誰も行かなくなつてしまつた。かうしてソロモンの植民政策は失敗に終つた。その後しばらく忘れられてゐたこの群島が、十八世紀の半ば頃となり、捕鯨船の寄港地となるに及んで次第に世界の注視をうけ、十九世紀に入ると、英獨の勢力が侵入し、互に争つたが、一九〇〇年の英獨協定によつてブーガンヴィル、ブコの兩島がドイツの手に歸し、他は總て英領となつたが前大戦の結果、上記兩島は濠洲委任統治領となり、現在に至つたものである。

ソロモン群島の中で第二番目に大きい島がガダルカナルであつて高さ數百メートルの山が幾つもあり、それに有用でない樹木が生えてゐる。恐らく清淨な呑み水なども手に入れることが中々難しいことと思はれる。その點でも前線の將兵の勞苦は、言語に絶するものがあると思ふ。

さて、このガダルカナル島へ一昨年八月六日の夜、突如としてアメリカの海兵隊約一箇師團が上陸した。

アメリカ海兵隊の装備

アメリカ海兵隊とは、アメリカの海軍においてわが海軍の特別陸戦隊のやうな地位にあるものである。海上において戦ひ得る性能を持ち、更に上陸すれば陸上においても有効に働ける特徴を持つてゐる部隊である。これは前には二萬ぐらゐしかゐなかつたが、昨年の暮ぐらゐまでに六萬ぐらゐに増してゐる。今はもつと増してゐると思ふ。これはアメリカが上陸作戦を非常に重要視し始めた證據だと言へると思ふ。もう一つの證據としては、水陸兩用戦車ができた。上陸部隊を乗せて推進機で海の上を走つて行き、いよく海岸に達すると、クラッチを入れ換へて無限軌道に變つて、珊瑚礁を乗り越え、砂濱でも石のある海岸でも暴進する。あたかも鱉のやうな性質を持つてゐるので、これを「鱉戦車」と俗稱されてゐる。さういふものを準備して来たことは、上陸作戦を將來やることを示して来たと言へよう。また一方から言へば、いかに彼等が上陸作戦をもつて陸上基地を取りそこに「沈まざる航空母艦」をつくるかを考へてゐたことがわかる。

この一箇師團ばかりの、アメリカで最も精銳といはれる水陸兩用部隊が、ガダルカナルを一舉に占據しようとした。その翌日、前に述べたやうに第一次ソロモン海戦が起つて、その上陸せしめようとした部隊を一舉にやつてしまつた。その間逸早く遁走した輸送船もあつたが、敵は非常な短い期間に別にそこに陸上の設備を殆んど完備せんばかりに急遽取付けてしまつた。この水陸兩用部

隊は戦車のほかに重機關銃を持ち、重砲まで準備してゐる。高角砲もあるし、殆んど陸上において働き得る海軍部隊としての最強のものであつたに相違ない。

その設備をした後に、わが方が上陸を始めようとしても、その上陸作業がいかに困難であつたかは想像に難くない。殊に敵はそこに逸早く飛行場を完備した。敵はそのガダルカナルにある飛行場を基地としてその附近の制空権を獲得せんと努めた。わが方はそれを去る約〇〇マイルの地點から飛んでいつて戦ふのであるから、その戦ふ難易は非常な差がある。わが方が敵の飛行機を一日全滅せしめると、數日後にはまた多數の飛行機が補給されるといふ状況であるから、その困難の程度もおよそ想像に難くない。すべての状況がわが方に困難で、敵に容易な状況で戦はれた。わが方の飛行機は一機落ちる前には必ず敵の三機乃至四機は落してゐる。しかし、生産力は敵はわれの〇倍であるが故に、なか／＼そのくらゐの比率では戦ひを續けてゆくことは困難であつて、もつと急速に補給増強しなければならぬ状態にある。

皇軍上陸作戦

そこにわが方の精鋭なる陸軍部隊が海軍の緊密なる援護の下に上陸し始めた。この陸軍部隊上陸に関する協力ぶりは世界に曾て例を見ざるものであつて軍に緊密なる協力といふ言葉などでは現はしきれない。まつたく陸軍も海軍もなく、たゞ皇軍といふ一つのものになつた協同作戦が行はれた。わが海軍においても、敵が非常に有利な状況の下に防備してゐるところへ、いきなり援護をしながら大輸送船を送ることのいかに被害が大きいかは承知してゐる。しかし、それを敢へてわが部隊を補強し、増援し、兵站を増すことを續けて行つた。陸軍の部隊も非常にむづかしい作戦であることはわかつてをりながらも、海軍の爾後の作戦を有利に導くためにさういふ所へ上陸作戦をやつた。まつたくこの陸海軍の共同の状況は世界に比類のない、恐らく絶後と言はざるも、空前の協同作戦であつたと言へるであらう。

ソロモンの戦略的意義

なぜ敵はこゝを執拗に守つてゐるか。これは敵の言つてゐる状況によれば、一つは、イギリスの滅亡した後の最もよき遺産としてアメリカは濠洲を狙つてゐる。その場合に濠洲に日章旗が既に立

つてゐては面白くない。飽くまでも日章旗を立てさせてはならないといふ考へがある。もう一つは今までの負け戦を取返さうとする考へから、その反撃作戦の基地となるものは濠洲以外にない。その重要な基地に日章旗を立てさせてはいかぬ。自分達のものにしておかなければならぬ。この二つの點が彼らが戦略的に濠洲を非常に重んずる理由であり、それにはソロモンを握つた方が有利であるといふのが、アメリカの見方である。そこにアメリカがいかなる損害をもいはずソロモンにやつて来る理由がある。もう一つの見方をすれば、これは單なる一つの島の争奪戦ではなくて、一つの『沈まざる航空母艦』の争奪戦と見ることが出来る。あそこに有力なる飛行場を急速につくつて航空基地として作戦することが、濠洲の守りとして非常に強いことを彼らは當然戦略的に考へてゐるに違ひない。またもう一つは、あの方面の海域こそは、西南太平洋に對してハワイ乃至アメリカ本國から補給する重要な通路である。その附近の制海權を握ること、従つてその制海權を守るべく制空權を得ること、この二つに非常に重點がおかれてゐる。

アメリカはソロモンを據點としてハワイまで結ぶ線を主作戦線と稱してゐるやうである。その線確保することによつて、日本に南洋から補給される軍需品の材料の輸送を阻止する。従つて日本がその線を阻止されれば、軍需品がつかれなくなり、戦争ができなくなるだらうといふ見方をして

ゐるやうである。尤も、これはひどい誤つた判断であるが。またこの主作戦線から西に延びてゆけば、そこに日本の占領地がずらりと並んでゐる。これを次から次へと奪回してゆくことも意圖されてゐるやうに見受けられる。

カダルカナルを喪失せば

そこで、アメリカがガダルカナルを失つたならばどうなるかといふ問題であるが、これは彼らが今夢のやうに考へてゐる軍需品輸送の阻止、従つて軍需品の生産を不可能ならしめる。更に日本の占領地域を奪回することが不可能になり、濠洲を守ることが不可能になる。遂には濠洲を足場として日本に大反撃をすることが不可能になるのである。

幾何級數的戦果の基因

こゝで、海戦の結果を眺めると、第一次ソロモン海戦、第二次ソロモン海戦、第三次ソロモン海

南太平洋海戦、ルンガ沖海戦、どれ一つとつて見ても、決戦、或ひは死闘戦といふ気持ち非常に
つよく現はれてゐる。ほんたうに死闘である。しかも、その間に非常に大きな差ができて来る。勿
論こつちも犠牲を拂つてゐるが、向ふの大きな犠牲とは比較にならない。両方とも決戦といふのに
あれだけの開きがどうして出るかといふ疑問を持たれるかも知れない。地上部隊の戦闘であると五
分々に近い戦争になる。彼我の死傷は、ひどい差がないのが、人力で戦ふ限りにおいて普通であ
る。人間はそんなに格段の差はないものだから、こちらの犠牲は零で向ふは全滅といふことは、地
上作戦ではできない。ところが、海軍ではこちらが殆んど皆無で向ふが全滅といふ戦ひができる。
それならば向ふはよい加減にやつてゐるのかといふと、さうではない。両方とも死闘だが、海軍の
戦争の特徴として、どつちかが完全にやつつけてしまふか、負けてしまふかである。地上のごとく
五分々の戦争をすることは非常に少い。敵の發見の時期、指揮統率の上手下手、あとは砲術、水
雷術、飛行術の優劣によつて、少し差がつき始める。その差のついたものが、忽ち幾何級数的にあ
がるのは、陸軍と違つて、海軍は殆んど機械力で働くからである。海軍のことを、ふかく知らない
ものが考へると、向ふは本氣になつてゐないのではないか、或ひはそんなに大きな戦果はあがるの
はをかしい、と思はれるかも知れないが、さうでない。實際のところ訓練によつてそれが技術にな

つて現はれて来ると、そこに差がつき始めたら、グツと差がついて来る。腕力でやるならば腕力に
は限りがあるから、差が大してつかない。ところが、機械力をいかに使ふかといふことだから、そ
の差はこのやうに大きくなつて、種々の海戦の戦果を生むにいたつたのである。

型やぶりの近代海戦

その他に、今度のソロモン海戦で幾つかのことがわかつて来たが、驅逐艦の戦闘に日本は非常に
力を入れてゐたのが、その効果が現はれて来た。それは寡をもつて衆に勝つといふことである。陸
戦では障害物を極力利用して、自分の身體を隠して敵をやつつけるが、海上では障害物はない。海
上で強ひて言へば、障害物は、水平線或ひはスコールであらう。これは非常に大規模な障害物であ
る。そのほかはみな現はれてゐる。殊に飛行機が飛んで来てちゃんと偵察してゐる。だから、現代
では水平線の向ふに對峙しながら、三百マイルの距離で既に決戦をやつてゐる。今までは決戦距離
は七千メートルとか一萬メートルとか言つてゐたのが、今では三萬メートルである。

もう一つ障害物を考へれば、暗さといふことである。闇が障害物である。日露戦争以後、ワシン

トン會議頃の考へでは、この暗さだけが唯一の障碍物だと考へてゐた。その障碍物を極度に利用しよう。さうしなければ寡をもつて衆に勝てない。そこで夜襲が日本海軍において特に強調された。敵になるべく見えないやうにするには身體が小さい方がよい。それで驅逐艦が生れた。ごく少数の者で敵を瞬間にやつつける。それには魚形水雷がよいといふので、水雷戦隊が日本で發達した。その考へ方は、夜になるのが待ち遠しい。暗ければ暗いほどよい。アメリカの方はさういふ考へを持ってゐない。衆を待んでやるから、堂々と見えやすい方がよい。彼らの狙ひは敵でゆかうといふわけで、夜戦などは考へない。向ふは夜になると戦争は終つたといふ氣持ちに一應なる。日本の方は暗くなると今からやるのだといふ氣になる。そこに非常な差が出る。今度のルンガ沖の夜戦がさうである。第一次ソロモン海戦におけるツラギの夜戦がさうである。おれは型破りで巡洋艦がやつたのであるが、本格的な夜戦は驅逐艦がやるのが普通である。一番大きな敵に一番小さな驅逐艦がぶつかつて行つて、ルンガ沖でやつた。さういふ日本の特徴が今度現はれて來た。

さらに訓練といふものは、人間の性能を變へるものである。それは目である。向ふは夜になると明りをカン／＼つけて、ランプをやつたり、麻雀をやつてゐる。目をちつとも暗い所に慣らしてゐない。日本の海軍は障碍物をなるべく利用しようとするから、暗くしておいて、暗い中で敵を見

る訓練をやつてゐる。だから、その専門の見張兵は普通の人間の性能の上に出てゐる。普通の人間では全然見えないものが見える。それが今度の夜戦で勝を占めた根本理由である。敵の哨戒艇がツラギの灣口に入つた時に、ちやんと來てゐる味方を認めたのか、認めないのか、鐵砲一つ射たすに歸つてしまつた。こつちは全部見てゐる。その次の日にやつて來た敵の旗艦を魚雷を○發射つて沈めてしまつた。こちらだけはちやんと向ふの艦形もわかるし、距離もわかる。敵はわからないから、ぼんやり來たので、いきなり魚雷でやつてしまつた。これには驚いたらうと思ふ。かういふやうに人間の性能まで訓練の結果變ることが實證されたのである。

不滅の殊勳、第二特別攻撃隊

交換船で、第二特別攻撃隊の四勇士の遺骸が歸つて來た。あれを向ふではナイトに類するやうな氣持ちで武士道的に取扱つてゐる。それほどあの特別攻撃隊の行動は濠洲人に非常な衝動を興へたのである。濠洲人に武士道的精神が今日あるかないかは別問題として、彼らアングロサクソンが日本を見る場合に、物質的には日本より強いと彼らは自負してゐるが、しかし、精神的には日本には

敵はない、日本に勝つためには精神的方面で日本より強くならなければならない、と考へてゐるらしい。その方便として、あの葬式にあつてシオート將軍が放送したのであるが、それによると、「人間が自分の命を投出してかゝれば、國のためにこれほど大きなことができるのだといふことを今われ／＼は事實をもつて見たではないか、濠洲の青年よ、立て」……とかういふことを言つて青年の士氣を鼓舞してゐる。そこに彼らが思想的、精神的に貧弱であることを自ら明らかにし、また自分の精神力を激勵しようといふ意圖が現はれてゐる。

このシドニーの特別攻撃隊が、敵の心膽を寒からしめる多大の効果をあげたのと時を同じうする五月三十一日、別部隊の特殊潜航艇がマダガスカルを襲つて、デエゴ・スワレズにあつた敵の戦艦クキン、エリザベス、巡洋艦アレクサーに攻撃を加へた。その任務を達成したる後、特殊潜航艇を海岸につけて上陸し自分の愛刀を掲げて、僅か四人で敵の何十倍かの中に切込んで行つたすでに特殊潜航艇で敵を撃破したのだから、歸らうと思へば歸れるにも拘らず切込んで行つて華々しい最後を遂げてゐる。これこそ實に倒れてなほやまざる海軍精神の發揮である。第一次の襲撃をうけた敵側としては、一應の手配が出来てゐる譯であるから、第二次の攻撃は、第一次より難しいのである。かくてこの攻撃によりインド洋に作戦せんとしてゐた敵部隊に一大挫折を招來せしめたわけである。

三、アメリカの對日新作戦

沈まざる航空母艦

太平洋、印度洋上における各海戦の推移、戦鬪の状況より判然するやうに、各海戦は正に凄愴なる『海上決戦の連続』であることは、從來の海戦には見られなかつたことであつて、近代海戦の特質を物語るものである。

これは主として、航空兵力が作戦上きはめて重要な要素としての價値を、實戰的に立證するに至つたこと、かつ、敵が強大なる生産力に基礎づけられてゐること等によるのであるが、ことに相次ぐ海上決戦による敗北にも拘らず、敵が戦意を喪失するどころか『最後の勝利我れに在り』と呼號し、新機軸をもつて、執拗なる抗戦を持續しつつある、この現實を見逃がすことは出来ない。

日露戦争においては、日本海の大戦による敗北によつてロシアは遂に戦意を失ひ、戦争が比較的短期に終末を告げたに反し、今次大東亞戦争においては、戦争の終末は簡單には決せられないのである。この點が兩戦争の本質的に異なるところで、とくに注意を要するのである。

大東亞戦争開戦當初、米國海軍の保有量は、アメリカ側の公表によれば戦艦十七隻、航空母艦七隻（外に特設空母二隻）巡洋艦三十七隻、驅逐艦百八十五隻、潜水艦百十八隻と稱して居たのであるが、最近に至る約一ヶ年間に於いて戦艦約十隻、航空母艦約十隻、巡洋艦二十九隻、驅逐艦約五十隻、潜水艦約五十隻を喪失して居る。

ところが、この間、アメリカは、中破以下の艦艇を修理すると共に大建艦計畫を、躍起となつて促進し、戦力の補給に主力をつぎ込んでゐる。その實数は未詳に屬するが、外國新聞等の傳へるところによると、開戦以來戦艦四隻、防空巡洋艦六隻、航空母艦や特設航空母艦も十隻以上竣工したと云はれ、現に各海戦に出現しつつある新艦艇の例より見ても、新艦艇の建造も、相當數に上るものと見なければならぬ。

また米國は、開戦以來、從來固執し來つた戦艦第一主義を一擲して、航空母艦重點方針をとり、これと共に航空機の飛躍的増大に乗り出して居る。これはアメリカの戰略思想の變革を證明するも

のであるが、今後アメリカは航空母艦を初め、多數の艦艇を建造生産するであらうし、ことに、航空機の如きは最近になつては、月産四千機を突破すると稱して居る情況であり、商船の如きも昭和十七年十月には一萬トン級の商船八十一隻建造に成功したと稱してゐるのである。

かゝる數字は、額面通り受取る必要はないとしても、アメリカの生産力が、現在作戰の要求に相當程度即應しつつある事實は、決して輕視を許されないのである。

もとより、わが方も所要の戦備は着々として整備されつつあり、ことに精銳なる新戦艦幾隻もがすでに就役、堂々第一線の護りについてゐる他、開戦以來の戦訓を取入れたわが獨特の航空母艦も、巡洋艦その他の艦艇と共に次々に建造就役中であり、わが海上勢力は日々威力を、加へつゝあることは、まことに力強い限りと云はねばならぬ。

敵が如何に戦備を整へ、反撃をくり返さうとも、すでに掌握されたわが戰略態勢は、嚴として固く、勝算は炳乎として、わが掌中にあるのである。だから、敵の生産力を計數的にのみ觀て、戦局を消極的に觀測したり、或は敵の誇大宣傳に乗せられて、萬一にも退嬰的感念に捉はれるが如きことがあつてはならないのである。

さて、プリンス・オブ・ウェールズが不沈戦艦と號せられたのは昭和十六年の十二月まで、あつ

た。彼は、艦底を三重にし、四十センチの舷側装甲、二十センチの甲板装甲を張つて、一分間六萬發と稱する強烈なる防禦砲火に保護せられて、いかなる魚雷にも、いかなる敵航空部隊にも犯されることなしと呼號してをつたのである。

そして彼が東洋に來る以前に、何回か敵襲を受けた際にも、この防禦砲火の彈幕以内には、敵を近づけなかつたものであつた。

ところがわが航空部隊がこれに襲ひかゝるや、僅かに〇〇機を以て、この彈幕を冒して、身を以て突入、爆彈、魚雷を至近距離において發射し、つひに不沈と誇稱したプリンス・オブ・ウェールズを撃沈するに至つた。

彼等は日本に對する作戰の根本方針として、戦艦を中心としたる輪型陣を用ふることになつてをつた模様であるが、プリンス・オブ・ウェールズの如き完全に近き戦艦を以てしても、日本の航空部隊に會へば一たまりもなく敢へない最期を遂げるといふこの事實は、彼等をして日本に對する戰爭方針を一變せざるを得ざらしめたわけである。

すなはち、極端から、極端に走り易いアメリカ人は、この事實を見ると、

「戦艦がこんなに弱いものならば、戦艦は要らない、その代り、戦艦をやつつけ得る飛行機を多く

しやう、ハワイにおいて戦艦がたくさん沈められて却つて幸であつた」とさへ言ふやうになつた。

さうして、航空機を盛んにするといふことは、やがて、航空母艦を増強するといふ結果を招き、十二月十日のマレー沖海戦のその日、即日四十億ドルの航空追加豫算を以て三萬五千トン航空母艦十五隻の建造を決定した。これはやがて輪型陣の中心勢力を航空母艦に代へやうといふ意圖を示唆するものである。

しかし、航空母艦は、攻めるには極めてよいが、敵の襲撃を受けた場合、廣大なる飛行甲板といふ脆弱點を持つてゐて、防禦に甚だ弱い。今までアメリカが虎の子のやうにしてゐた航空母艦が、いくつかの海戦によつて殆ど撃滅せられたことは、これを明かに示すものである。又、その後のいくつもの海戦が航空母艦の攻撃力の増大を示すと同時に、その防備の脆弱性をも示したことは覆ひ難き事實である。

そこで、將來の航空母艦は、沈まざる航空母艦、即ち、島嶼の上に根據地を持つところの航空隊、これによらざるべからずとするに至つた。その論據は、殊にマレー沖海戦におけるわが航空部隊が陸上に基地を持つてをつたといふことによるところが少くないであらう。

しかし、航空母艦は偉大なる移動性を持ち、これによつてその航空機を無事に護ることが出来る

のである。陸上基地を持つ航空隊は、成程不沈には相違ないが、移動性が零である結果、一度敵の襲撃を受けた場合、その航空機を護る方法がない。こゝに、不沈航空母艦の長所と短所とが同時に存在する次第であつて、米國としてもこの點は痛し痒しと言はざるを得ない。太平洋に散在する數千の島嶼は、やがて彼等の沈まざる航空母艦となるかも知れない。

しかし、これを眞に完全なるものたらしめるには、この數千の島嶼をして何十ノットかの速力を與へることが必要であらう。

アメリカの有名なアレキサンダー・セバスキーの論評によれば、基地航空機の威力は艦載機に勝ること數等であつて、航続力の問題さへ解決すれば、航空母艦はむしろ不要なものであるといふ結論であつて、大航続力を備へた爆撃機の完成までの過渡期的なものであらうといふ意見である。

又一方、陸上基地用の大爆撃機は随一の攻撃兵器として、戦艦航空母兩者に代る運命にあるとなし、最近の海戦に於ける航空母艦の撃沈率よりして大空母の脆弱性は一時的にもせよ重装甲戦艦が海洋の王者としての地位を再び獲得する可能性を増大しつゝあることを指摘してゐる軍事記者もある。つまりこの議論は空母が戦艦群にその地位を譲る可能性ありといふのであるが、この論旨の中には近い將來空母は防禦力を強大にして主力艦に接近し、戦艦は航空機搭載数を次第に増加して空

母と戦艦の中間の艦種が出現すべきであることを示唆するもの様である。

何れにせよ、海戦に於ける基地網の與る力が決定的であることは豫想し得るところであり、基地争奪戦が海戦と密接不離の關係を有するものであることは當然考へ得るところである。

従つて基地を有しないか、遠距離にのみ之を求め得るものは、益々大航続力を具備した攻撃機によつてその缺點を補ふより外はなく、強力な母艦群と、利用し得べき基地網を戰場近く多數に有する側が、海戦に於ける優位を獲得する公算は當然増大するであらう。

従つて戦略要點の確保と、作戦基地網の進出が絶対必要條件となる上に、有力な航空兵力を併有しなければならぬこととなる。有利な戦略態勢の機能を生かすに發揮して敵の反撃を撃碎するため、生産陣が一層強化されねばならぬ理由は茲にある。

海戦方式が將來如何に變化するとしても、勝利が攻撃によつてのみ獲られるといふ原則には變りはないところである。戦闘には免れることのできない被害は當然起るものである。

航空戦を主體とする今後の海戦に於て、彼我の損害が甚大であることは、ソロモン海戦に於て明白である。この意味に於て、ソロモン海戦は立體的近代海戦の典型的なものと云つても差支へないであらう。

今後の海戦の様相が、彼我損害を省みない血戦の連続であることは、豫期せねばならない。開戦後の戦果を想起すれば、海戦は唯ふか喰はれるかの深刻な相貌を呈して行くであらう。

沈黙の祈禱日

日米開戦記念日を迎へて、アメリカ政府は十二月八日の當日を沈黙の祈禱日と定め、全國朝野に、この一ケ年における連続的大敗戦に對する深き反省と自己檢討を要請すると共に、更に一月一日を戦捷默禱日と定め、全國民に一層の戦争の自覺と颯起を促すこととなつた。アメリカ政府がとくに、元旦を期し戦捷なる標語によつて強き飛躍の一線を劃さんとしつゝあることは、戦争第二年に處するその決意と作戦が如何なる方向にあるかを示唆するものとして注目されてゐる。

すなはち、アメリカの國內戰時體制は開戦一ケ年後の今日、漸くその基礎工事を經たばかりで、これが強化擴充になほ幾多の困難な過程が豫想され、ルーズヴェルト政權としては、この幾多の困難を克服するためには、是が非でも、從來の守勢的地位より攻勢的態度に一變して、國民の志氣昂揚に資する必要があるのであつて、西南太平洋における必死の作戦の對内的意義と根據は實にこゝ

にあり、北阿侵入作戦の如きもヨーロッパ大陸に對する第二戰線結成不可能に對する窮餘の糊塗手段にほかならない。ルーズヴェルトとしては、戦争第二年を迎へると共に、この態勢を一層全面化し、この努力を強化しなければならぬ羽目にあるからである。

西南太平洋で、アメリカが今夏以來、攻勢的立場を確保せんと全力を傾注し來つたのは、次の如き事情に基くものであり、これによつて何故アメリカ政府がその失敗を國民にひた隠しにせねばならないかゞ解るであらう。

すなはち開戦前に、米朝野の間に廣く論じられた對日作戦は長期ゲリラ戦であり、戦争が長期に互れば互るほど、自國に有利と信じられて來た。

開戦當初におけるアメリカ政府、軍部の方針も明かにさうであつた。然るに、日本軍の意外な進撃速度と資源獲得とにより、日本は十分長期戦に備へ得る經濟力を有するに至つたこと、特にグルー大使の歸國以來、日本國民の長期戰體制完備の事實が公にされたことなどから、長期戦は却つて日本を利するとの議論が有力に行はれ始め、開戦直後からアメリカ軍事専門家の一部に行はれてゐた攻勢論に拍車を掛ける一方、濠洲、アリユージャンを脅かされ、アメリカ本土の危機を感じるに至つては長期消耗戦による消極的戦法から積極的戦法に移らざるを得なかつた。

次々の敗戦にも拘らず必死の攻勢に出たのは、實にこのためであり、同時にかかる軍事的、政治的理由に基く作戦の失敗を能ふ限り隠蔽せんとしたのも、また無理からぬことといへよう。それにもかゝらず、敗戦の真相が漸次知れわたるに従つて、言論機關は痛烈に政府を攻撃し米側の實際損失に就いて重大な疑問を投げかけるに至つた。

大統領ルーズヴェルトはワシントンの官邸の一角から、

『戦争第一年目は歐洲においても太平洋においても米國にとつて悲劇の連続であつた。しかし、去る八月七日ガダルカナル島に敢行された米軍隊の上陸と、爾來引續き行はれてゐる世界戦史未曾有のソロモン大海戦と、歐洲の戦場に展開された北阿における新戦線の結成との二つによつて、戦争第二年目こそ聯合國が守勢より攻勢に轉ずる年となつたのだ。國民は過度の樂觀論を排し、また、不必要の悲觀論に捉はれず、聯合國の崇高なる戦争目的に向つて團結せよ。前途に横たはる血と汗の困苦を克服して、最後の勝利に邁進せよ』

と、國民に必死に呼びかけてゐる『祖國のため滅私奉公一億一心』といふが如き考へ方は米人には到底持ち得ないが、しかし、個人主義から出發した現實的な考へ方の一致、その凝結による米人特有の向ふ見ずの戦闘精神は、戦争第一年における敗戦の苦杯に刺戟されて徐々にではあるが、次

第に昂揚してくるものと見ておく必要がある。

これが『守勢より攻勢へ』といふ戦争第二年目に對して米國の指導者と國民が期せずして一轉してゐる國民的標語となつてゐるのである。

さらに、ルーズヴェルトはつけ加へて、

『自分たちは、自分さへよければよいと云ふ思想で生きて來た。自分さへよければよいと云ふ思想でやつて來たのが誤つてゐる。そこで國が敗けるのだ。日本のために我々は敗けつゝある。遂には日本のために滅ぼされるかも知れない、さうなると自分たちの自由もなくなるし、享樂もなくなる。アメリカ國民はその事情をよく考へて日本に敗けないやうにしなければならぬ、日本に打ち勝つのだ。日本を世界の地圖から削り取つてしまふのだ。日本民族も亦一人残らずやつつけてしまふのだ。これが、眞の戦争の目的である』

このやうなことを大統領が叫んだのである。わが日本が八紘一字を理想として、或は大東亞新秩序の建設をめざして戦つてゐるこの際、敵は日本を亡ぼし、一人の日本人も居らないやうにするのが戦争の目的だと叫んだのである。これが最近に於けるアメリカの日本に對する戦争の目標である。そしてそのためには自分たちはどうすればよいかと云ふことをアメリカ人は考へた。それは今

迄の生活を改め、自分だけよければよいと云ふ生活態度を捨て、先づ第一に國が戦争に勝つことだ、戦争に勝ち抜けば、しばらく我慢したところの自由も享樂も今度は永遠に戻つて來るであらう、かういふやうに動機は自己的であるが、戦争に勝つと云ふ行き方をしてゐるのである。我々はこの點を注意しなければならない。敵はすべてを犠牲として日本に勝つ、日本を亡ぼすと云ふことを目標に定めて居るのである。

そして、對日再檢討論、再認識論といふものが盛んになつた。これは何もグルー駐日大使が歸國してああいふ演説をしてから擡頭して來たかといふとさうではなく、慘敗連続と共に叫ばれるやうになつた。この點は日本としてもよく考へるべきである。

その例として擧げるなら、以前ジャパン・アドヴァタイザーの主筆をしてゐたジョン・ブラウンといふ男などは、永いこと日本にゐた経験から、比較的正しい對日認識をもつてゐたやうである。彼は長論文を新聞に載せてゐるが、その中にかういふことを云つてゐる。

『日本の交戦力は物質的に見て相當弱つてゐるとよく云はれてゐるが、實際はさうではない。たとへば、肩鐵にしても今日なほ持つてゐるから鐵の資材だけでも優に交戦に堪へる力をもつてゐる。石油にしても蘭印の方を手に入れなくとも、三年や五年の戦争に堪へて行くだけの實力をもつてゐる。』

その他鐵、石炭にしても無盡藏だ……といふやうなことを五回くらゐ續けて書いたことがある。もう一つ例を擧げるなら、これはアメリカで最も讀まれてゐる「ライフ」といふ大衆雜誌の論調である。

この雜誌は元來反日的な雜誌であつて、日米戦前から盛んに日本の悪口を叩いてゐた。たとへば、『日本は支那事變の結果相當弱つてゐるから、撃つなら今だ。今撃つなら必ず日本は參つてしまふ……』といふやうなことをしきりに書きたててゐたのだが、それが十二月廿日ごろから全く手の裏を返すが如く『日本強し』の宣傳をはじめた。それも書くだけでなく、日本の工場地帯の寫眞などをでかかど掲げ

『今日の日本の生産組織はかくも戦時體制に移つてゐる。非常な生産能率を上げてゐる。鐵の如きもその生産能力は〇〇萬トンだ』と書いてゐる。また食糧問題についても、『日本を經濟封鎖して困らせるといつても、日本の食糧は自給自足の態勢の域に達してゐるからこれは不可能だ。』と云ふやうになつた。

濠洲がなしたシドニー強襲の四勇士に對する鄭重な扱ひも、イギリス海軍士官の騎士道的精神が現はれてゐるといふやうに見えるが、一つは彼らが日本に、物質では負けないと考へてゐるが、精

前力では絶対に日本が強いと考へてゐる。その精神力を養成することにどうしても手が出ないで、四勇士の行ひに打たれて、その打たれた気持ちを誇張して、なるべく鄭重に扱つて、かくの如く命を捨て、國に盡す気持ちがあれば、一人の人間がこれだけのことが出来るのだといふことを宣傳して、『濠洲青年よ立て』といふ精神力の昂揚に持つて行つたわけである。その點は明瞭に見てとれると思ふ。

敵潜水艦のゲリラ戦

ウイリアム・ウインターの言葉をかりるまでもないが、彼は、『ソロモン海戦でアメリカが負けたら、こゝ數箇月は日本海軍との間に堂々の陣を張つた戦争は出来ないだらう』といつてゐる。それをそのまゝにとつてみると、こゝ數箇月とは何箇月か判らない、數十箇月かも判らない、二年間を指してゐるかも知れない、その間、アメリカは堂々の陣を張れない、このことはゲリラ戦なら出来るといふことを意味するものである。

空襲と潜水艦によるゲリラ戦——それをその間はやるぞといふことである。空襲を豫期するのは當り前だと思ふ。そんなものはないと思ふよりあると思つた方がよい。ゲリラ戦は彼等が今日直ちに行ひ得るところの一つの戦法である。航空母艦の一部が空中ゲリラ戦に利用されないと斷ずる必要はない、艦隊戦闘にも使はれるだらうが、これらのゲリラ戦にもやつて来るであらう。

やがて、その航空機が航続距離を非常に増大した時は、この航空母艦なしでも直接、アメリカか

らやつて来るかも知れない。また日本に近接した根據地も一つや二つではない。

戦争は勝つためにあらゆるものを利用する。どれを利用して来るかは、われわれの想像の外にある。

しかし、可能であることは總て可能として、一應われわれは心構へをすべきである。

彼等の空襲は日本國民の家を焼き、軍需工場を焼くことがあつてもなら驚くに足りない。また、アメリカが特に今まで研究を進めてゐた航空機に成層圏飛行機がある。すでに實驗所から出たといふ情報さへある。これは、太平洋を越えて日本を襲撃後、また再び太平洋を越えることの出来る飛行機である。

これらのゲリラ戦のほか、水のゲリラ戦がある、アメリカはすでに、わが發表によつても一八隻の潜水艦を撃沈されてゐるけれども、多数の潜水艦をまた建造中であることも明瞭である。これらの目的とするものが水中ゲリラ戦であることは、われわれの心構へを必要とするものである。彼等がやがて軍需資材を沈めるといふことがあつても、なんら不思議ではない。

こゝに空も水も、兩ゲリラ戦ともに生産戦と、思想戦にその狙ひがあることは、自明の理である。しかし、ゲリラ戦はあくまでもゲリラ戦であつて、武力戦の方向を變へしめるものではない。

國民の心構へにして動搖することがなければ、ゲリラ戦は單なるいたづらに過ぎない。こゝに必要なつて来るのが國民の心構へである。

「ゲリラ戦」といふと國民は軽く考へる傾きがあるが、今や明かに敵潜水艦が全力をあげて當つてゐるのは、わが船舶の撃沈戦、すなはち通商破壊戦である。想像するにアメリカは全潜水艦を擧げて太平洋に放つてゐる。潜水艦の航続日数は各國とも秘密にしてゐるが、アメリカ潜水艦は平均二箇月半といはれる。

現有潜水艦百二十隻として、その一部づつ交替で出撃すると假定しても、常時三十隻ないし四十隻は太平洋のわが海上交通線を狙つて出て來てゐる譯である。さらに、イギリスの潜水艦も大東亞海、印度洋方面の水域を擔當して出てきてゐるだらう。

アメリカがなぜ、こんなに潜水艦戦に全力を注いでゐるかといふと、ルーズヴェルトのいはゆる「總反攻」すなはち膨大な建艦と空軍建設の實現した暁、その全力を一丸として我が國にぶつけ、これまでの敗戦を一旦に挽回しやうといふ——その「總反攻」の準備期間をこれによつて得ようとしてゐるのがその一、これによつてわが國の大東亞建設と戦力の擴充を妨害しやうとするのがその二、すなはちアメリカはかう考へてゐるのである。

なるほど、これ迄は戦争に負けた、重要な南方の軍事據點と、資源が日本の手に收められたが、南方資源を開發してこれを國力、戦力培養に十分活用しなければ、まだ、日本は勝つたといひ得ない。

それまでは依然として日本は戦前同様の「持たざる國」である。そこで、前世界大戦の對獨戦をみると、イギリスの勝利はいま一步といふところでイギリスの對獨海上封鎖が、獨の逆封鎖を破つたといふ點に由來する。獨軍隊と國民がもう一息の「忍耐力の戦ひ」となつた時に、イギリス潜水艦の通商破壊戦による各種の窮乏に屈し、内部が崩壊したといふ點に原因があつた。

だから、日本が「持たざる國」であるあひだに、このイギリスの流儀で、徹底的な通商破壊戦、海上封鎖戦をやつて、南方占領地と本國との連絡を遮断しさえすれば、日本は遂に、戦力を増強して「總反攻」に立ち向ふといふやうなことは望めない——といふのが、アメリカの考へ方である。いかにも「物」だけに重點を置く米國流の唯物的な考へ方である。

これに對するわが方の戦ひは、眞に「喰ふか喰はれるか」の凄絶な戦ひだ。出てきた敵潜水艦を片つ端から叩き潰すと同時に敵の船舶をも撃沈する。

大本營發表の「敵潜水艦二十一隻撃沈」といふのを見ると、だいたいアメリカの一期間の潜艦出動

量の大部分をわが方は撃沈してゐると見てよからう。

中にはわが潜水艦が敵大型潜水艦一隻を沈めてゐるといふやうな例もある。即ち、出てくるのを待つて沈めるのみか、出てくるところへ待ち伏せをしてやつけるといふ積極果敢なやり方もしてゐるのである。

一方、敵の船舶に對しても猛攻をゆるめず、四十四隻二十五萬二千四百トンを三箇月に沈めてゐる。この中には印度洋に出てきた敵貨物船十隻、七萬四千トンが混つてゐる。すなはちわが方は、たゞに、敵潜水艦の通商破壊戦に對抗するだけでなく、進んで敵の通商船そのものにも痛撃を與へることを忘れてゐない。この間わが潜水艦二隻の損失は、印度洋から北米海岸に至るまでの廣大な水域でわが潜水艦がやつてゐる戦ひが、いかに「喰ふか喰はれるか」の凄絶なものであるかを語つてゐる。

ところが、潜水艦のかういふ戦ひといふものが、海上決戦と異つて至極地味なため、目だたないものではあるが、實に苦しい、困難なものであることは今更云ふまでもあるまい。

ところが國民はそのめだたないのと地味なことで、何だ、大したことはないといふ風に考へるとすればこれは重大な誤りである。通商破壊戦を「喰ふか喰はれるか」の戦ひだとすれば、かういふ

誤つた考へ方こそ最も恐るべきものである。

例へば、戦果の發表が暫らく無かつた。ところが、敵潜水艦によるわが船舶の被害についてのデマを小耳に挟む、そしていろいろ不平をいふ。

かういふ気分がもし有るとすれば、それだけで敵の通商破壊戦の一斑の目的はすでに達せられたといつてよい位で、前大戦のドイツの敗因を顧みれば、こゝから生れる國民の精神的崩壊は恐るべきものと云ふべく、折角わが海軍部隊、殊に潜水艦が活躍しても何の役にも立たぬことになる。

かういふデマに躍つてゐたものがあつたとすれば、大いに自戒すべきである。通商破壊戦といふものは消耗戦だから被害があるのは當然で、わが國の被害は少なすぎる位のものである。消耗戦である以上、消耗損失を補ふ生産の努力といふものは、これを追ひ越して進まねばならぬのである。損害がなくともわが國が大東亞を建設し、戦力を培養擴充してゆくためには、船舶の建造はどんなに馬力をかけてもかけ過ぎるといふ事はない。

敵の考へる通り、通商線こそは今日までのわが戦争を生かす大動脈であり、これを左右するものは船舶である。「一にも船、二にも船」と云へやう。わが國が船舶消耗戦に對應して優秀な造船能力に最大限の力を發揮し、造船關係者が死力を揮つてゐるのはこのためであり、國民は深くこれを

銘記し、感謝せねばならぬ。

次に、かういふ大通商破壊戦の戦場裡に、武装なき船舶を動かして挺身し「動脈」確保に當つてゐる、帝國海員の血の出るやうな勞苦がある。彼らの苦勞といふものは、船長以下一水夫に至るまで平時の何倍かになつてゐる。のみならず敵潜水艦の出没する海面を、或は夜間無燈火航行、あるひは晝間ジグザクコースで走らせ、つねに監視を怠らず、もし敵潜水艦に出遭へば船もろともこれに叩きつけるといふ意氣込みで航行してゐる。その辛勞はとても陸の者には想像もつかない。

現にわが方の損害船舶の乗組船員の何名かは敵の犠牲となつた。しかも、なほ敢然として、わが海員はその任務を果すべく、かういふ瞬間も太平洋のそこかしこに黙々致々として立ち働いてゐるのである。

物が無い、生活が不自由だ、不自由なのは船が物を運んでくれぬからだ、——假りにもさういふ考へ方をする者は眼を瞑つて、この國民の一人、同じ非戦闘員たる海員の姿を思ひ浮べてみるがよい。肅然として襟を正さざるを得ぬであらう。

日本本土を狙ふ

アメリカは日本本土空襲をも計畫してゐることは云ふまでもない。空爆は必らず來るものと國民全部が覺悟して用意を怠つてはならぬ。

われわれは、從來の經驗上から足りないところは補つて、氣持の上からも、また設備の上からも、いつでも鐵壁の防空陣といふものを固めねばならぬ。

前にも述べたやうに、アメリカは日本空軍の驚異的戰果を見て、沈まざる航空母艦を作れといふことになつて來た。沈まざる航空母艦とは即ち陸上基地である。

そこで、アリユージャン、ハワイ、フィジー、サモア、ソロモン等太平洋上の總ての島嶼に晝夜兼行で陸上基地を作つてゐる。ところが陸上基地といふのは、沈まざる航母であるが動かざる空母でもある。そこで動くと同様の威力を發揮せしむるためには、これに配するに航続力の大なる飛行機をもつてせねばならぬ。今の爆撃機の性能から云ふと、多く爆弾を積んで航続距離は四千キロ内

外だと思ふが、アリユージャン東京間往復で八千八百キロはある。ミッドウエーからは往復で八千キロ、支那からならば三千五百キロくらゐである。

さうなると現在の航空機をもつては支那大陸を除いたほかからは、日本の心臓部である本土の真中を空襲することは出来ないことになる。これを可能ならしめるのは結局、陸上基地より日本の心臓部を爆撃し得るだけの航続力のある飛行機を建造しようといふ風に思想が變つて來て居る。

情報によれば濠洲のプリズベーンから一萬二千キロ離れたサンフランシスコまで無着陸無着水で飛んだといはれて居る。このやうな飛行機があらはれたならば、これはミッドウエー、アリユージャンからも本土は空襲出來るといふことになる。そのほか航続力をふやすためには、ガソリンの問題がある。米國では高級ガソリンの研究がはじめられ、今までの二割五分の量で、能力が十五割出るといふ高級燃料の發明に成功したといつて居る。さうすれば今までは、四ガロンのガソリンを使つて十キロ飛んだとすれば、今度は一ガロンのガソリンで十五キロ飛べるといふ勘定になる。さうすれば同じガソリンの搭載量で六倍も遠くまで飛べる譯で、さういふ飛行機の研究も行はれて居る。

それから成層圏飛行であるが、成層圏といふのは場所によつて大分ちがつて、赤道附近では一萬

六千キロ、北極に近くなれば八、九千が成層圏である。

ここは音が聞えない。地上からの探照燈の光芒が達しない。空気が抵抗が少いから結論として速度は三割方航続距離は五割方増加することが出来る——といふので成層圏飛行といふものが盛んに研究されて居る。さうすれば米國本土から日本まで十時間で來られることになるといふのである。

そのやうな飛行機でなくとも、太平洋方面においては、陸上基地として、ハワイ、ミッドウエーが依然として残つて居るし、南太平洋地域においては南太平洋海戦以後その制海制空權把握計畫に大なる齟齬を來したけれども、依然として濠洲、あるひはソロモン群島附近にその基地を推進して居る、また西方においてはインド各地、あるひは重慶政權下の支那大陸各地、これは着々として飛行場を整備せられつつある。

かういふことを考へると、先づ一通り日本は東京から五千キロの圏内に敵の空襲基地が存在してゐるといふことがいへる譯である。さうすると此基地から現代の長距離重爆撃機が飛びたつたられば日本各地が完全にその空襲圏内に入つてゐるといふことは、地圖を見ればすぐ判ることである。

四月十八日には、ああいふ風な各機分散をして侵入をしたが、これをもつて空襲の全部とは考へられぬ。陸上基地から堂々翼を運んでやつて來るとするならば、數百機或は數千機に達する飛行機

が、あらゆる高度、あらゆる方向から日本本土を狙つてやつて來ないともいへない。これに併せて、航空母艦のゲリラ的近海進出による空襲を考へるとき、あらゆる形態で、あらゆる方法をとつて、日本國土空襲といふものが行はれないとは限らない。

それに對しては國民は、萬全の備へは出來てゐるはずであるけれども、油斷から、もしも手拔かりでもあるといふことがあつたならば、甚だ第一線の勇戦奮闘をしてゐる皇軍將兵に對しても、銃後は何の顔向けが出来るだらうかといふことになるわけである。現に決戦にかけて執拗なる反撃を繰返してゐるソロモン海域の戦鬪、アリューシヤンのわが基地奪回に數十回の交戦、支那大陸を舞臺とするアメリカ空軍の奮動等、一聯の敵反攻の企圖は、明らかに我不敗の態勢破砕を目指す熾烈なる攻撃である。アメリカの對日反攻の野望は、

一、アラスカ公路の強化によるアリューシヤンの航空基地の強化竝に、その基地推進による日本本土の空襲

二、ハワイ、ミッドウエーの空軍基地の強化による海正面よりの對日空襲

三、濠洲を基地としたその前進據點をソロモン水域、ニューギニア周邊に求めたわが占領地に對する奪回策

四、印度を兵站基地とするビルマ奪回策と印度の完全防衛

五、支那大陸を基地とする米空軍の對日空襲、以上五者の遂行によりわが防衛外線の切崩し、否、東亞保全の核心たる日本本土の空襲に狂奔してゐるのである。

わけて、空襲によるゲリラ戦が國民の恐怖感、厭戦思想の醸成、生産力の破碎による戦力の低下に手近な戦法として特にこれを強調してゐるのである。上院議員ハロルド・バートンは

「日本に對して勝利を得る爲には是が非でも東京を叩かねばならぬ」と述べて、日本空襲強行を煽動し、又米誌「ライフ」は、

「アラスカは對日攻撃の基地として最適の條件を有してゐる、即ち新鋭爆撃機によれば東京はフェアバンクスから僅か十五時間の飛行圏内に位置してゐるに過ぎぬ、フェアバンクスからは紐育も眞珠灣も殆んど東京迄と同一距離にある」と、東京空襲の可能性を力説してゐる。一方、支那大陸をみるとアフリカ、印度を經由して輸送された米空軍が地上整備隊をも伴つて、支那奥地の四川、廣西をはじめ、江西、湖南、福建に迄基地を推進して虎視眈眈日本本土を狙つてゐる。

かくの如く日本本土防衛の比重は、第一線の接敵地区と同様と化し、わが忠勇なる皇軍將士は、日夜を分たず基地粉碎による敵野望の挫折を、宵戒による本土防空に盡力しつゝ、鐵壁の陣を布いて

ゐるが、國民は明日といはず今日この一瞬より空襲に對して斷乎一段の備へを強化せねばならぬ。

かの制空權絕對掌握のドイツに於てすら、一ケ年に於て六十餘回の空襲を受けてゐるのである。

而も、空襲警報の發令される以前に於て空爆が敢行されたる例は、今次歐洲大戰幾多の實例に見るところである。東京を始め海岸に位置する都市は、この點甚だ不利な條件に置かれて居る。國民は我等警戒警報、空襲警報發令のみに依存せず、平常時に於て、即ち日常生活の中に防空の思想を直ちに實踐に取入れねばならぬ。私は防空に關しては何よりも大きなことは思想戦だと思つてゐる。

日本の國民の住まふ家がなくなつたとか、あるひは食物を貯へてゐるところが焼けてしまつたといふことになる、これは明瞭に思想戦に移つて來る。國民をがっかりさせる、戦争といふものを嫌なものだといふ感じを起させる、そして平和さへ取り返へせばよい、早く平和になるやうに戦争をやめようといふ思想を起させるやうにやつて來る。

かういふ思想戦が主なる目標だと思ふ。ものが焼かれることを防ぐことが最も大事である。空襲を受けた時に隣組だけで一步も火を外へ出さないといふふうにしてしまへば損害が少なくてすむ。これをやつてゆくほかに、心組として相當の悲哀があつても動搖しないといふ、さういふしつかりした心組を作つておくことがむしろ大事ぢやないかと思ふ。

四、必殺撃滅の海軍魂

捨身と精根でつくる可能

大東亞戦争の戦線は廣大であり、その作戦は雄渾である。

北は酷寒のアリユーションから、南は灼熱の戦線にわたり、わが海軍將兵は、眞に寢食を忘れ、あらゆる苦難と闘ひ乍ら、敵撃滅の戦を進めて居るのであるが、さらに敵兵站線の破壊、味方交通路の保護等に活躍する潜水艦並に第一線の將兵に對する補給、或は生産の爲めの輸送等に敵潜水艦の危険を冒して、活躍しつづつある商船を忘れてはならぬ。商船は實に第一線の軍艦と、殆んど同等と認むべきである。

商船及びその乗員の犠牲に對しては、こゝに、名譽の戦死者同様の敬弔を捧ぐるものである。

その他、地味にして、しかも困難なる哨戒の任務につく部隊等もあるが、部署は、それぞれ異つては居ても、脈々として、一貫するものは、唯々盡忠報國の一念である。

戦争に當つては、軍人は不可能なことを、捨身と、精魂を盡すことによつて可能ならしめてゐる。それを一般に及ぼして行けば、生産方面であらうと、消費の切下げであらうと、或ひは普通の生活であらうと、一見不可能に思へるやうなことで、捨身で當れば、さうして自分の精魂を盡せば、それが可能になる場合は多いのである。

大正三年の初め、東郷元帥がいはれた言葉がある。

「國民諸君は、いまわが海軍の航空隊を指して、質において量において誠に貧弱だといつてゐる。なるほど、現在は貧弱である。しかし、自分が考へるには、潜水艦と飛行機ほど日本人に適した武器はないと思ふ。潜水艦のことはいましばらく措くとして、飛行機についていふならば、今後不斷に猛訓練をやつて行けば、世界無敵の空軍を産出することも決して難事ではないと思はれる。それに、風のない天氣のいい時ばかり訓練をやるといふやうな甘いことでは駄目だ。暴風雨や、霧の深い時など、殊さらに訓練を勵まなければならない。尤も、さうすれば犠牲を出すことは覺悟しなければならぬ。しかし、皇國將來のことを考へると、これは忍ぶべきであると思ふ。自分はこの間大

臣（八代六郎大將）と次官（鈴木貫太郎中將、現在大將）に會つて、差當り〇臺の飛行機を大急ぎで作つて、それで悪天候の時うんと練習させるべきだと話したら、大臣も非常に同意してをられた。見ておいでなさい。今にこつちのいふことが實現するに相違ない」

その後、昭和元年になると、加藤大將が聯合艦隊司令長官とられたが、その訓練の猛烈さは非常なものであつた。

尤も皇國海軍の猛訓練は決して、昨今に始まつたことではない。これを廣い意味からいふと神代以來の傳統的精神と思ふのである。殊に、神武天皇が御東征の際、御舟師即ち海軍を御整備に當つて、しかも三年間も猛訓練をお続け遊ばされ、そして、御東征遊ばされた。これは實に猛訓練について後世にお垂れ遊ばされた御教訓であると思ふ。

それから後、倭寇の時代といひ、また近くは皇國海軍の出來上つたその初めにおいて、例の宮古港における鋼鐵艦の乗取り争ひの際の激戦など、決して外國人にはできない猛烈さであつた。

しかし、この傳統的精神も東郷元帥の教訓と、加藤大將の服膺とによつて一段と光彩を放つことになつたのである。

東郷元帥が征露の途にのぼつたその初めにおいて、ある人のために揮毫されたとき「一功は萬難

果の」と書かれた。

實に、これは名言である。

その一つの例としては今度のめざましい海軍航空部隊の働きの陰に、これまでの技術を磨くための訓練のために犠牲となつた英靈のみを數へても、霞ヶ浦神社に多數祀られてゐる。

かうした犠牲になつた人々の英靈が將兵の魂と結びついて、今度の戦争で大活躍を示したといひ得るので、これが元帥のいはれる「一功は萬難の果」なのである。

また、東郷元帥が聯合艦隊に調派された中に、

「戦争が耐になると非常に悲惨な状況が自分の眼前に映するものだ、しかし、その場合には敵も同じやうな苦しみをしてゐるんだ、と、かう觀ぜよ」と、いはれた。

これを、昔の武士道では七分三分の兼合ひといつてゐる。それと同じことをいはれた。これは最後の五分間の教へであるが、最初の五分間も非常に大切だ、スタートをしつかりやれ、しかし、勝敗は最後の五分間で決まるものだぞといふ教へである。

没我の精神

ソロモン海戦に参加した海軍報道班員の作家丹羽君はかう云つてゐる。

「私は、それこそ娑婆の臭ひをフンダンに持つて艦に乗り組み、いきなりソロモン海戦にぶつかつたわけですが、見るもの接するもの、感動するより先に、驚いてしまつた。呆れてしまつたんです。人間の精神といふものは、訓練次第でかうも違つてくるものか——と。あの自己放棄と言ふか、没我と言ふか——私が負傷して、艦尾の治療室に行つてみると、その横の少し廣い所に、幅一尺ぐらゐの臺が並んでゐて、それに重傷者が寝てゐるんです。當然さういふ所では、呻き聲とか身悶へとか、肉體的な苦痛の表現があるはずです。ところが、呻いたりなんかしてゐる者はないんですよ。戦友が枕許にまつて、手帳なんかで靜かに顔を扇いでやつて居んですが、もの言はなければ身動きもしない。靜かな顔をして寝てゐるんです。軍醫が手を持ち上げたり何かすると、ヂツとされるまゝになつてゐる。眠つてはゐないんです。眼はパツチリ開けてゐる。その眼を見ても、き

れいで靜かな色をしてゐるんですよ。少しも苦痛の色がない。その向ふに戦死者が同じやうな姿勢で安置してあるんですが、こちらから見ると見分けがつかないんです。

戦死者の顔がまた立派です。何事もなかつたやうな靜かな顔ですよ。そこへ三名ぐらゐの輕傷者が來たのですが、その人達が重傷者や戦死者を眺めてゐる顔が、また實に穩かんですよ。ありとあらゆる個人の苦痛、個人の感情が、全然抑へられてゐるんですね。それも一人々々が耐へてゐるといふより、全體が寄つてたかつて抑へてゐるといふ感じなんです。完全に自己を放棄して、全體に歸一してゐる。僕は、海軍魂といふものにはたくさん要素があるだらうが、一つの重要な要素はこゝにあると思つたんです。」と語つてゐる。

確かに、その通りである。それは、兵學校の生活から躰けられてゐるのである。例へば、雨着が濡れてゐる。天氣がよくなると、

『雨着干せ。』といふ號令がかかる。

みんなバツと飛んで行くが、若い生徒ほど先に行く。そして手近にある雨着を、誰のでも構はない、持つてだけ持つて干しに行く。ほんとにヨタ／＼するほど一ぱい持つ。その中に自分のがあるかないか、それは別問題だ。とにかく、全部を速く干さなければいかん、それだけの考へである。

持ちきれないのが少しばかり残る、それを上級生が拾つて行く。しまふ場合も同じことだ。共同といへば共同だが、たゞ違ふのは、なるべく自分が多くやらうとすることである。ここが、娑婆の生活とはちよつと違ふのである。

それからもう一つこんな嫉がある。

上級生が下級生を集めて、今日はこんな出来事があつた——と言ひ出す。どうせ碌なことぢやないに決つてゐる。そして、

『誰かお前達の中に、その場をつた奴はないか、それに該当する奴はどこそこに集まれ。』とやる。

そんなときに、果して自分がその中をつたかどうか覚えてゐない場合がある。さういふことは實際よくあるものだ。

ところが、判らん場合は悪い方に行け——といふのが不文律になつてゐるのである。行けば殴られるに決つてゐる。それでも、ちやんと行つて、殴られて来る。

『どつちか判らん場合に、自分を有利に解釋しちやいかん。』と、いふのである。

それが海軍軍人の道徳の根本である。ところが實際は、なかなか難しいことである。

海軍の兵達は口数が少い。必要以外のことはもちろん言はない。必要なことでも、できるだけ少い言葉で表現する、餘計な言葉がない。これも訓練である。

口数の少いのは、實行すれば間に合ふからだ、必要な命令を受けて、それが解つたといふことだけを、上官に答へればいゝんだ。後は實行すればいゝ。それで、海軍では言ひ譯といふことを一切許さない。これをやれと言はれたら、即時實行しなければいけない。だから、兵隊でも士官でも、言ひ譯といふことを知らない。兵學校からそのやうに訓練されてゐる。

言ひ譯しないから、自然に言葉が少くなる。言ひ譯すると、それをまた反駁しなければならぬ。そんな状態で、またそんな精神で、戦争はできない。世の中の大抵のことは言ひ譯しようと思へば、できないことはないものだ。言ひ譯の種は何かしらあるものだ。いかにも尤もさうな場合もある。しかし、その事實を滅却して、黙つてこれを實行するといふところに初めて強さがあるのである。

それが結局後我である。

海軍の猛訓練

帝國海軍は戦場でも、猛訓練を行ふ。司令長官にしても司令官、或は艦長にしても幹部が、一週間の連続作業などいつて海上に出て作業をやる、その間は風呂にも入らず軍服も脱がずにやるのだから、相当難儀といへば難儀である。今日は戦時だから無論の事だが、平時の訓練でも恐らく海上に出て艦隊が働いてゐるのに、長官はじめ幹部が軍服を脱ぐといふやうなことは、誰もがやらなゝことである。昭和年代になつてからは特に燃料をもつとも経済的に使ふといふことを強調された、燃料を経済的に使ふといふことは、仕事を纏めてやらなければならぬことになる。一定の燃料をもつてたくさんな仕事をやるといふことになる、航海中は全然遊ばぬといふことになるから、二週間なり三週間なり港を出て港に歸るまではノベテラ訓練をしてゐるわけである。その訓練も、同時に二つも三つもやるといふ訓練である。だから自然、指揮官はじめ寧日なしといふ状況である。何十回、何百回となく同じことをやる、それが訓練である。どんな單調なことでも、それが自分

の務めであるといふ信念でもつて、毎日々々繰返してゐると、つひには少しも苦痛でなくなるものである。

例へば、海軍の潜水艦乗りは空氣が足りない。日光も足りない、新鮮な食べ物も不足、水も不足さういふ生活を毎日繰返してゐる。ずいぶん苦痛だらうと誰しも思ふのであるが、いつか或る會合で私はそのことを言つた。すると、ずつと潜水艦乗りで中佐になつた人がゐて、

『それは違ふ、そんなことは、私どもは苦痛だとは思つてゐない』と、答へる。それで私は、

『空氣が足りなくなつて、終ひには抽斗なんぞ開けて、こゝにいゝ空氣があるぞと云つて吸ふさうぢやあないか』と、言つた。

『それは苦痛に對する慰めでなく、喜びだ』と、答へる。

空氣が汚れてゐるといふことは彼らにとつて當り前で、どこかにいゝ空氣を見つけたらそれは望外の喜びなのである。

『それぢや、君らに苦痛はないのか』と言ふと、

『何日も何日も潜航して敵が見つからぬといふことが非常な苦痛だ。それ以外は何ともない』と、言つてゐた。

苦痛と思はれることも、訓練によつて苦痛でなくなつてしまふ。それが海軍魂である。

また、私の友達の潜水艇乗りなんかは、この戦争が始まつた頃、〇〇日目で日本に歸つて來たのであるが、何ともいへない眞黒な顔になつてゐる。

『洗つてみる』と、云つて水をたつぷりやつて石鹼を出してやつた。

ところが、洗つた顔を見ると眞蒼である。〇〇日も日に當つてゐないんだから當然である。一日中水の中に潜つたきり、夜になるとちよつと出る。そのとき堪りかねて一日中我慢してをつた煙草をソツと吸ふ。

『その一服の旨さといつたら、君達には解らんだらう。われわれの味はつてゐるのは苦痛ではなくて、君達の知らん喜びだよ。』かう言つてゐた。

それで、その眞蒼な顔を見てあまり可哀さうだからといふので、温泉に行つて休んで来いといつて、海軍で温泉場を準備してやつた。ところが、行かない。彼らは決して行かぬ。次に出勤する日が決つてゐる。それからまた續けて行動するには、準備をしなければならぬ。一事でも手落があつたら大變だ、温泉なんかに行つてゐられるもんか、と言つて、結局一日も行かなかつた。だから彼らが、『苦痛はない。』と言つてゐるのは、誇張でもなく、瘦我慢でもなく、眞實なのである。それ

でなくてはやつてゆけない。全く彼らにとつては艦内の不自由な生活が當り前で、娑婆の當り前の所に出て來たときに非常な喜びを感じるのである。これは、長期戦下の一般國民の方々にも大いに参考になることだと思ふ。

海軍では食物は少くても、何も不足を言はない。

これも、訓練でいはゆる習性となつたので、あるからと言つて無理に食はない。あつてもチャンと制限して蓄めておく。その點ドイツの國民生活ではうまくいつて居る。ドイツでは戦争が始つたその日から極端に下げた。それはどんなに食物が缺乏しても、これ以上は下らないといふ限度まで下げた。だから食物もどんどん蓄つてゆかし、食糧状態がもつと悪くなつても、生活はそれより下げないで保つてゆけるといふわけである。

わが海軍が遠洋航海をする場合には、〇箇月分かの食糧を積む、それで、どこにも溢れるほど食物が詰つてゐるが、決して腹一ぱいは食はない、いくらあつても一日一人分いくらくときめて、たくさんあつても決して多く食べない。それで習慣づけて、聽て不自由してもそれ以下には下らないやうにするのである。初めに低くして、それでもつて體を慣してゆけば、それ以上は要らなくなる。それで、たまたに餘裕が出來て、それ以上にもらへると非常に大きな喜びになる。

水などもすゝぶん節約する。水は船にとって實に貴重なるものだ。特に日本の軍艦は、戦争するための艦なのだから、水なんかたつぷりとつて暮すといふことなどとても出来ない。大きな軍艦の兵隊は、毎朝七合の水をもらふ、どうするかといふと、まづ口をそよいで、次に顔を洗ふ。そのあとで手を洗つたりなんかするが、ちよつと器用なものになると、體を冷水摩擦をする。それからハンカチーフの洗濯をやる。もつと器用なものになると靴下まで洗つてしまふ。さうして初めて惜しさうに捨てる。

さういふ精神が作り上げられる一つの要素として、軍人はいつも最悪の場合のことを頭においてゐるのが習慣になつてゐる。士官が艦の當直に立つ。そのとき必ず考へねばならんことが三つある。艦が衝突したらどう處置するか、暗礁にノシ上げたらどう處置するか、火災が起つたらどう處置するか、この三つだけは立つた瞬間に考へる。その備へが腹の中にできてをれば、驚くことは何もない。普通に起る出来事はそれより軽いものばかりである。だから、驚いて處置に窮したり、誤つたりしない。最悪の場合を考へるといふことは、心構へを非常に落着かせる。

これも一般の人々にとつて大切なことだと思ふ。例へば、主婦にしても、今一家の柱である主人が死んだらどうすればいゝか、子供が、突然ブツ倒れたらどう處置したらいゝか、今空襲があつて

焼夷弾を落されたら——といふやうな最悪の場合の處置を、常に腹に据ゑておいたら、どんなことが起つても必ず切り抜けてゆける。その考へ方が廣く、隣組のこと、町のこと、國のことにまで及ぶやうになつたら、しめたものだ。だが、最悪の場合を考へるといつても、決してクヨクヨするんぢやない。クヨクヨしたら、頭の働きも、身體の活動力も鈍つてしまふ。不斷の用心である。それだけの覺悟を持つてゐるといふことだ。却つて、最悪の場合に對する心構へができてゐると、いろんなことにクヨクヨしなくなるものである。

だが、軍艦といふものは、さうした乗員一體の用心があつてこそ浮んでゐる。それがなければ、みんな一緒に死んぢやふんだから……結局、軍艦の形がいゝといふことになると思ふ。娑婆には、隣にも同じやうな家があるから、依頼心のやうなものがある。

しかし、今は日本全體が一つの戦ふ軍艦ぢやないかと思ふ。負ければ諸共に沈んでしまはなければならぬ。だから軍艦になりきることが大切である。乗員全部が最悪に備へる心構へを持つて、ピタツと一致したら、そこに湧いてくる力といふものは、絶大なものがあると思ふ。さうなつてこそ初めて、『米英、何するものぞ』である。

海軍では、お互ひの情誼が、陸上の人以上に濃く結びついてゐる。

「死なば諸共」といふあの言葉の通りである。従つて艦の中の乗組員同士の氣もちは非常によく合ふ。既にお聞きであらうが、一人の魚雷を射つべき配置の人が壊血病になつた。みんなが心配して何とかして治してやりたい、そのためにはビタミンが欲しい、しかし野菜なんかはとつくの昔になくなつてゐる。それで艦内を大掃除して、漸く一個の玉葱を倉庫の片隅に見つけた早速その玉葱を病人に與へた、それで、一應元氣を回復した時に敵とぶつかつた。ところがその病人は魚雷を發射する役目だから、『是非自分に魚雷を射たしてくれ、一生の思出に自分の丹誠を込めた魚雷を一發射たしてくれ』と言つて頼む。艦長も、

『そんなことをしては折角よくなりかけてゐる體がまた悪くなるから。』となだめたが、魚雷を射つ配置にある人間が、魚雷を射つて死ぬのなら本望ではないかと、ひよろ／＼しながら魚雷を射つた。そして見事に敵艦を撃沈したのである。

魂こもる特殊潜航艇

よく特殊潜航艇のことを話してくれと言はれる。

しかし、かういふふうに考へていただけばいいと思ふ。特殊潜航艇といふものは、ごく少い人数の人が水の中を潜つて、敵に見つけられないやうにしてなるべく近くまで行つて、魚雷を射つのである。これだけでいいのだ。それ以上のことを云ふわけにゆかぬ。この構造については敵にも多少分つてゐるかも知れぬ。しかし、兵器を敵に渡すかも知れぬといふやうな時には、必ず執るべき處置を執つてゐる。随つて大切な點は判つてをらぬと思ふ。

それよりも、もつと大切な點は精神力である。あの兵器そのものの秘密は、探つて取れるかも知れぬ。けれども、それ以上大きな秘密は、その乗員の精神力である。それだけは取れない。そこは、日本人の心から心に判つてゐる問題で、特殊潜航艇とは何かといつたら、日本人の精神力の最も發揮される兵器だ、さう思へば間違ひない。

戦争にはいろいろな工夫が生れる。それは一國が興るか廢れるか、勝つか敗けるか、食ふか食はれるか、といふやうな深刻な問題によつかつてゐるのだから、その戦争の際には、必要だと考へられるものが、すべて出て来る。

どの戦争にも新しい兵器が必ず伴ふ。

例へばドイツの磁気機雷、これはマグネットで働く機械水雷で、これもこの戦争の産物である。これが出来て船が直接に觸れなくても沈むといふことになつてゐる。しかし、日本の兵器は優秀である、その上、兵器を造る上にも、日本では精神力が伴ひ、訓練が伴ふ。例へば日本の海軍の戦闘機は今一番新しいものである。

これはどの國でも、日本の戦闘機と闘つた経験のある國では、あんなに立派な戦闘機はないといつて居る。どういふところがいいのかといふと、要するにグツと廻つて敵に弾が當るやうに操縦して、近づいて機關銃を射つて、敵を墜せばいいのだから、さういふのはいい戦闘機である。ところが遠心力といふものがある。遠心力といふものは、廻る半径が小さければ小さいほどひどく作用する、だから、大きな部屋の中をグル／＼廻つても目は廻らないかも知れぬが、一本の柱のまはりをグル／＼廻つたらすぐ目が廻る。飛行機だと、もつとひどい。速力が早い。その速力の自乗に比例して影響してくる。結局、戦闘機は遠心力が大きくなればなるほど、よい戦闘機である。ところが、それは人間に耐へられないことだ。或る限度までゆくと、頭の血が足の方へ行つてしまふ。血がなくなつた頭は働かぬ。操縦者の頭が働かなくなれば、その飛行機は墜ちる。一番いい戦闘機といふものは、墜ちるやうに出来て居る。ところが、墜ちては困る。そこに限度がある。頭の血がズ

ツと足の方へ行きかけるけれども、まだ頭にも残つてゐるといふ限度でやらなければならぬ。日本では、それを人間の訓練によつてやる。どのくらゐ小さな圓で早く廻つても、血が足の方へ行かないものか、さういふ限度を見つけるために訓練する。訓練すると人間の性能は變る。だん／＼早く、だん／＼小さく廻つても、血が足の方へ行かなくなつてしまふ。それが鍛錬である。さうすると人間の性能が上つて來るので、その性能に合ふやうに飛行機を造ればいいのだ。新しい兵器を造るといふ物質的なことの中に、ちゃんと訓練といふことが織込んである。それから日本の兵器はよいのである。

アメリカがソロモンに持つて來てゐる海兵隊といふ部隊がある。それは陸上でも水の上でも闘へる部隊である。その部隊は上陸するのに最も都合のいい戦車を持つてゐると云つてゐる。母艦から水の上に降されると、自分の力で水の上を走つて行つて、珊瑚礁なんかガラ／＼乗り越えて上陸する、さういふ水陸兩用戦車がアメリカには出来てゐる。といふ、さういふものは日本にないのかといふと、それは言ふわけにはゆかないだけのことだ。

それからリビアでドイツ、イタリアがイギリスと戦つてゐるが、この暑さといふものはちよつと日本人には想像もできない暑さである。そのため昭和十六年はタツタ二ヶ月で合戦をやめたが、昭

和十七年は冬の間に準備して、暑い空気が全然入らないやうな戦車を拵へて、その中に冷房装置をした。これはやりいいだらうと思ふ。

さういふやうに必要な迫られると、次々に新しい兵器が出来てくる。戦争といふものは發明の母である。さうして戦争が済んでから蓋をあけてみると各國の差がハッキリ現れる。それはその國の科學性の高さを示すものである。

魂の勝利

航空母艦の上空を守つてゐた戦闘機が、如何に勇敢であるかの例として、敵の攻撃機が急降下爆撃して來るのを發見すると、到底、機關銃でこれを射つてをつたの間には合はないと感じ、直ちに、自分の戦闘機そのものを敵の攻撃機にぶつけて、共に火を噴きながら墜ちてしまつたが、その航空母艦は爲に無事であつたことは、前にも述べた。このやうな、これら實際の戦さの間の勇敢な話は數限りはないのである。

さうして、これらによつて私共は、今から約一年前に、ハワイにおいて發揮せられた我が海軍魂が、今もなほそのまゝに續けられて、今日、南太平洋において華と開きつゝあるといふ事實を認めるのである。ハワイ、マレーの海戦における勝利は、決して形の勝利ではない。魂の勝利である。また、優秀なる兵器の勝利である。訓練の勝利である。更に、精神力の勝利であつた。

今日なほハワイ及びマレーにおいて發揮されたあの大精神は、少しも衰へることなく、南方において、我が祖國を安泰ならしめんとして發揮されつゝある。

ハワイ海戦の壯烈な話は幾度聞いても感激を深めるのであるが、第二次攻撃隊の隊長は次のやうに語つてゐる――。

『風速十七メートル、五度のローリング、通常の練習では絶対に飛出し得ぬコンディション。』

しかし、この風を冒して一機また一機息をもつかせず飛出して行く「頼むぞ――」といふ艦上の叫び「大丈夫だ」といふ機上の答へが烈風に吹流されて來る、打振る帽子の波を縫つてニツコリ笑つた攻撃隊員の顔が大空へと舞上つて行く。

やがて私達が出發する〇時〇〇分が來た、私は一氣に、眞黒い大海の上へ躍り出た、部下も相次いで飛出す、心配した〇〇一等飛行兵も見事な發艦振りだ、ハワイは大嵐だつたと聞いたばかりな

のに、こゝでは大空に寶石のやうな星が輝いてゐる、上空の風速は二十米、この風では果して彈着がうまく行くかと心配である。

飛ぶこと約〇〇分、水平線の彼方に眞紅の日の出を見る。

あゝ、この世の見納めだ、と思ひつゝいつもの朝の遙拜を思ひ出し、これに向つて頭を下げながら、ふつと氣附いたことは、今の私にとつては宮城は後方にあるといふことだつた、改めて西方に向つて遙拜する、眞下の海面には白い波が何も知らぬ氣に美しく立騒いでゐる、大海の夜明けの美しさに、いつしか過去の演習の時のやうな氣分に捉はれてゐる自分に氣づく。

「隊長、面白いものを聞かせませう」と電信員が渡すレシーバーを耳にあてると、意外にも狂騒そのもののジャズの音だ、ホノルル放送局からのものだといふ。

この時私はこの奇襲は必ず成功すると確信した、こつちは隱忍自重して、今こそ國の運命を賭けて起上つたといふのに、彼らは日曜日のカーニバルに酔ひしれてゐるではないか、胸中に湧きあがる憤怒を抑へて唇を噛みしめてゐる時、戦闘は開始されたのだ。

頭をめぐらして後方を見れば整然たる編隊機上の部下達が、右手を一齊に高くあげてゐる、全員の意氣正に天を衝く、快調のエンジンの轟音は進軍の雄叫びの如く響いてゐる、續いて「我れ奇襲

に成功せり」「我れ戦艦を雷撃す」「飛行機〇〇機炎上」とつるべ打ちの快勝の報告だ、「早く行かん」と……私の心は猛り立つた、この時位飛行機が遅くもどかしいものと思つたことはない。

ぼつ／＼雲が現れて來た、前方をきつと睨んで進むうち、チラツと陸影が兩眼に飛込んだ、濱邊には家あり、渚には白波が打寄せてゐる、眞白い壁で組立てられた街々からは朝餉の煙さへ上つてゐる、これこそ目指すオアフ島であつた。

だが、前方は一面の雲だ、思切つて雲層に突込む、視界はいつしか不思議と暗れた、そして、そこに現れた光景は大空を蔽はんばかりの高角砲の彈幕だつた。

いよ／＼死すべき場所に到着だ、侵入針路は彈幕の眞只中へと命じた私は、急いでピストルに彈をこめた、そして次のやうな命令を部下全員に申し渡した。

「歸還不能が明瞭の時は自爆、火災が生じた場合もまた同じ」

さあ準備はできた、戦闘用意！ 部下はニツコリ笑顔とともに機銃を取出す、また／＼雲が出て來た左下にカネオへ飛行艇基地を見る。雲の高度〇〇米、一氣にこゝを飛び越えた、すると私達は忽ち左右に物すごく炸裂する敵彈の眞只中にゐた、眞珠灣上空だつたのである。

眼下を見降す兩眼の網膜を黒煙あげて燃上る敵戦艦がサツとかすめて行つた、私の目標はヒツカ

ム飛行場だ。もう手の届きさうな處に同飛行場がある。

ぐうつと格納庫とその前に見事に並んだ飛行機の一列が大きく近づいて来た、この際一弾たりとも無駄には出来ない、私は慎重を期して通り過ぎた、第二回目に投弾しようと思つたからである。ぐるりと旋回しようとする、左方は一面の密雲、右方は眞珠灣上を蔽ふ敵の彈幕である、雲か、敵弾か、私はしばし判断に苦しんだ、雲間に入れば安全だが爆撃の正確は期し難い、然し彈幕中を通過すれば犠牲はまぬがれぬ、私は爆撃の正確の方を取つた、灣の上空に来るヤボツ、ボツと左右に敵弾の黒煙が見える、つひにはカーン、カーンと金屬的な音とともに敵弾が機體を打つ。

だが……見よ！一機も落ちて行かぬではないか、もう見るものはただ目標ばかり、今度こそは……と遠くから照準をつける、眸を凝らしてちつと見定めると、ある、ある、ロッキード・ハドソン、ボーイング一七が約五十機、づらりと整列してゐる、機内はしばき一つ立たぬ静寂に包まれた、私は低く強い聲で「ヨイ・テツ」と叫んだ。

スウツと小さく後方に吸込まれて行く彈、思はず私は眼をつぶつて両手を合せた「どうぞ、どうぞ……お願ひだ……」と神に祈りつゞけた、すると後方の部下が隊長、命中ですと絶叫した、はつと眼を見開く途端、はつと眞紅の火焰が眼中一ツバイに擴つた。

一塊づつ、はつはつと發する火焰は第一番機から次々と列線なめて、寸時にして敵機の姿は消滅、その傍の格納庫三棟と兵舎は火災を起し黒煙が天に沖してゐる、部下の一人が「ざまあ見ろ！ル：ズヴェルト」と怒鳴つてゐる、振返ると照準手と抱き合つて泣いてゐるのだ。

萬歳、萬歳、編隊機上の各部下は全員両手をあげて絶叫してゐる、さあ任務は終つたのだ、危いからと両手を下させてから、私は歸路についていたが、もう一度旋回して眞珠灣を眺めることとした。言ひつくせぬ興奮と無我の一瞬を通り過ぎて漸く冷靜となつた私が、この眼で見たあの日の眞珠灣頭は、——まことに言葉では現せぬ悽愴なものだつた、巨大な戦艦が艦列をジグザクに亂して斜に倒れたもの、船腹を露呈したもの、まるで脆弱な物體の塊といった感じである。譬へていへば長方形の巨大な豆腐と見えた、これを巨人が五本の指でかあつと引つかいたといへよう。

その爪痕から生々しくもめら／＼と火焰が噴出して、鉛細工のやうにへし曲げられた、マストからも火は上つてゐる、誰かどまるでこま切れのやうだと言つた、米國が誇つた戦艦はあの日の攻撃によつて、こま切れ戦艦に墮し去つたのである、眼に見えぬ偉大な力によつて一舉に破壊し盡されたといつた状況だつた。

帝國海軍の無敵といふ言葉は、末次さんの聯合艦隊が徳山に入つた時に初めて使はれた言葉であ

る。徳山の市民が、例の凱旋門を建て、それに「帝國無敵艦隊歓迎」と書いた。すると末次さんから「そんな言葉を使つちやいかん、どうしてお前達は無敵と言ふのか、まだ戦つてをりはせんぢやないか、世界でいちばん強いと言はれるやつと戦つて、それをやつつけた後に初めて無敵と言へるので無敵といふやうな言葉は軽々しく遣ふものぢやない」と叱られた。

それ以来、海軍部内はもちろん遣はないし、部外でも、無敵といふ言葉を遣ふことを始終警戒した。新聞なんか、すぐに遣ひたがる。それを、その度に、無敵といふ言葉を遣つちやいかんと言つて何度も注意して來つた。やたらに無敵といふことを言つちやをかしいからである。

われ／＼はもちろん無敵でなければならんと思ふし、又さう信じてゐても、さういふことを易々と相手選ばずに遣ふと、厭な感じがする。無敵海軍であるといふことを何を以て證據立てるか、かう聞きたくなる。彼等はなんとなく遣つてるだけで、言葉の意味をはつきり突きとめて遣つてゐない。しかし今度の戦勝では堂々と無敵といふ字が遣へるのである。

五、アメリカの激増する生産力

敵の造艦は進捗する

第一次、第二次ソロモン海戦につき、南太平洋海戦、第三次ソロモン海戦等において敗北、敵の反攻企圖は、またも、致命的打撃を受けつつある。かくして、ソロモン方面の海上、陸上の敵兵力を撃攘し盡くせば太平洋戦は、全戦局から觀て、新たな大きい段階を劃することとなるのである。

しかし乍ら、かゝる情勢をもつて、アメリカが、反攻作戦を放棄しようとは考へられない。現に侮る可からざる物資力、生産力を有するアメリカが、銳意戦力増強に努め、必死となつて積勢挽回を企圖しつゝある事實に鑑みても、今後敵が執拗なる反撃をくり返すであらうことは當然豫想されるところであつて、眞に戦争完遂の努力は、今後にあると云はねばならぬ。

經濟戰——生産戰が近代戰の勝敗を決する重要な要素であることは、云ふまでもない。ことに戰爭が長期化の様相を帯びて來るにつれて、生産戰がいよいよその重要性を認識されるのである。前述の如くわが不敗の態勢の基礎はすでに出來た。すなはち、東はアリューシャンよりギルバート諸島を経て、ソロモン群島に至る線、西はデカン半島よりセイロンに連る線で劃された海域を確保し、豊富な南洋資源——戰略物資を押へたのである。しかし、これに對しアメリカは、西南太平洋への連絡路の確保、作戰線の伸張を企圖して、執拗なる反撃工作をくり返してゐるのである。しかもその反撃企圖を裏つけてゐるものは、その強大を誇る生産力である。かくて戦ひは激しい消耗を伴つた長期戰の形をとつてゐると見なければならぬ。

アメリカが、緒戦以來の敗北を認めながら、なほ且つ『最後の勝利我れにあり』と呼號してゐる所以のものは、實にその生産力に期待してゐるからに外ならない。

現に、昭和十七年一月ルーズヴェルトが議會に送つた教書によれば、其年度の商船建造目標は、八百萬トン、翌年度には、これを一千五百萬トンに増大すると大見得を切つてゐる。現状は如何と云ふに、最近アメリカ海軍委員會副會長ヴィツカリーは、

『本年度の造船量八百萬トン實現は容易である。すでに六月中の新造船額は油槽船及び貨物船六十

六隻(七三一、九〇〇トン)に上つた』と報告してゐる。

四月の造船高は、アメリカ參戰當時に比し、四十五パーセント方の増加と云はれるが、同委員會はその後さらに、七月中の新造船高は七十一隻に上つた旨を報告してゐる。さらに、新聞の傳へるところによると九月には、一日平均一萬トンの商船三隻の建造に成功したと云はれる。

一方建艦情況は如何と云ふに、こゝにも大きな變革がもたらされてゐることを見逃し得ない。それは、從來固執し來つた戰艦第一主義を一擲して、航空母艦中心方針に變つてゐることである。すなはち、アメリカにあつては緒戦の敗北が、飛行機の活躍にあつた點に鑑み、開戦直後航空豫算四十億ドルを追加し、戰艦を空母に改造するとか、或は設計を變更するもの合計十七隻、商船の改造二十隻、建造中の商船を設計替へするもの七十隻に上ると稱してゐるのである。

それから飛行機は昭和十六年は一箇月に千二百隻しかできなかったのが、昭和十七年の四月には二千四百隻に上り、九月には月産四千隻を突破し、十二月には五千隻になるだらうと云つて居る。

いま航空母艦について見ると、海戦毎に航空母艦もだんだん沈められる。そこでアメリカは、商船の大きいのを二十隻選んで航空母艦に直すことにした。更にミッドウエーの海戦で、たつた二隻しかなくなつたので、急にあわて出し、戦時用として造つてゐる一萬トンの商船七十隻を模様替し、

航空母艦にするといふことになつた。そして、毎日一隻乃至二隻づゝ進水する戦時急造の商船七萬トン級のものを七十隻、空母に直すことを決定した。これら空母をあはせると百十余隻になる。此百十余隻の空母をつくり、これにものを言はせて日本海軍を粉碎し、更に日本全土を灰にしようといふのが彼の計畫である。しかし、その数の大きいことに驚く必要はない。彼は一時に百十余隻の空母を以て來るのではない、出來たのは次々に來るが、その度毎に次々に沈んでゐる。従つて敵が非常に多く空母をつくらうとしてゐることなどに日本人は心を動かしてはならぬ、あく迄も冷静に、日本の陸海軍が如何に戦つてくれるかに萬幅の信頼を置いてをれば、その點何等心配はない。

建造計畫大改變

最近の米國新聞の傳へるところによると、米國が、ソロモンの決戦場において、唯一の頼みの綱として、これを米國唯一の對日優越點として擧げてゐるのは生産力の優越による對日攻勢である、これについて米國は次の諸點を擧げてゐる。

- 一、米國は航空母艦勢力に對して致命的打撃を蒙つたが、既に米國はエセツクス、イデベンデンス、プリンスストン、レキシントンの四隻の航空母艦の進水を發表し、更に十三隻の航空母艦が目下建造中であると發表してゐる。米軍事専門家は戦争第二年目において恐らく日本は一月一隻平均の米新航空母艦の出現に當面するであらうと豪語してゐる。
 - 二、米國の主力艦は眞珠灣で撃沈されたものがまだ代艦されない現状にあるが、米國は新主力艦ノース・カロライナとワシントンが既に活躍してゐるのに加ふるに速力二十七ノット、備砲十六インチ、三萬五千トンのサウス・ダコタ級の四隻も既に就役したか、もしくは十七年中に就役するとなし、米海軍主力艦勢力の擴大を誇つてゐる。然し軍事専門家はこれらの主力艦に附随すべき航空母艦、巡洋艦、驅逐艦の不足は、實際の戦闘において主力艦の戦闘力を著しく低下せしめざるを得ない點を自認してゐる。
 - 三、飛行機製造能力においても、米國は一ヶ月の生産量が五千機に達せんと豪語してゐる。但し米國としては、重慶その他の聯合國に飛行機を供給する必要に迫られてゐるが、これを差引いても將來航空勢力においては日本を遙に凌駕する時期が來るのだと嘯いてゐる。
- 以上は、米國が戦争第二年を迎へるに當つて自己の弱點、或は優越點として自認してゐる諸點で

あるが、米國の計算は常に一つの要素だけを抜き出して、これに關聯する他の要素を看過し、いはゆる総合的な見地に立つた判断を缺いてゐる、従つて、われわれは米國が唯一の守り本尊とする生産力擴充に對して、なんら恐怖の念を抱く必要は絶對にない、然し、これと同時に今米國の民主制は獨裁政治形態へと移行しつつあり、行政機構の組織においても一元化の方向を辿つてゐることを絶對に見逃してはならない。徐々にはあるが、米國の戦争遂行を推進する政治力がこの方向を辿りつゝ組織化されようとしてゐる事實に注目の必要がある。

眞珠灣敗戦直後、ルーズヴェルトは海軍陣容の大改革に着手したが、米海軍最高の椅子である聯合艦隊司令長官には、第一次世界大戦に於て米海軍の空軍部隊を指揮した経験のある、空軍に關する米海軍の第一人者大將キングを起用し、その後同大將に海軍作戰部長をも兼任せしめ、作戰計畫と實戰の指導統帥を一任した。

さらに、米海軍は作戰部に新たに作戰副部長なる新職を設け、航空局長タワーズ少將をも兼任せしめることになつたが、この作戰部最高首腦の更迭を期として、米海軍では今まで下積みであつた空軍關係出身者の榮進が目立つてゐる。これは參戰と共に米海軍が實戰の經驗に徴し、空の戰鬪を甚しく重大視する傾向にあることをよく裏書きしてゐるのであるが、その米海軍の實戰部隊（タス

ク・フォース）は航空母艦を艦隊の主力となし、空の提督キング大將がこれを指揮する方向にと動いてゐるのだ。

米國の新聞「タイム紙」はこの點につき、

「一九四二年における米海軍の實戰部隊は一隻または二隻の航空母艦、二隻また四隻の大型巡洋艦、一隻または二隻の輕巡洋艦、六隻または八隻の驅逐艦から成つてゐる。しかし、上陸作戰の掩護とか敵の戦艦と闘ふ必要のある場合には、二十五乃至二十八ノットの高速力の戦艦の掩護を必要とするが、最近の實戰部隊は少くとも三十ノットの高速力で行動する必要があるので、眞珠灣で撃沈された十八乃至二十ノットの舊型戦艦はもはや歓迎しない」と述べてゐる。

斯の如く米海軍は重要艦隊の編成を空母第一主義に一新し、新時代の海戦に備へてゐるのであるが、この革命的變化を體驗しつゝある米海軍は、その建造計畫を如何に改變してゐるのであらうか。

建艦計畫は日米開戦當時、米海軍が引續き戦艦第一主義を固執しつゝあつた。この米海軍首腦部の古い考へ方は眞珠灣、マレー沖の二大敗戦の結果、遂に漸く清算されるの已むなきに至つた。この二大敗戦を喫した直後ニューヨーク・タイムス紙はその社説において、その二大敗戦がすべて日本の海の荒鷲の有效適切の攻撃に基くものであることを指摘し、今後の米海軍の軍擴は第一には長

距離爆撃機と長距離飛行艇、第二には航空母艦と母艦用爆撃機および戦闘機、第三には母艦防禦用巡洋艦と驅逐艦、第四には戦艦の順位で建造さるべきであるとなし、しかして、戦艦の建造はすでに着手されたもの以外は中止すべしと主張してゐる。これは敗戦により米海軍首脳部が漸く戦艦第一主義を清算して、戦闘的航空機とこれを戦闘地域に輸送する航空母艦が、近代海戦により大きな役割を演ずることを認識しはじめた證左と見るべきである。

米海軍はさる六月十六日、戦艦第一主義を解消して母艦第一主義とする、米海軍の根本的編成を意味する、八十億ドルの新擴張案を議會に要求したが、同建造案ではまだ建艦に着手されてゐない六萬トン型戦艦五隻の建造を中止し、これにより捻出された建造能力、資材を航空母艦五十萬トン、甲乙兩巡洋艦五十萬トン、驅逐艦ならびに護送用艦船九十萬トン、合計四百隻、艦艇建造にふりあて、航空母艦を戦闘艦隊の主力とした近代艦隊の整備に着手することになつたのである。なほ新建造計畫の議會における議論に際し、

- 一、開戦當時の米航空母艦勢力は就役中のもの七隻、建造中もの十一隻、合計十八隻であつたが、その後さらに二隻が追加され、これも建造が着手されてゐること。
- 二、米國は開戦とともに、約三十五隻の巡洋艦または商船に改造を加へ、これを航空母艦に改装

しつゝあること、なほこの改造された母艦の一部は武器貸與法に基き英國に提供される豫定であること。

三、なほ、この母艦勢力の増強を目ざす米海軍の編成替へが完成すれば、米國は約八十五隻（巡洋艦、商船の改造されたものを加へて）母艦を所有することになること。

四、米海軍は多數の航空士養成を目指して學生の狩り集めに大童になつてゐること。
などの諸事實が暴露されてゐる。なほ、今米海軍が新建艦計畫により建造を企圖しつゝある航空母艦は情報によれば一萬五千トンのワスプ型と二萬トンのエンタープライズ型との中間と想像されてゐるが、米海軍の一部には對空防禦を専門とする戦闘機のみを搭載する小型母艦をも建造すべしと主張する向きがあり、もし、この主張が容れられるとすれば新計畫により建造される母艦は、その噸數には變化はないものゝ隻數は或る程度増加する結果となる。

かくの如く、米海軍はハワイ、マレーの敗戦を契機として、その建造計畫に根本的改變を加へ、母艦勢力の増強を主とする海空軍の急整備を企圖してゐるが、この米海軍の新傾向に對し、『航空母艦が海の女王として艦隊の主力を形成する時期は極めて短期間であり、母艦もまた間もなく、その王座を陸の基地による長距離爆撃機に譲らねばならぬだらう』と主張し、母艦建造を主とする米

海軍の新建艦計畫は時と金と努力の浪費であるとなす一部空軍關係専門家がゐるのは注目される。なほ母艦をもまた、極めて生命の短い過渡的存在であると主張する米専門家の一派は過般米國で

『空軍による勝利』と題する著述を行ひ米朝野の多大の注意を惹いた。

航空機設計者アレキサンダー・セヴァースキー少佐および陸軍の航空關係者であるが、この一派の主張を航空關係専門家の極端なる理論であるとなし、勝利は爆撃機のみにより得られるものではなく、その陸軍、海軍との緊密なる協力により、初めて確保し得るものであるとして、この航空専門家の主張を反駁してゐる一派もある。

この一派はニューヨーク・タイムズ軍事記者ポールドウインを主とする米海軍首脳部と緊密なる連絡をとる米軍事評論の正統派であるが、この一派の主張を要約すれば

一、近代航空機はすでに著しく發達してゐるので、その性能を現在以上に改善することは可能ではあるが、これをさらに著しく改善せんと企圖することは、技術的にその抵抗を飛躍的に増大し、いたづらに犠牲のみ多くその實益は比較的少い。この戦争の體驗は八百キロ以上の地域に對する空爆は連続爆撃が困難となつたり、その爆弾搭載量が距離に比例し著しく減じたりするので、軍事的に見て不利益とされてゐるのであるから、長距離爆撃機が航空母艦にとつてかは

るまでには、航空機製造が技術的に、現在以上にさらに飛躍的に進歩を示さねばならない。

二、過去における日獨の素晴らしい戦果は、この戦争に使用し得る武器を集約的に製造し、これを速かに實戦に利用したことであるが、母艦の改造は比較的短期間に實行し得、従つてこれを大規模にこの戦争に利用し得ることは可能であらう。

三、防備の脆弱性を理由に母艦の建造に反對する向もあるが、近代海軍の建艦技術は戦艦の裝備を母艦に接近せしめるとともに、母艦の裝備を戦艦に接近せしめ、この兩者の效能を維持しつつ、その特徴を強化すべく企圖されてゐるので、それが實現の曉には母艦の脆弱性はある程度まで克服されるであらう。

といつた點であるやうである。このセヴァースキー少佐が提議した、

『海戦の王座を占むるものは母艦か、長距離爆撃機か』の論争は今後の問題として、とにかく米海軍はハワイ、マレーの二敗戦を契機として、以上述べ來つたごとく海戦における航空機の革命的重要性を遅滞きながら認識し、既にその建造計畫に重大變革を加へ、最近の情報によれば母艦の擴充のみでなく、長距離航空機の増強にも拍車をかけてゐると傳へられる。

過去の認識不足を改むべく、いまだ重となつてゐることは事實だ、そして、この米海軍の空軍第

一主義への轉向はかくすることに、はじめて太平洋の制海權を奪ひかへし得るとなし、それに唯一の對日攻勢の希望をつないでゐるだけに、その今後の發展と成果はわが國としても十分注目に値する。

乗員の養成

生産されただけの兵器は、飛行機臺数が何千機から何萬機に増加し、航空母艦が幾十隻から何百隻に増加しようとも恐るゝに足りない。それを眞に生きた兵器たらしめるためには、人的要素が加はらなければ意味をなさない。したがつて、月産千機から五千機に、年産一萬二千機から六萬機に増加した航空機を誰が動かすかと、いふことは依然として問題となる。

私はいまから五年ばかり前、ヒットラーがはじめてイタリヤを訪問した時、その歡迎に多數の戦闘機が参加して見事なページェントが行はれた。誰が操縦者であるかといふことを聞いた時、すべて専門學校を卒業した學生を四ヶ月間訓練したものである、といふ答へを聞いて私はおどろいたの

ある。これはアメリカにおいてもその通り行はれてゐると判斷してよい。アメリカ人は子供の時から科學的教育が高い。十四、五歳にもなるとラジオの機械分解や組立あるひは自動車の分解手入など科學的教育を施してゐる。大學の學生に軍事教練をする。それからハイスクール、これは日本の高等學校より少し低い程度だから、高等中學ぐらゐのところだが、その學生が百萬ぐらゐゐると、二十萬やそこらの卒業生は出る。さういふ人間を四ヶ月短期特別軍事教育を施して、適性のある者に飛行機の操縦をやらせる。かういふ速中に四ヶ月間、飛行機の場合はこだけ自動車と違ふのだといふ風に教へれば、一應飛行機を操縦することが出来る。同じく爆撃をする場合には一番機によく訓練したものを乗せて後は四ヶ月訓練したものを乗せる。一番機が爆撃した場合は、その通りあとにつゞくものが爆撃すればよい。大編隊の爆撃が出来ないはずはない。

『敵を知り己を知るは百戦危からず』これは何百年も前に東洋人が喝破したところの戦争の要諦である。もしも敵をはつきり知ることが出来ないならば、低く計算するよりも敵の力を高く計算する方が安全であらう。現にアメリカが日本の力をあれほど低く計算しないで日本が強い國である、またどんな事をするかわからない國である、といふことを警戒してゐたならば、あれほどの失敗をしないはずである。故にわれわれはアメリカの飛行機の操縦者海軍士官などの性能をはつきり計るこ

とが出来ない場合は、低く見るよりも高く考へた方が安全である。

そこで私共は敵が飛行機を多数つくり、船を多数つくるが、それを操縦することが出来まいと考へるよりも、適当な操縦者を適当に得られると考へた方が、日本としては安全である。

大東亞戦争が起つて、敵の飛行機操縦者は随分死んだ。

アメリカに限らぬが、敵側は自分の大損害をひた隠しに隠して、日本の戦死は南太平洋で四千五百名などと大デマを飛ばしてゐる。こちらの計算では南太平洋作戦でのアメリカ側の損害は一萬人とみてゐる。

第一次ソロモン海戦以來では二萬二千ぐらゐになる。これは全體の戦死戦傷を合せたものだ。

戦死者はハワイ海戦以來一萬五千ぐらゐではないかと思ふ。何といつても、船はできよう、水兵も『甘言をもつて』集めることはできる。しかも問題は指揮官である。この問題が非常に大きいと思ふ。また非常な焦躁を感じてゐる。それは南太平洋作戦の場合における司令官ゴムリーの更迭といふことになつて現れてゐる。まるで作戦のやり方を知らない。向ふの軍事記者も痛撃してゐるが、その報告を讀んでみると、ちやうど『坐つてゐる鴨を射たれるやうにひどい目に遭つた』といふことを例に擧げていつてゐる。

この問題は實に致命的だ。さういふ自分に都合の悪いことは棚に上げて、飛行機がどうの、船がどうのといふことで氣勢をあげてゐるが、なかなかさうは行かない。さういふ點はよほど冷靜に検討して行く必要があると思ふ。だから、われわれとしてこれからの戦力増強は向ふの壓倒的な數に對する受身ではなく、それを片端から潰してしまつて、これは適はぬといふ風に仕向けなければならぬと思ふ。

指揮官に立派な人物の居ないことを將棋にたとへて語れば、將棋はいくら香車が強くても桂馬が強くても、さし手一つだ。

非常な名手がさす時は歩でもつてよく金銀を倒す、飛車、角をひつくり返すことが出来る。

日本は航空部隊をもつて米英の不沈戦艦を沈めた。これは日本が名手だつたからであつて、アメリカはこれではいけないといふので、今度は逆に香車とか、桂馬ばかり拵へて行かうといふ作戦になつて來た。これは名手の眞似を急に向ふがやることで、ある程度までやれるかわからんが、將棋のさし手が違ふ。

アメリカとしてはやむを得ないが、日本として、弱者が方針を變へたことを實際以上に過大評價してはいけないと思ふ。

やはり一つの陣型としては王将もいるし、角もいるし飛車もいる。さういふものがちやんとあつて、その基礎の上にちやんと立つてやる。

それで航空部隊が非常に精銳振りを發揮することが出来るわけだ。日本でも航空部隊はもちろん整備しなければならぬが、これのみをやればいいぢやないかといふことはいけない。日本は海洋を控へ、大陸を控へてゐるから、航空部隊のみで行けばよいといふことは、これはアメリカの敗戦思想を日本がそのまま模倣するといふものだと思ふ。

日本の航空隊といふものはアメリカの航空隊が香車か桂馬でやるのに對して、飛車か角だ。その上飛車角を使ふ人もいい、そして、金銀を、いやもつと懸命に王将を守つてゐる、日本の國を護るのに金銀がなくてもいいといふことは絶対にいけない。

それはある現象を一つ見て、それで歩さへあれば金銀はいらないといふことにならない。今後多少の影響が出て來ることは、是認するけれども、金も銀もいらぬし、飛車、角もいらぬといつて香車や桂馬ばかりぢやいけない。それはアメリカはやむを得ずやつたことだが、さし手がゐないといふことについては大きな影響があると思ふ。

船も随分沈められてゐる。船員も死んで困つてゐると思ふが、最近は何餘の一策でマストに簡單

な筏をぶらさげてあるといふ。船が沈んで、傳馬船がすぐ卸せばよいが、さうでない時にはこの筏が簡單に外れてそれに乗つて救はれるといふ寸法である。それでも船員は随分死んでゐる。

もう一つ注目すべきことは航空機五萬機を作つてゐるが、そのパイロットを養成するといふ問題も、大量生産的に流し作業式にやつてゐることだ。澤山學校を作つて一つ一つの學校で一つ一つ教へて行く、そしてその學校を全部卒業すれば一通りの腕を持つてゐるパイロットが出来上つて行くといふのである。かういふやうに、とにかくアメリカは獨創性を發揮し、大量生産的な方面に一つのすぐれた才能を持つてゐるのではないかと思ふ。日本もアメリカの悪いところは捨て、出来るだけよいところは取つて行かなければならぬと思ふ。が、それについて私が最近感じてゐるのは、技術者を總動員して研究させ、立派な技術がどんどん生れるやうに仕向けなければならぬと同時に、提案したいのは今後さういふ定石的な手ばかりでなく、定石を超えた方法である。非常時には非常に有能な専門家が必ずしも非常時のな働きをする上に適切ではないのであつて、素人が奇想天外的な卓抜した案をどんどん案出して持込んで來て貰ひたい。かういふものを取上げて實務家技術家のものにして行く、かういふ面がどんどんなければならぬと思ふ。最近はいろいろと飛躍的な計畫、案、面白い技術の解決案が持込まれて來るやうである。

アメリカが大量生産をやつて飛行機六萬機、戦車四萬五千臺作るといふためには、戦時體制に切替へなければならぬ。

ところが技術的な面は、さう簡単に切替へられないだらうと思ふ。向ふの悪いところを強調しても仕方がないが、これはさう簡単に出来るものではないと思ふ。たとへば今アメリカでは自動車工業が年五百萬機作れるが、これを飛行機製作に切替へるといつても、さう出来るものではない。現在でも、自動車工業でアメリカがやれるのは飛行機の部分品にすぎず、自動車工場がすぐ飛行機工場になるといふことは出来ないだらうと思ふ。

結局、間に合ふところからはじめて、部分品を大量に作つて行く、さういふことになる。それで全部の足並をそろへ飛行機や戦車を大量に造り出せるやうになるには少くとも相當の時間はかかる。技術的に見れば相當の時間がかかる。

しかし、アメリカがどう生産をやるかといふことは、見る人は見てゐるので、一般國民はあまり關心をもつ必要はない。

はつきりいへば、皆が職場を通じて働けばよいといふことである。今日生産擴充が豫定通り出来てゐるが、もし遺憾な點が若干でもありとすれば、それは決して大きな問題に躓いてゐることは少

く、みな小さなことにひつかかつてゐるのである。

その小さい躓きに技術者、事業家たるものは細かく氣を配つて、その結び目をほぐして行く、そして計畫生産を計畫通りやつて行けばそれでよいのである。アメリカはこれまで無駄の仕放題であつた。

日本はとてもそんなことはしてゐなかつた。細かい所に氣を配ることが大切だ。そして、一人一割二割の増産をはかる。かりに一割の増産を計畫より多くしたら、それは大したものになる。逆に一割減産したら、これが國力におよぼす影響といふものは大きい。プラスマイナスでは一割増産と一割減産では二割の差だ。それで、國民に力強く叫びたいことは、諸君は諸君の職場を通じて仕事を計畫通りやつて頂きたい、そして克明に小さなところも見逃さないで一つ仕事をがつちりやつて貰ひたい、この一事である。

六、勝ち抜くための生産戦

戦闘と戦争

近代戦が、消耗を伴ふ長期戦である特質を深く省察し、生産の職場が直ちに、戦場につながつてゐること、したがつて、もし生産に遺憾の點ありとすれば、それは直ちに、作戦に至大の影響をもたらすものであることを、心の底から認識しなければならぬと思ふ。

いかに前線の將兵が、訓練に行届き敵撃滅の精神に燃えて、作戦に従事するとしても、これに、所要の精密なる武器を供給し得なければ、敵撃滅に萬全を期することは、出来ないのである。

國民の一人一人が、實戦に参加してゐるのだといふ認識、國民の各自が、その職域に死力を盡すといふ精神、それが戦争遂行の重要な要素であり、戦争勝敗の鍵を握るものでもあることを、銘

記すべきである。

云ふまでもなく、戦争の目的は、敵の抗戦力を徹底的に撃滅し、その戦意を喪失せしめて、最後の勝利を得るにある。だから、各戦闘に勝つただけでは、勝利とは云はれない。假りに百回の戦闘において、九十九回勝ち續けたとしても、最後の一戦に致命的敗北を喫すれば、その戦争に勝ちを得ることは出来ない。

わが國は、開戦以來の各戦闘に勝ち續けてゐるから、この戦争に、今後も樂に勝てると思ふことは危険である。ナポレオンは連戦連勝、歐洲の天地を席捲しつゝあつたに拘らず、ウオーターローの敗戦に、再び起つを得なかつたのである。

「戦闘」と「戦争」は、はつきり區別する必要がある。ことに、今次の戦争は、最後の勝利を獲得する迄は、妥協の餘地のない戦ひであつて、中途半端で中止出来るやうな生易しい戦ひではない。『日本國民を平伏さすには、實戦において徹底的に撃滅する以外にはない』

と、強調して居り、また、南太平洋海戦直後アメリカ政府の意を體した、ラジオ評論家ウイリアム・ウインターは

『アメリカ海軍の目的は、日本を永久に地球上より抹殺するにあり』

と、天人俱に許さぬ暴論を吐いてゐるのである。眞に喰ふか喰はれるか、叩きのめすか、のめされるかである。

これが戦争の本質であり、今次世界戦争の假借なき「激しい姿」である。

かゝる戦争であるが故に、一戦に勝ち、二戦に勝ち、最後まで勝ち抜かねばならない。勝ち抜くために、武力戦の強力なる遂行と、これを基礎づける、生産戦の旺盛なる進軍を、必要とするとは、云ふまでもない處である。だから萬一にも、

『長期戦であるからぼつぼつやればよい』などと考へたら、それこそ大間違ひで、われわれは、その日その日を決戦と見て、これに勝ち抜いて行かねばならない。

また、損失を伴はぬ戦争は、たうてい考へられないのであつて、長期に互る間には、わが方にあつても、相當の犠牲は當然覺悟しなければならぬ。

「七轉八起」といふ言葉があるが、敵は幾度か轉ばされてゐるに拘らず、なほ起き上がり得ると自負して居る。現に彼等は

『損害を受けたら、これを補充すればよい、敗北したとしても、勝利の日が、幾分遠くなるだけである』と云つてゐるのである。

戦局の一張一弛に、神經過敏となり、その都度一喜一憂するが如きことがあつては、この大戦争を戦ひ抜くことは出来ない。ことに主力的海上決戦は別としても、敵は今後頽勢になればなるほど、必ずや潜水艦、航空機をもつてするゲリラ戦を展開するであらうことは明であつて、これが生産戦妨害と全國民の思想戦をねらふものであるから、これに對する十分の備へと、心構へ、覺悟を要するのである。

もとより長期戦と云つても、眞に戦争の大勢を決する重大な時期は、こゝ一兩年と見るのが妥當であらうと思ふ。しかし、戦争を短期に終熄せしめるのも實に軍と云はず、官と云はず、民と云はず國民全てをあげての決意と、努力如何に懸つてゐるのである。この戦争は必ず日本が勝つ。

しかし、それには條件が要る。それは武力戦だけでは濟まない。總力戦だから、精銳なる皇軍將兵が戦ふに必要な武器を生産する、これを造る工員が努力しなければならぬのは言ふまでもないが、國民もこれを鼓舞激勵してやる。彼らを鼓舞激勵して働きたいやうにしてやる。これが一つの條件である。もう一つは、思想戦で國民が勝ち抜くこと。今年のやうに豐作の時は何でもないが豐作でない時でも、食糧は自給するところまで持つて行かねばならない。

さうすれば國民は、榮養を十分に攝れる。そこで不平不満がなくなる。不平不満のないところに

は敵の第五列も思想戦の謀略が出来ない。それが出来れば、戦争に必ず勝つ。
敵の天文学的の數など無暗に恐れる必要はない。われわれは決して、敵と對等の武器の數を持たうとはしない。

しかし、必要な限度といふものがある。宮本武蔵や荒木又右衛門が何百人をつても、今日の國民學校の生徒に、重機關銃を教へたら、この方が勝つ。従つて、科學性の高い、精銳な武器を持たなければ戦争に勝てない。だから、南方のものを開發するにしても、戦争に勝つにはどれをどう開發すればいゝかといふことを、主眼にしなければならぬ。國民生活を豊富にすることは當然後廻しである。戦争に勝つことを目標にして、まづ開發なり生産をやらねばならない。その目標を失つたら非常な間違ひである。

勝ち抜くための生産擴充であり、そのための食糧増産であり、すべてがそのためのものである。これは國民全體が、今度の戦争は世界の新秩序を作るのだ、そのためには長期に戦はなければならぬのだといふことを、はつきり認識し、さうして一億の總力を結集して行けば、必要なものはドン・ドン出来ると思ふ。

海と船への闘争

海洋國家日本の歴史が、海に始まり海によつて榮えたことはいまさら云ふまでもない。

神武天皇が九州美々津を船出し給うてより、天皇の舟師は、九州の北部より瀬戸内海を経て、日向御發航の日より數年の後、浪速に達し、さらに大和に及び、こゝに大和建國の大業を成就し給うたのである。

また、明治天皇は王政維新に際し、

『萬里の波濤を開拓し、國威を四方に宣布し、天下を富岳の安きに置かんことを欲す』

と仰せられた、この御言葉こそ帝國永遠の大理想を御明示遊ばされたものであると共に、帝國海軍創建の御精神に外ならないと拜察し奉るのである。

また御製

『いそしみてますく船はつくらなむ海をめぐらす國のかために』

と詠じ給うたのを拜するが、いづれも海防の急務と海洋思想の振起をお示し遊ばされたものと拜察致すのである。

云ふまでもなく、洋の東西を問はず海に親しむ國は起り、海を疎んずる國は衰へ、海を忘るゝ國は亡んでゐる。すなはち、國民の海洋精神の振否は直ちに海軍力の消長、海運の盛衰に影響し、延いて國運を左右することは明かである、悠久二千六百餘年のわが國運盛衰の歴史も、また海軍力、海運力の消長の歴史であつたといふも過言ではない。

國史を顧みても海上を制歴した時の國運は、隆々として榮え、海上を顧みぬ時は國運は衰退してゐる。神功皇后の三韓征伐は國威を海外に宣揚した輝やかしい例で、一方海上権力の喪失が國運の衰微を招來した例としては、任那日本府が新羅の攻撃を受けた時、當時進取の覇氣に缺けてゐたわが國は救援軍を送つたのであるが、敢へなく敗北し、續いて蒙古の大軍襲來した時も、神風の神助によつて外敵を撃破したものの、當時敵の大軍を海上に反撃するの海軍力をもたなかつた點に思ひを致すと誠に寒心に堪へないものがあつた。その後、豊臣秀吉の雄圖は鷄林八道を震撼せしめ、わが國威は一時大陸を嚮伏せしめたが、前後七年の長きにわたり卅萬の大軍を動かした懸軍萬里のこの戦ひがつひに實を結ばなかつた所以は、秀吉の薨去といふ點もあらうが決定的なものは水軍に對

する認識の缺如から、つひに海上権を握り得なかつた點にある。

前世界大戰におけるドイツにも同様の例を見ることが出来る。當時ドイツ皇帝は「ドイツの將來は海にあり」とし、艦隊法まで制定して海軍建設に取りかゝつたが、これが完成を見る暇もなく大戰となつた。しかもドイツ陸軍はシュリュューヘン元帥の陸上二面作戰を金科玉條とし、海上よりの敵は陸において撃滅すべしとの思想強く、海上作戰を輕視するの傾向があつたやうに見受けられる。ドイツが敵兵を一步もその國內に入れなかつたに拘らず、つひにあの悲運を見るに至つた原因は種々あらうが、大戰後海相テイルピッツ提督が海軍戦死者の碑に「ドイツ國民は海洋を知らざりき」と誌してゐるのは誠に意味深長なる言葉と思ふ。

前大戰に鑑み、ドイツが今次大戰においては雄渾なる作戰を展開、海上においてイギリスを苦境に追ひ込みつゝあることは云ふまでもない。たゞこゝで銘記しはければならぬことは、海上権力と云ふものは組織ある商船隊と、これを擁護し、その交通を確保する精強なる海軍によつて初めて成り立つものであることである。わが國における八幡船の例を見ればこの點がはつきり理解出来る。

八幡船は單なる海賊ではない、むしろ立派な貿易船であつた。しかるに何故にこれほど活躍しながら國運開拓の基礎になり得なかつたか、それは八幡船が國家を背景とする商船隊の組織を備へ

ず、且つ海軍艦艇の協力を持たなかつたからである。幕府は寛永の鎖國令で國內における造船をも禁ずるにいたり、八幡船の活躍もいつしか凋落、海上権力の立場から見ても、日本の暗黒時代があつた。徳川の鎖國時代の間、太平洋には各國の斬取り勝手時代がはじまつたのである。

『海を制するものは世界を制す』といふ思想は、古く十四世紀頃から唱へられた。如何なる國家も民族も、その國を成す不可缺の條件として、海上権制海權を握ることを最上の國策とし、それを續つてお互に熾烈な爭鬪戦を續けて來た。時移つて廿世紀の今日に至るもこの思想に變化はなく、むしろ國家發展の要件として『海を制する』考へはますます重要性を高めつゝあるに照らしても、いかに海上権が重要な役割をなしてゐるかは今更云ふまでもない。

ところで海上権力の確保は單に海軍力のみを嚴存するをもつては全きをせず、輸送力、船舶問題が重大な意義をもつことを忘れてはならぬ。近代海洋戦が『輸送力の戦ひ』といはれるのもこの意味に外ならぬ、この例として最近における米英が海上戦力の決定的低下と共に、船舶問題について如何に苦悶しつゝあるかを一瞥しよう。

帝國海軍部隊は開戦以來、十月までに三百六十六隻、百九十三萬噸の敵船舶を撃沈してゐるが、最近約一ヶ月間に西印度洋方面で撃沈した敵船舶だけでも廿五隻、約廿萬噸に及んでゐる。一體イ

ギリスの絶對所要船舶噸數は前大戰の實例などよりして七百廿萬噸位といはれてゐるが、獨伊側は最近毎月平均六十萬噸を撃沈してゐるので、この状態が續くならば、造船能力を加味しても今年末を出でずして、この絶對所要噸數は底を割るのである。デーリー・エクスプレス紙は

『最近西部印度洋における頻發する聯合國商船の撃沈は、日本潜水艦によるものであるが、その影響は單に船舶の喪失に止まらず、看過できぬ重大問題である。樞軸側による撃沈船舶數と造船數との開きは、英國が嘗つて遭遇したことの無い一大危機に達し、英國の戰爭繼續能力を重大な脅威にさらすものであるからである』

と悲鳴をあげてゐる。この調子で、樞軸側がいよゝ相協力して米英の船舶を撃沈し、敵交通路の脅威を強化して行くならば、米英の造船力がかかるに撃沈量を下廻る現状では、イギリスの運命は數量的にも、はつきり計算し得るところである。一方アメリカが船舶をイギリスに注ぎ込めば、注ぎ込むほど、今度はアメリカの命とりとなることも明瞭であらう。現にアメリカが油で苦勞し御自慢の自動車も、民需工業もガソリン不足で大制限を餘儀なくされてゐるのも、船舶不足を物語るものである。また造船所が如何に能率をあげようとしても材料が集まらなければ船にはならぬ。ルーズヴェルトのかけ聲政策だけでは船舶は建造出來ない。

アメリカ政府はしばしば「数字の魔術」をもつて國民を欺瞞し、大造船がたやすく出来るやうなことをいつてゐるが、撃沈される船舶量を計算に入れると彼等にも大きな悩みがある。

痛し痒しこの矛盾が解決しないかぎり、老なる資源を擁してゐても、アメリカはやがて全身麻痺に陥ることは必定である。ましてアメリカがイギリスの遺産相續を狙つて、世界中四方八方に手を擴げ、これがため必然的に船腹を對英援助に注ぎ込む限り、わが海軍の有効なる通商破壊戦により益々大量の船腹を失つて、つひにはイギリスの遺産どころではなく、アメリカ自身が破産の憂目を見ることは明かである。

この意味において、わが海軍が米英の交通線を破壊し、獨伊と呼應して敵船舶を撃沈してゐるとは重大なる勝利への突進を示してゐる譯である。

次に拿捕船であるが、わが海軍は、從來の南方攻略戦において、相當の拿捕船を得て帝國船舶に磐石の安全度をくはへてゐる。大洋作戦においては敵船の拿捕回航といふことはなかく困難なことである。ところがかかる至難な敵船拿捕にわが勇敢なる商船學校出身の海軍士官が活躍してゐることは頼もしき。

わが交通線は、東亞共榮圏といふ實にまごつた地形的の良條件に恵まれてゐるといふ強味をも

つてゐる。敵は潜水艦を集中してしきりに我方を狙ひ、その爲め若干の損害を受けたが、その後の被害は極めて僅少であり、他面造船も非常な馬力をかけてゐるので漸次増加しつつある。とくにわが方の特色は、機帆船、ジャンク等がわが國民性に適し、米英に比してはるかに發達してゐることであつて、その總括的船腹量も非常に大で、しかもこの方面が大規模に働き出しつゝあるので敵側に比し格段有利なる情勢にある。

このやうに船舶問題が戦争遂行上はもとよりのこと、戦後經營、とくに大東亞建設の大業を完成する上に極めて重大な要件であるが、それには、さらにこれを強力に基礎づける、海洋を征服する烈々たる精神がなければならぬ。大和民族のかゝる海洋への進取の氣象は時に銳鋒を現はすの機會に恵まれぬことはあつたが、内に燃え盛る烈々たる氣魄は減すべくもなく、現にわれわれの身内に流れてゐる筈である、國民の一人残らず海への認識を深め、海への鬪魂を養つて、大和民族の使命顯現の推進力たらしめることを、現下の急務と思ふ。

いまや米英撃滅の海上作戦はいよいよ強力に押し進められ、わが海軍による海上權は敵船舶の撃沈の増加と共にいよいよ確保され擴大されつつある。しかしながら「帝國海軍は無敵である、海のこととは海軍にお任せしておけばまい」といふが如き安易な氣持ちに墮してはならぬ。精強な海軍は

國民から游離しては存在し得ない。眞に強力な海軍力といふものは、常に整備され訓練された海軍と、海洋に關心をもち、海上権が如何なる意義をもつものであるかを理解し、これに率先協力せんとする國民の熱意が抱き合つて、はじめてその威力を發揮し得るものであることを銘記しなければならぬ。

我等は海洋國民である、しかも今やわが肇國以來の雄大なる海上権は樹立されつゝある。この秋、我々の血脈に相繼いで流れるものこそ、確固たる海洋思想でなければならぬ。海洋國日本の今日あるは素より海國日本を創造し給へる天意の深遠なるに據るとはいへ、また我等の祖先がよくわが肇國の本質を自覺し、國家の經營に當つた賜であることを深く認識しなければならぬと思ふ、海は我等の生命線である。

次に現下の情勢において戦時物資の生産増強は何よりも緊急かつ重要な問題であつて、國の全力を擧げてこれらの生産増強に邁進せねばならぬことはいふまでもないのであるが、これを達成するがためには必勝の軍隊に要求されるどころの旺盛なる精神力、そして高度の技術、ならびに精巧なる機械力を必要とするのであらう。

すなはち旺盛なる精神力といふことはわれわれが現在立つてゐるところの事態に對するはつきり

した認識と、將來この戦争が發展して行く状況に對する明確なる見通しの上に立つて、眞に國を擧げて戦争をしてゐるといふ意識のもとに、いはゆる戦時生産を行ふ心構へを意味してゐるものであり、高度の技術とは絶えざる修練と錬成によつて、この旺盛なる精神力を裏づけるに足る物心兩方面の力を意味するものである。

また精巧なる機械力といふことは生産に必要な設備の問題であつて、その精度の高いことは勿論、各設備が均衡がとれて生産の増強に資するやうに、配置されることをさしてゐる譯である。

この三つの要素のどれを缺いても、生産増強の目的は達せられないのであつて、われわれが現在および將來に、戦時下物資の生産増強を推進して行く上においては、この三つの要素にして果して缺くるものはないか、また缺くるものがありとすれば、これに對して適切なる施策を講じて、いやが上にもこの三つの要素を擴充強化して行くといふことでなければならぬと考へる。

唯、そのうち最も現下の状況において困難な問題は、いふまでもなく機械力の問題、すなはち物的方面の事柄であつて、限りある資材と、あるひは制約せられた原材料とをもつて、生産増強を擧げなければならぬが故に、この方面における特殊の工夫と創意を必要とすることは當然であり、また高き技術の方面においてはこれまた現在の状況において、労働力の質——一般の技術といふも

のが各種の事情から、やゝともすると低下しがちな傾向を持つてゐるからして、これに對して適切なる方策を講じて絶えず修練、錬磨し、必要なる熟練を積んで、その技術を向上さして行くことは、なほ工夫を要すると考へるのである。

旺盛なる精神力については、國民すべて、前線といはず銃後といはず、日本獨得の皇道精神の發揚、大和魂の顯現といふ事柄は大東亞戰爭以來一億一心となつて示されて來てゐるところである。けれども、いやが上にもこれを昂揚することは現下の状況からいつて最も必要であり、また、やゝともすると、緒戦の赫々たる戦果に幻惑せられがちであり、また戦争が長期にわたる時においては、その間にともしれば氣の弛みを生じがちなものであるが故に、これが精神昂揚について絶えず適當な處置を講じて行かなければならぬと考へる。

いづれの場合、いづれの問題についても、最も必要なことは生産を増強し、これを推進すべき責務を有するものが陣頭に立つてこれを鼓舞激勵し、また錬成を指導し機械力の方面すなはち原材料の獲得、また機械設備の配置およびその運営に關して、適切なる改善とその缺陷を是正することを行つて行く必要があるであつて、この意味において、生産増強は責任者が現場を把握し、現場中に仕事を進めて行くことが何よりも必要であらうと思ふ。

職場の女性に期待するもの

職場に婦人も進出してゐる。まことに頼もしく力強い。その産業戦線に働く婦人に希望したいのであるが、例へばタツタ一つの物を拵へる受持ちの女性があるとす。それで、こんな小さな物だから、どう造らうが構はないぢやないか、こんな小さな物を多く造らうが少く造らうが、自分はそんなに國家にとつて大きな存在ぢやないんだ、と考へたとす。ところが、そのタツタ一つの小さな物がよく出来てゐるかどうかといふことで、飛行機が飛べるか飛べないかといふことが起る。さうして、それはやがて國家が戦争に勝つか敗けるかといふことにまで響くのである。

だから、どんな仕事でも決して卑下する必要はない。それどころか、その人の職域がみんな一つ一つ戦争に勝ち得る要素になるのである。それは勿論女子のことだからさぞかし身體の工合の悪いこともあらうし、疲れてゐることもあらう。しかし、これだけは自分がやらなければ駄目なんだ、これを自分がやらなければ戦争は勝てないんだといふ氣持になつたら努力して欲しい。パラシユート

を作った工場の成績を聞くと、あれは女子が作ったのだが、大成功であつた。あれは女子の緻密性と、まごころが勝ちを制したのである。

婦人が生産の職場に出る場合に、問題に上るのは、男子が徴用せられてゐるやうに、女子も國家のお召しに應じて出なければならぬ、その場合に、男子の方は兵隊として何時でもお召しに應ずるといふ氣もちが植付けられて居るけれども、女子はまださういふところまで訓練されて居らぬが、どのやうな心構へが必要かときく人が多い。

それは戦争の現状をよく判らせることが必要である。これから戦争なんだ、建設戦だ、決して戦ひに勝つたのぢやない、これから戦争が始まるんだ、この戦争に勝つためには、男子の力が足りないならば女子が出てゆく。それが當り前ぢやないか、さういふ考へになればいいのである。女子が男子と區別される必要はない、國を思ふ氣もちに違ひはないんだ、さう考へてどしどし出てゆくべきであらう。それでも、自分は女子だから厭だといふやうな氣持の者は、これはちよつと鍛へ直さなければいけないと思ふ。たとへ徴用されたとしても、國は決して無理な働きを要求することはない、その人の體力、その人の智力に合ふことをやらせる。女子に風の吹きつばなしの草原に出て鐵砲を射てなんといふことは命じやしない。

女性一般がもつと／＼生産部面に出て來なければならぬと痛感するのである。敵アメリカなんかの實例によつても、女子が軍需工場で働いてゐる數といふものはいへんな數である。

今まで彼女等の目標は、映畫やキモノやお化粧でしかなかつた。そのアメリカの女達の前に享樂主義の共和國アメリカといふ國が消えて、總力戰的な獨裁國アメリカといふ國が浮き上つて來た。その事態をわれわれは深く認識しなければいけないと思ふ。

七、心の米英撃滅

敵の精神的謀略

ゲリラ戦には、飛行機によるものと潜水艦によるものとの二種があることは既に述べた。飛行機により空からするゲリラ戦は國民の住居を焼き、軍需品生産工場を焼くのが目標である。或は特に暴虐なるアメリカのことであるから國民の一人一人を殺さうと企てるかも知れない。

潜水艦により水中からのゲリラ戦は、わが輸送船を狙ひ、南方から運んで来る軍需物資を沈め、國民の生活に缺くことの出来ぬ、米その他の食糧品を沈めるであらう。それで國民が動搖するところを敵は狙つてゐるのである。

軍需物資を沈め軍需工場を焼く、これは近代戦においては當然あり得ることであるが、それな

くても武器はどんどん消耗する。

例へば飛行機の如きも戦闘による消耗のみでなく、次から次へと造つて前線に送らなければ戦争は続けられないものである。

今日ソロモン方面その他の第一線における將兵の願ふところは、早く良き飛行機、良き兵器を送つて呉れといふことである。われわれ銃後の國民としては、この第一線將兵の要請に對しても、またこの上とも勇戦、よく勝ち抜いて貰ふためにも、十分なる兵器を送り得ないやうでは、決してその務めを果してゐるといへないのである。

銃後國民の最も大切な務めは、第一線將兵の戦ふに絶対必要である武器を十分に供給することであり、そこに、今日特に緊要視される生産戦の重要性がある。その生産戦が頓座するやうにと狙ふのが敵のゲリラ戦であり、また食糧品を無くするといふことが最も重要な思想戦である。

こゝで参考のために前大戦におけるドイツの實例をお話しよう。この前の歐洲大戦で、獨逸軍は極めて勇敢に戦ひ、敵のたゞ一兵をも自國領土内に入れなかつた程の勝利を武力戦では收めた。

しかるに、四年間の戦争で漸く食糧の不足を生じ生産力が弱つて來た。特に食糧の不足は國民の士氣を沮喪させ、やがて、不平と不満が起つて來た。その不平と不満は敵の最も重要視し、また待

望してゐたところで、之こそ敵の第五列部隊の思想戦の最も大切な苗床である。そこで敵は活潑な思想戦を開始し、

『ドイツ國民諸君、何を苦んで餓死までしながら戦争を続けるのか、事は簡單である。諸君がカイゼルと軍國主義とに反抗して共和政體をつくれれば、われわれは直ちに諸君と握手し賠償金も取らない、領土も取上げない、陸海軍もそのままにする公正なる條件で平和條約を結ばうではないか』と呼びかけた。

この誘惑は、俄るに潮しつゝあつたドイツ國民にとつて、この上もない魅力であつた。

遂に第一線將兵が勝ちに勝ち抜く最中、その後方にあつては、ドイツ共和國建設の運動が着々として進展してゐたのである。

かくて、その結果はどうであつたか、平和條約を結ぶ時には、さきの約束は一切フイになり、取らぬといつた賠償金は天文學的數字によりドイツ國民が何十年働いても返せないほど負はされ、何百萬とあつた軍隊は、わづかに憲兵として十萬を残しただけで、海軍は巡邏艇として一萬トンを残したに過ぎなかつた。

若しヒットラー總統の如き英傑が出現しなかつたなら、ドイツ民族は今日なほ廢滅の底に沈淪し

てゐた筈である。

たゞ單に、思想戦に敗けたといふ事實は、かくの如く悲惨なる状態にドイツを陥れた。このことは、よくわが國民が知つて置く必要がある。

戦争とは何百回かの戦闘を全部集めたものであり、戦闘において勝ち抜いたことが必ずしも最後の戦争の勝とはならない。英米は緒戦には敗けたが最後にはこの戦争に勝つのだと稱してゐる。そして戦争に勝つための努力をしてゐる。故に日本は戦闘に勝つたといつて油断はならない。九十九回の戦闘に勝つても、最後のたゞ一回の戦闘即ち百回目に徹底的に負けたら、その國は戦争に負けるものである。

特に心すべきことは武力戦に負けても亡びた國は殆んどないが、思想戦に負けた國は例外なく亡びるといふ事である。

ドイツがそれであつた。今日敵の狙ふところはその點であり、日本の食糧を不足させることにより、日本人に不平不満を起させ、その不平不満に乗じて思想戦をどんどんやれば、これで日本を亡ぼせる、これが敵の計畫である。今日食糧増産の高く叫ばれてゐるのも、その理由からである。

私は食糧増産問題に關聯して一つ申上げたいことがある。それは習慣をつけることである。

元來日本人には胃袋の病氣が非常に多いが、これは澤山食べる習慣がついたからであり、胃壁がいつばいに張り切らぬと満足しない癖の人が重い胃袋の病氣をする。

胃袋の病氣などはあまり名譽な病氣でなく自慢にはならぬ。海軍では長い遠洋航海に出るとき非常に澤山の食糧品を積んでゐるが、澤山あるからといつてこれを無暗に食べたら、航海の途中で乗員はみな飢えなければならぬ。そこで初めから量を計つて、少量宛食べてゆくから長い航海も無事に出来るし胃袋の病氣も少い。

だから、あるからといつて澤山食べるといふ幼稚な遣方をせず、最初から計畫して食べ、腹いっぱいにならないで満足するやうに訓練することが肝要である。

一家の主婦がひとつ智慧を絞つて、貧しい食物を豊かに、しかも全家族が榮養が攝れて腹がひもじくなく、不平を言はない様に工夫をして戴きたい。

これは婦人の智慧と努力とで十分に出来る事である。これが習慣となり一億國民誰もが不平がなくなれば、敵の思想も施す術がなく、従つて戦争に勝ち抜くことが出来るのである。

私はこゝでもう一つ、戦争に勝つ秘訣をお傳へし、協力をお願いしたい。

元來、敵米英やオランダなどは、日本の強くなることを非常に嫌がつた。それは東洋方面に自分

達が發展しようとして考へてゐるのに、その東洋に最も強い國日本が出来て来ると、東洋を思ふやうにすることが出来ない。

そこで、これを弱くなるやうにする。これが即ち謀略の基である。

彼らはまだ物質においては日本に勝つ自信があるが、たゞ日本の精神の大和魂だけは何んとしても苦手である。これがないやうに或は弱いやうにしよう、そこに彼等の精神的謀略がある。その謀略の實行に當つては、日本が西洋のことを何もかも喜んで取入れようとしてゐる。

これに織込んで、米英的のあらゆる悪思想を植付けようと企んだ。従つて日本に七十年にわたつて入り込んだ西洋文明には、敵米英的思想が多分に含まれてゐた。

現在の日本の中にも、なほそれが決して残つてゐないとは言へない。日本人の顔はしてゐるが、心は米英人であるといはれても仕方のない人もある。皆が一度自分自身の心を診察して見ることである。即ち自分が物を考へる時に何を先に考へるか、自分さへよければ他はどうでもよい、更に極端になると自分さへよければ國はどうなつてもよいといふ、かういふ考へ方、これがすべて敵米英の思想である。さういふ考へを持つ人は日本人ではない。日本人の標本はわが第一線の勇士にこれを見ることが出来る。